ヰ-2K-8

17-331

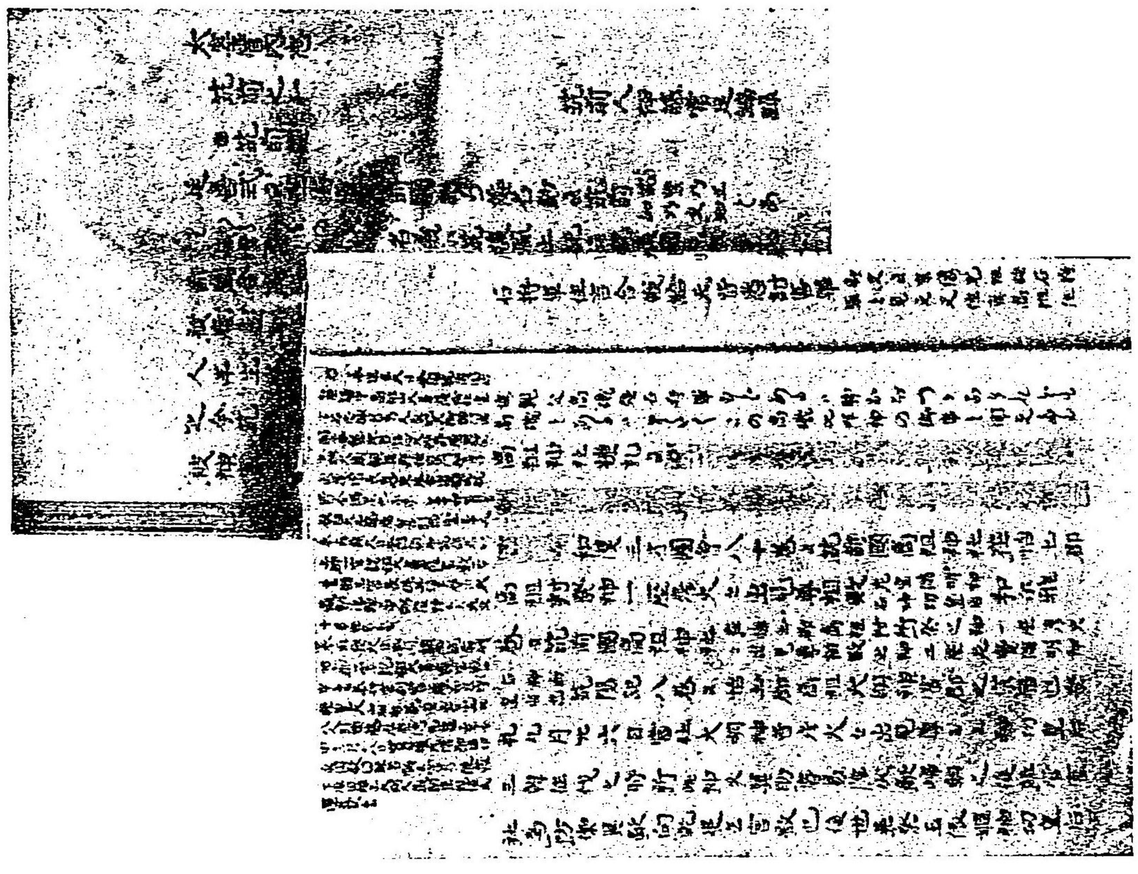
太宰管内志

卷上

故伊藤常足編錄

筑前之部

明治
41 9 12



太宰管内志上卷目錄

伊藤常足肖像○筆蹟(原書)
太宰管内志の出版に就きて
例言
著者略傳
序　島村彬士質、鋸谿井土周磐
凡例
筑前之一
國志之一……一
筑前之二
國志之二……二〇
筑前之三
怡土郡……三九

怡土郡志○志登神社○高磯比咩神社○雷神社○曾祖岐社○竺折大權現○染井權現社○長野宇美宮○湖野權現社○千如寺○仲坊○惣持院○寶池坊○原田八幡宮○觀音寺○夜船寺○小殿寺○金剛寺○久安寺○志摩神宮寺○權現社○十樂寺○天下天神社○龍國寺○醫王山社○櫛田寺○瑞梅寺○延命寺○金龍寺○高麗寺○瑠璃光寺○子負原○深江驛○怡土城○比賣島○怡土濱○餽田郷○託杜郷○大野郷○長野郷○雲須郷○其人郷○石田郷○海部郷○右勢○加菩里○加打奴馬○浮岳○主船司○海鹽津○鞍持

筑前之四

志摩郡……八二
志摩郡志○怡土二宮○今津宮○今津四所社○登志社○登志寺松尾社○登志寺阿蘇社○今津熊野社○齊願寺○齊福寺○佛明寺○潮音菴○廣德菴○江月菴○住喜軒○能滿寺○妙泉菴○安養寺○萬德寺○桃林軒○正玉菴○寶持菴○慶雲菴○願德菴○淨光寺○法涌寺○法門坊○寶藏坊○大泉坊○寶泉坊○四方院○勝福寺○萬福寺○阿彌陀院○今津○稻積城○韓亭○引津亭○可也山○北崎津○韓良郷○久米郷○登志郷○明敷郷○雛永郷○川邊郷○志摩郷○舟越津○於露島○多賀里○安富庄○五龍山○眞清水觀音堂○六社宮○小田觀音堂

筑前之五

早良郡上……一二一
早良郡志○背布利神社○飯盛神社○壹岐神社○十二所權現社○住吉神社○自非遂社○若宮神社○權非遂社○十六天神社○光行宮○四宮○興薩寺○王子宮○妙見社○天神社○妙見大菩薩社○正覺寺○崇德寺○老松社

筑前之六

早良郡下……一四六
油山天福禪寺○觀音寺○長樂寺○觀音寺○盛王寺○大聖寺○神松寺○興德寺○壽寶寺○圓覺寺○大圓寺○東門寺○乘藝坊○大教房○心融房○功惠房○能巨島○也良崎○毗伊郷○石蘭師堂○能解郷○額田郷○早良郷○平群郷○田部郷○額田驛○田池大日堂○野觀音堂○生松原○姪濱○紅葉原○島嶋○潮山○別府塚原○赤坂○安樂平城○正淨寺

筑前之七

那珂郡上……一七八
那珂郡志○住吉神社○宮崎宮○博多櫛田社○警固神社○綱敷天神社○承天寺○聖福寺○妙德寺○藥王院○東長寺○博多善導寺○大乘寺○稱名寺○妙樂寺○龍宮寺○松樂寺○潮嚴精舍○院使寺○明光寺○崇福寺○五智輪院○博多禪勒寺○博多七堂○博多七觀音○入法寺○施藥院○海蔵寺○飛來權現社

筑前之八

那珂郡下……二一三
裂田溝○瀦河○迹驚岡○石溜驛○大津城石塔地○博多津○鴻臚館又賓館○莵津○奚野驛○簑島○田來○日佐○那珂○其人○海部○中島○三宅○山口○板曳○伊知○那津○磐瀨宮○築城山○蟹尾城○伏見驛○宮崎○警固處○千代松原○大唐街○宮崎濱殿○住吉○井崎○岩戸○博多七里灘○博多百堂○呑碧樓○博多橋○通津橋○博多沖濱○しろしの松○見渡關

席田郡……二四八
席田郡志○石田○大國○新居○久爾驛

筑前之九
糟屋郡上……二五一
糟屋郡志○立花城○香椎廟○志加海神社○勝馬神社○宇美宮○住吉神社○櫛日宮○大森神社○武內宿禰社

筑前之十
糟屋郡下……三〇九
志賀島井浦○磯良崎○大浦○勝馬浦○打昇濱○吾嶽島○阿蟹○名島○小山田邑○芋湄野井山○櫛日浦○海中道橋○厨戸○大村○池田○柞原○勢門○敷梨○糟屋屯倉○若杉神社○爽守驛○報恩寺○新宮濱○香椎宮濱殿○天降神社○三苫虛空蔵堂○冠者閻王禪寺○賢聖院○延年寺石桑寺○香椎宮舍○小物(鷹野)○神山○多々良濱○那多○極樂寺○顯孝寺○長者原○辨財天社○獨鈷寺○清瀧寺○六所權現社○櫛島

筑前之十一
宗像郡上……三四七
宗像郡志○宗像神社

筑前之十二
宗像郡中ノ上……三八九
中津宮○奧津宮○織幡神社○許斐權現○孔大寺權現○伊豫社○第二宮○上高宮○下高宮○正三位社○息正三位社○御廟院○政所社○惣社

筑前之十三
宗像郡中ノ下……四一五
木皮社又深宮又宮殿○浮殿社○年毛社○浪折社○余波明神社○黑尾社○津加針志社○稻庭上神社○吹浦社○興里嶽社○森神社○宮地嶽神社○大神明神社○河上大明神社○五位大明神社○地主明神社○只下大明神社○御衣代大明神社○津田明神社○木船神社○猿王子神社○犬王丸神社○四道神社○小野井神社○息直神社○原姬神社○福松神社○岡堺神社○須多田神社○和歌神社○勝浦神社○比々社○示現明神社○年津雨上神社○酒多神社○草上社○四辻社○御舟濟社○今宮社○藤和社○山神社○渡津社○柳牟田社○蛭田若宮社○內殿若宮社○龍王社○年所社○祝詞社○山手神社○酒多神社○辻原若宮社○本木若宮社○年津久神社○大井神社○飯盛神社○國玉神社○朝拜社○風早社○息送社○九日社○藤宮社○神興社○山下神社○土穴若宮社○妙見社○荒熊社○山部社○御竈社○山師社○君遠社○千得大明神○山田妙見社○池田若宮社○飯盛小盛神社○溫濟殿社○縫殿社○的原社○八所宮○御嶽社○白山權現社○嚴島社○泊若宮社○山田若宮社○勝村大明神○御鎧持明神社○芥神社○今社○館貢船明神社

筑前之十四
宗像郡下ノ上……四四一

大行事正三位社○椙崎神社○星宮○上粉明神社○伽藍明神社○機織明神社○善神王社○十所王子社○王子御前社○高津七郎殿○下津七郎殿○上六御前○下津六御前○幡殿○在自社○内殿若宮○許斐所主明神社○御舟上明神社○朝町大明神社○廻田道祖神社○日吉明神社○唐坊八幡宮○西神殿○北崎神社○由牧殿社○飯豐神社○御靈神社○祓方（ハライ）神社○蕊木神社○牧口大明神社○光岡若宮社○西塔田若宮社○池浦山王社○久末神社○酒井大神社○門守神社○池田若宮社○許斐嶽城○荒船御社○彌陀經石○色定法師木像○國連神社○人見神社○老松社○宗像郡朝町村鐘銘

筑前之十五

宗像郡下ノ下 ……四六五

鎮國寺○承福寺○隆尚菴○帝見寺○田島彌勒寺○惣樂寺○神閑寺○橋崎寺○吉原寺○四塔院○實相院○華嚴院○東光寺○山之坊○般若院○吉祥院○興聖寺○田島醫王院○佛成寺○祥光寺○繼幡（ケイバン）觀音堂○願寺○景聖寺○覺王寺○祥雲寺○芦屋（アシヤ）觀音堂○中山寺○延壽寺○遊蛇（ユダ）藥師堂○慈濟院○慶福寺○孔大寺千手堂○報恩寺○校眞寺太子堂○妙湛寺○正法寺○安養寺○增福菴○善福社○定林寺○金崎○名見山○大島○宗像山○簑生郷○みのふの浦○津日驛○秋郷○山田○恰土郷○荒自郷○野坂郷○荒木郷○海部○席内○深田○辛家○小荒○大荒○津丸○田島○息御島○波津○神湊○九明盧公墓○高尾山○泊島○經島○桂潟○鎮國寺石佛銘○赤馬院

筑前之十六

遠賀郡上 ……四九七

遠賀郡志○高倉神社○狩尾社○杉守神社○八劔神社○王子宮○安屋若宮社○戸脇神社○鷹見宮○安屋祇園社○藤田春日社○久賀大明神○小嶽山白山社○小嶽山熊野社○朝木大明神社○大歳神社○手野妙見社○蓮屋與社○高家妙見社○中息明神社○山田妙見社○手野若宮社○室神○若松貴船社○海老津貴船社○熊野權現○山田森明神○高山權現社○赤良見明神○沼貴船社○厩崎貴船社○糟塚貴船社○大崎貴船社○熊野若宮社○山崎神社○志々岐社○黑尾社○今和泉社○高倉天滿宮○印鑰神社○高家大明神○内浦若宮社○氏森神社○八劔大神社○赤良見阿彌陀堂○安樂院○今熊野○海藏寺○勝樂寺○丈六寺○手野阿彌陀堂○安養院○金蓮寺○白岩山勝福寺○長樂寺○禪藤禪寺○龍昌寺○總尊寺○法輪寺○千手寺○總持院○屋住菴○千光院○芦屋（アシヤ）觀音寺○安養寺○仁福禪寺○福嚴寺○東光寺

筑前之十七

遠賀郡下 ……五四〇

岡水門○岡津○島門○島旗○洞海○名籠屋大瀆○柴島○河斗島○山鹿岬○岡浦○夜久驛○埴生郷○岡田宮○恒前郷○山鹿郷○宗像○内浦郷○蓮屋浦○勝木庄○木夜郷○鴉濱○垂水山○垂間野橋○浪懸岸○若松浦○白島○山鹿城

筑前之十八

鞍手郡 ……五六九

鞍手郡志○前戸神社○若宮八幡社○堺郷祇園社○新延八劔神社○福地權現社○新入八劔神社○伊久志社○山口御口代社○山口若宮社○宮田若宮社○鴨山若宮社○室木若宮社○中山劔神社○天照神社○木月八劔神社○野面八所神社○山口今宮殿社○吉川山王社○田野（ヒノ）八幡宮○所分（ショブン）長谷寺○内山寺○瀧福寺○永源寺○同喜菴○藥師堂○永滿寺○圓頭寺○若宮清水寺○瑞石寺○法花寺○亂如寺○極樂寺○最明寺○

普光寺○萬福寺○平山寺○金生鄕○二田鄕○生見鄕○十市鄕○新分鄕○粥田鄕○崎門山○木屋瀨○植木庄○高鳥居城○土方八幡社○都市八幡神社

筑前之十九

嘉摩郡……六〇三

嘉摩郡志○口原八幡社○五智如來○安國寺○草壁鄕○三緒鄕○大村鄕○綱別鄕○馬見鄕○碓井鄕○綱別驛○漆川

穗波郡……六一〇

穗波郡志○大分八幡社○明星寺○長丘驛○三坂鄕○鷹田鄕○士師鄕○堅磐鄕○穗波鄕○大日寺山○柘植城○椿庄○藥師堂○八幡社○鼓打權現社○寶滿明神○老松社○寶滿社○老松社○常樂寺○大養院○大日寺○八幡宮○三島宮○老松社○八幡社○彌勒堂

筑前之二十

夜須郡……六二九

夜須郡志○秋月○於保奈牟智神社○荷持田村○松峽宮○安野○中屋○馬田○賀美○雲提○川島○栗田○安長寺○安養寺○弘瑞寺○老松神社

下座郡……六三八

下座郡志○奚奈宜神社○惣天神社○帝釋寺○馬田○荷木○鑒鑒○三城○城邊○立石○水城波

上座郡……六四四

上座郡志○麻氏良布神社○朝倉社○須川大行事社○橘廣庭宮○把伎○隈崎驛○壬生○廣瀨○祚田○長淵○木丸殿○何東○三島○朝倉山○把木神社○久喜宮山王社○川原大行事社○南林寺○無量禪寺○梅林庵○山王宮○野津手八幡社○岩屋權現社○朝倉關○黑川○朝鞍寺

筑前之二十一

御笠郡一……六六三

御笠郡志○筑紫神社○鑪門神社○安樂寺天滿宮上

筑前之二十二

御笠郡二……六九一

安樂寺下○山王社○平野社○若宮八幡社○祇園社○宰相殿社○御靈社○味酒安行社○通知院○四堂○菩薩院○往生院○四法華堂○喜多院○金堂○局堂○理趣院○四御塔○淨土寺○滿願院○滿善院○法華堂○新三重塔○護福院○花藏院○西林寺○御靈院○藥師堂○谷王寺○平等寺○十王堂○光明寺○藤原資賴

筑前之二十三

御笠郡三……七一八

觀世音寺○戒壇院○金光明寺○尼寺○四王寺○四堂○極樂寺○吉祥院○鑪門山寺○有智山寺○武藏寺○崇福寺○原山醍醐寺○寶塔院○多寶塔○大鳥居延壽王院○滿盛院○執行坊○小鳥居○上座坊○安養院○淨妙寺○四方寺○般若寺○觀音堂○御墓寺○東法華堂○中法華堂

筑前之二十四
御笠郡四……七五五
鞍橋盤坂○水城○蓋城驛○蓋城野○莖木河○惡木山○御笠杜○次田温泉○大野山○天拜岩○大城山○新壹關○水城關○鑑門山○染川○石踏川○幸橋○小野里○長岡○大野郷○天山○内山城○四院亭○原田○紫庄○綴命院○學業院○都府櫻○和歌所○安倍家○小野家○武藤家○岩屋城

筑前之二十五
御笠郡五……七八九
太宰府上。

筑前之二十六
御笠郡六……八一六
太宰府下○鎮西府○都府南館○都府官舍○府驛館○飛梅○筑紫小郡

跋　長野種正

太宰管内志上卷索引

太宰管内志の出版に就きて

舊幕時代幕府或は諸藩に於て斯道の學者を集め、或は個人獨力を以て、幾多の星霜を費し編纂せられし浩瀚なる各國各藩の地誌類頗る多く、皆能く其地の地誌を詳かにして、我歴史地理學の研究に最も必要なる資料となれども、多くは寫本にて傳はり、容易に手に入れ難く、爲めに貴重なる書籍も空しく一部の人の目に觸るゝのみにて、一般の人に裨益する所なく、著者の功も亦永く世に傳ふる能はず、かくの如きは今日に於て甚遺憾の事といふべし。されば本會は設立の當初より、本會の目的として、是等地誌類の出版を企畫せしが、茲に漸くその機熟し、先づその第一として九國二島の大地誌たる太宰管内志を出版し、是を同好の士に配せんことを企てたり。

本書は筑前の學者伊藤常足翁の遺著にして、古今の史書を渉獵し、之を地理に照して考證し、凡て三十八年の日子を費して成りたる大著述なり。就中筑前は著者の故國なれば、殆ど本書の三分の一を費し同國の記事は最も該博にてその考證の正確なる識見の卓越せる他に其の比類を見ず。故に筑前一國の事を研究するものは素より、九國二島の歴史地理を研究する上に缺くべからざる書なり。是れ本會

が古書出版の第一として、本書を選擇せし所以なり。然るに本書は著者がこの原稿を未定稿のまゝ黒田家に獻じ、これより傳寫して二三世に傳はれるものあれども、何れも誤寫多くして據るべからず。且著者は邊僻の地にありし一小祠官の事なれば、博く良好なる參考書を選擇するを得ず、多く惡本に依り、或は再引用をなしたるを以て、誤字甚多く、往々意味不明に陷れるものあり。爲に本書印刷に當り、多くは原書に據りしも、其最も甚しき誤謬に陷りたるものは、今傳ふる良書によりて校訂し、一々傍註を加へて印刷に附せり。元來本書の如きは、眞面目なる研究にて、且考證に偏せるにより、一般の人々に普遍ならしむる能はず、同好者を募集するも應ずる人少なく、到底印刷の計企成立し難かりしも、伊東尾四郎君當時職を福岡縣に奉じ、深く筑前學者の著者が世に隱れたるを愛ひ、公務の傍種々同地方の縣吏及有志に說き、昨夏の休暇を殆んど同志の勸誘に費され藤井亦之を補助し藤田は重に東京方面にて種々有志の間に斡旋し、漸くにして豫定部數に近くを得て、遂に今回の出版を見るに至れり。其出版に當りては、藤井校正補入の任に當り、藤田之を監修補正し、漸くにして成功するに至れり。此の如くにして吾人兩人專らこの衝路に當りて獨力經營せしも、共に本業の暇を以て計圖せし所なれば到底萬全を期すべからず、校正の如きも猶粗漏を免れず。又出版部數餘りに僅少なるを以て比較的高價の恐あり。其他一般に於て隔靴搔痒の感少しとせず、是れ偏に豫約者諸氏に謝する所なり。爰に本會を代表し本書出版の由來及び我等兩人の經營せし一斑を述べ、この不充分なりし罪を謝すと云爾。

明治四十一年八月

日本歷史地理學會委員　藤田明

日本歷史地理學會幹事　藤井甚太郎

例言

一本書は黑田家藏著者自筆本に據り、訓點句讀の末に至るまで皆是に從ひ、如何と思料せらるゝものも明白なる著者の疎漏と見認めらるゝもの〻外、敢て私意を加へず、出來得る限り原本のまゝに從ひ、たゞ新に記述の大段に句點を施せり。

一本書は引用書多く、しかも著者は邊地の一祠官にして廣く名家の珍書古文書を閲する便を得ざりしを以て、頗る惡本を引證し、此に句讀訓點を施せり、されば往々文意をなさざるものあり、是等は原書の今日傳へらるゝものにて、校訂者の見るを得しものは、一々訂正し、七號活字に括孤を施して傍註せり。同字の間にあるものは其間の脫字と知るべく、横に配したるものは其字の訂正文字と知るべし、又括弧なきものは著者が前より入れたる傍註なり、かくの如く誤字脫漏を補訂したるを以て、著者の施したる訓點句讀に相違を來したるものあれども、其訓點句讀は敢て改めず。又著者は引用の書名卷數等につき又事實につきても未だ調査の暇なく、後日挿入の考にて□印を入れ、又は空白を置きたるものあり、此等は凡て□印を用ひて之を補ひ、又今日容易に知り得らるゝものは一々調査して傍註せり、其引用の書名を誤り卷數を誤り或は其の出所の年

月を誤りたるものに至りては、校訂に頗る力を用ゐたるも引用書中に今得難きもの少からず、是等は或は誤謬にあらずやと思はるゝものも、姑く原書のまゝに從ひたり。

一本書は元來未定稿の本なれば、原書毎頁新材料を得るに從て補入し、一々附箋を以て連絡せしめたれば、往々にしてその連絡に關する注意を脱したるものあり、是等は年月を序とし校訂者の意を以て補入し置きたり。

一本書引用文多くして、書名は其間に挿入せられ、一々行を改めず、繙讀の不便甚しきにより、書名はすべて「　」の括弧を付したり。

一贅頭の註は繙讀者を便せんが爲め、校訂者に於て補入したるものなり、中に「　」を附したるは特に著者の意見と見るべきものなり、○を附したるものは記述の區域を明瞭ならしめたるものなり。

一細註の中に括弧を入れたるものは、原書傍書の振假名等なるも活字を組入るゝ能はざるを以て、此形に從ひしなり、其内七號に括弧したるは校訂者の書入なり。

一索引及び目錄は原書には無論之を闕けるも校訂者之を補入せり、索引は毎冊之を附すべきも、其選擇せる言辭は本書中に現はるゝものを悉く擇まば紙數を多く要して却て煩雜の憂多きを以て其最も重なるものを以て作製したり。

著者略傳

(一)太宰管内志及其他の遺著

太宰管内志の著者伊藤常足翁は、筑前鞍手郡古門の人なり。此書は翁が文化元年三十一歳の時より着手し、天保十二年六十八歳の時に至り、始めて脱稿せしものなり。翁が自ら記せる「忘井の水」に曰はく。

今より四十四年ばかり昔に、故青柳の大人を師とたのみ聞えて、古へのふみの事ども、これかれ問聞えつるうちに、四年ばかりをへて、文化元年といふ年、おふけなくも、九國二島のしるべぶみ、つくらまく思ひおこして、師にもさをしつるを、誠によき事なりとて、すみやけくうべなひ給ひぬ。かくて又三十二年ばかりをへて、天保六年といふとしの冬、師と頼み聞えつる人は、なくなり給ひて、ゆらのとわたる舟人の、梶なき思ひをなしつゝ、二年三年をふるうちにかつ〳〵も書集て、それが名を太宰管内志と負せて、卷の數は八十あまり二卷となしつ。かり田の落穂落ちたる事ども多かめれど、齡のほども七十に近くなりにたれば、波よる磯のいそがるゝすぢなきにしもあらずなむ。ことし天保

十二年といふとしの十二月、おのれ國府にものして、つかさ〳〵にまをして、國の守に奉らむ事をこふ。

翁の師青柳氏は、名を種信といひ、本居宣長の門人にして、筑前國續風土記拾遺、防人日記、官家考等を著せり。翁の好學は種信の鼓舞、與つて力ありしもの〵如し。

翁が藩主に上りし自筆の太宰管内志は、現に黒田侯爵家に在り。此書一たび修史局に傳寫せられてより、專門學者の注意する所となり、其内容の文も、往々學者の間に引用せらるゝに至りたれど、奈何にせん他に傳寫せられたるもの極めて稀なるを以て、未だ普く世に知られず。今年翁が五十年の忌辰に際し、日本歴史地理學會に於て、之を印刷に附し、實費を以て同好者の間に頒つことゝなりしは、良に喜ぶべし。管内志印刷の事は著者が在世中に其意ありながら果さゞりしものなれば、今之を實行するは、蓋し最も吊魂の道にも適へるものといふべし。

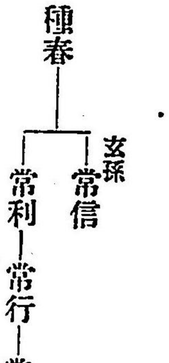
太宰管内志が西海道に關する良好の地誌たることは、既に專門學者の間に定評あり。たゞ其記述が一地方に詳しくして、他地方に疎なるは遺憾なれども、著者の境遇を察すれば、これ固より已むを得ざりしなり。翁は邊鄙の一小祠官の身にして、研學に最も不便なる境遇に在りし人なり。管内志の編纂は藩命を受けて爲したるにあらず。翁の單獨の事業なり。家財豐なるにあらず、遊歴自在なるにあらず、材料得易きにあらずして、獨力かゝる大著を成せるは、實に異數と言はざるべからず。而して翁の遺著は太宰管内志のみにあらざるなり。

翁の遺著目錄は、伊藤道保の筑紫遺愛集に載せたり。これによれば、太宰管内志以外の翁の遺著は、左の如し。

一太宰府徵	三冊	一筑前准風土記	三冊
一陸奥准風土記	三冊	一出羽准風土記	二冊
一百社起源	五冊	一筑前雜徵	九冊
一筑後雜徵	二冊	一豐前雜徵	四冊
一豐後雜徵	三冊	一肥前雜徵	三冊
一陸奥雜徵	卷數不定	一出羽雜徵	卷數不定
一潤學紀聞	三冊	一騎射徵	二冊
一古寺徵	三冊	一神代類語	三冊
一屠兒考	一冊	一防長雜記	四冊
一諸陵式備考	四冊	一驛鈴備考	一冊
一相摸備考	一冊	一釋紀引用書拾要	二冊
一雨夜集	六冊	一岡縣和歌集	六冊
一同上附錄	一冊	一屯田屯倉始末	一冊
一硯海和歌集	三冊	一雨夜物語燈	上下
一百社起源續徵	十九冊		

これ等の遺著中、陸奥准風土記、出羽准風土記、陸奥雜徵、出羽雜徵の如き、西海道以外の地誌類あるは、注意すべきことなり。又百社起源、同續徵の如き、古寺徵の如き、或は其他の著書の如き、如何に著者が種々の事項の研究に熱心なりしかを知るに足る。し。この他遺愛集に載せざるものには、流鏑馬占源考、鷹甘祭神考、時のつゞみ、歌道見聞抄、月見日記、花見日記、鷺見日記、山里日記、やちまた日記、山さくらと、伊勢濱荻後の折敷等あり。又抄錄類の現存せるもの九十余冊、自家の日記數十冊あり。以て翁の好學にして、筆まめなりしことを察すべし。

(二)家系と年譜



翁の家は世々筑前鞍手郡古門の祠官たり。翁より以前に於ては、常信文才あり。其稿日向記、今尚ほ家に傳はれり。

翁は八十五の齡を保ちしが、其繼嗣たるべき子は、翁に先だちて歿せり。翁の長男常滿即ち鷹丸は、畫を能くし、南華と號す。常滿は翁が七十四歲の時に歿し、次男常道は是より先き翁が五十八歲の時に歿せり。常滿の子直江、翁の嗣子となり、亦令名あり。翁の女ゆゆみ、亦才媛にして、嘉永元年の溫泉紀行あり。

左の年譜は、翁の孫直江が翁の事を記せる未定稿、及伊藤家系圖、家內年鑑、其他の書類を參酌して作りたるなり。

安永三年　十二月二十一日常足生る。魚沖(なおき)と稱す。常成の二男。母は神崎村庄屋遠藤茂八姉さと。

安永四年(二歲)　母と別る。されど十四歲の時までは、實母の許に往來す。

安永五年(三歲)　五月二十日、兄右門歿す。享年七歲。

寛政三年(十八歲)　水月村藤崎見順に從ひて、儒書を學ぶ。

寛政六年(二十一歲)　繼母の女つちを娶る。

寛政七年(二十二歲)　七月長女松世生る。翌年五月二十日歿す。

寛政八年(二十三歲)　龜井南冥に從ひて儒書を學び、二十五歲に及ぶ。九月六日

繼母歿す。

寛政九年(二十四歳)　十一月六日長男鷲丸(常滿)生る。

寛政十一年(二十六歳)　青柳種信に從ひて、和書を學ぶ。

享和二年(二十九歳)　十一月十九日、次女ゆみ生る。

文化元年(三十一歳)　太宰管内志編輯の志を立つ。

文化二年(三十二歳)　十一月十六日、二男桂輔(常道)生る。

文化五年(三十五歳)　筑前國中神職の惣司浦信濃守毎保より、學業の稱譽として金子百匹を賞せらる。是歳隔月浦氏の居所志摩郡櫻井に出で、日本書紀を講ず。爾後年々兩三度づゝ出てゝ書を講じ、或は歌會を催す。

文化六年(三十六歳)　二月より京都に上り、畿内伊勢尾張等を歴遊し、諸名家と交り、七月國に歸る。

直江自記錄に云はく。文化六年都方に登りし時、大阪にては關谷敬藏、齋柏新助、尾崎俊藏、京にては山田大學、城戸千楯、香川景樹、藤谷成元、上田留樹、服部中庸、羽州秋田大伴直枝、若狹伴妙五郎信友の諸彦に交り、其時少々議論せし事共、書たるも候得共、略し申候。夫より近江美濃尾張伊勢に遊歴して、松坂にも參り、春庭大人にも拜顔致し、同所に四五日滯致し申候。折節大平大人、植松有信主も同所に逗留に相成居候に付、五月廿三日大平翁、有信主御同伴致し、參宮致し、橋村正兌、足代弘訓、宇治久守主抔に交り、夫より松坂にかへる道にて、山室にまゐりて。

櫻根のうしのおくつきたとり來て此山室の花を見る哉

と詠申候而松坂に歸り、春庭翁に又拜顔致し、夫より大和を廻りて、又京に登り、七月に歸國。

文化十年(四十歳)　正月四日、三男千十郎生る。翌年六月九日歿す。

文化十二年(四十二歳)　長男常滿の子、直江生る。

文政元年(四十五歳)　三月長男常滿書を學ぶ爲に京都に上り、翌年三月國に歸る。

文政六年(五十歳)　二月より再び京都に上り、吉田家にて神職の許狀を受け、畿内伊勢等を歴遊し、諸名家と交り、六月國に歸る。

直江自記錄に云はく、文政六年再び都に登り、吉田殿拜顔を得て、夫より大和を廻り伊勢松坂に宿りて、春庭翁を訪ひ、參宮せしに、足代氏始め、舊知之人々、懇切に應接有之、久守主之宅に而、歌會催され、御神庫御書籍御寶器等も拜見し、同所出立の前日、常足送別之ためとて、山田社中、宇治久守の家にて、歌會を催さる。是は江戸人清水濱臣が來りし時之格なりとて、此地の名所を題

にて、○中略山田を立て、松坂につき、日野街霍屋に泊り、春庭翁を訪ひ、夫より本居庄左衛門廣蔭主を訪ひしに、此家にてもまた歌會催ふさる。題をさぐりて○中略五月に都に上りて、鐸屋に而、藤井高尚に對顏し、又城戸千楯、箕田水月、若槻□□、梅辻春樵などに逢ひて、○中略夫より大阪に下り、一柳春門子息並樹、又穗井田忠友にも對顏し、夫より五月十六日、紀州若山に參り、大平大人を訪奉り、若葉會讀ありし故、夫にも加り、また歌會も有し故、其會席にもつらなりて、深山紅葉といふ題を得て、

さをしかの鳴なる方そ憐なるおなじみやまの紅葉なれども

とよみしを、大平大人のをかしきかたといふ評を賜りしとか。

文政七年(五十一歳)　正月二十七日、父常成歿す。享年七十七。十二月學業勉勵の賞として、藩より銀子三枚を給せらる。是歳十月より長男常滿、江戸に上り、文政九年に至りて、國に歸る。

文政十年(五十四歳)　閏六月、京都吉田家より、神學出精の褒賞として、狩衣一領を給せらる。四月長女ゆみ、黒崎波多野氏に嫁す。

天保三年(五十九歳)　三月十九日、二男常道歿す。享年二十八。八月國主の内命によりて、屠兒考を編す。

天保五年(六十一歳)　八月十五日、赤間關に往く。月見日記成る。

天保六年(六十二歳)　三月赤間關に往く。花見日記成る。五月筑前神職惣司浦氏の囑によりて、流鏑馬占源考、鷹甘祭神考を編す。六月植木に往く。鷲見日記成る。八月赤間關に往く。

天保七年(六十三歳)　二月八月の兩度、赤間關に往く。

天保九年(六十五歳)　三月赤間關に往く。

天保十一年(六十七歳)　五月二十八日、藩主より爾今年々米拾俵宛給せらる。

天保十二年(六十八歳)　十二月十四日、太宰管内志八十二卷、太宰府徵三卷、筑前准風土記三卷、陸奥准風土記三卷、出羽准風土記二卷、百社起源五卷、合計九十八卷を藩主に上る。

天保十四年(七十歳)　三月長男常滿京都に上り、四月吉田家より神職の許狀を受く。

弘化二年(七十二歳)　百社起源續徵二十卷成る。

弘化四年(七十四歳)　五月十日長男常滿歿す。享年五十一。常滿の子直江を繼嗣とす。

嘉永二年(七十六歳)　九月百社起源續徵二十卷、豐後雜徵三卷、肥前雜徵二卷、

古寺徴二卷、騎射徴二卷、筑前雜徴十一卷、合計四十卷を藩主に上る。
嘉永三年（七十七歳）十二月二十八日、藩主より狩野尙信の畫一軸を給せられ、年始の格式を許さる。
嘉永六年（八十歳）正月藩主參勤の途次、黑崎茶屋にて謁見、其記念として黑崎畫工刀稱春吏昇に像を畫かしむ。昇は常足の長男常滿（南華）の門人なり畫像自賛に曰はく。

かきうつす我おもかけを見るたびになと耻かしきことのそふらむ

安政三年（八十三歳）正月十四日、藩主より年々給せられし米拾俵、嗣子直江代まて給せらるべき旨、達せらる。
安政五年（八十五歳）十一月九日朝病みて歿す。

（三）逸事

翁が文化六年及文政六年の兩度、畿內伊勢地方を遊歷したることは、前に述べたり。此兩度の遊歷は、時日短かゝりしかど、翁の交際を廣くし、其見識を博くしたることは疑ふべからず。此際より翁が交際を結び、文通せし人は、多きが中に、殊に伴信友、足代弘訓の二人とは、最も親密にして、文通も繁かりしものゝ如し。

此二人の消息文は、翁の事蹟を知る參考となるを以て、一部分を左に抄出せん。

（伴信友よりの消息文抄錄）

抑年來被二思立一候御著述物云云、十五冊斗に御仕立之狀、何事に候哉、不レ奉レ存候へとも、定而御丹精被レ盡候御事と、扨々感嘆仕候。當冬より來春之內、御草稿拜見も可レ被二仰下一哉之由、雀躍奉レ待候。少に而も不レ苦、一日も速にと希候。○中略且又先年墨摺之鈴屋翁肖像上候處、御懇謝憚入候、兎角眞之古學志候仁は少く候哉。尋逢ひ不レ申、心外に候。○中略御疎遠仕候處、今般御懇訓之書翰、奉レ謝候。爾來とも何卒學事被二仰示一被レ下度、一向希上候（三月十六日附）

一肥前風土記、定而御手に御座はんと奉レ存候。其御もとよりに候へは、注釋等の御志も候はゝ、便あるべく候。いかでと願上候。其內永世神社に崇神御門の御鎧在レ之由記候。もし今に傳り候はゝ、其さま御聞出被レ下候儀は相成間敷哉。伊高ぬしへもたのみ置候、其外とも一二なりとも貴說伺度候。釋紀等に殘候貴國之風土記之文に付而も、御考御座候はゝ、被二仰示一被レ下度、奉レ希候。○中略一西國筋之故蹟、一二なりとも被二仰示一可レ被レ下候。霧島、高千穗などの故跡、色々承り候に付ても、いかて眞の說承らまほしく、彼さかほこなど云ものも、いかならん、舊陵などの事も、定て御明らめ候はん、御聞かせ可レ被レ下候。（十

月十一日附）

又御著述之目錄、御示被ㇾ下、拜見仕候。御篤志之御事ども、御丹精奉ニ欣羨一候。守殿へも御奉上之由、珍重奉ㇾ存候。就而は拙著之目、御尋被ㇾ下、いかにも品々企候事は有ㇾ之候得ども、悉草稿かたなりにて、一種だに書整候ものは無ㇾ之候故、きこえさせがたく候へ共、さばかり仰下され候事故、耻入候へども、別紙に相認候。御笑覽可ㇾ被ㇾ下候。是迄目錄認置不ㇾ申候故、被ㇾ求候仁へも、此度のごとくに備へて入覽候事無ㇾ之候へ共、舊交被ニ思召一、御狀通之歡に感じ、名聞がましき耻を忘れ、書立候て、入ニ御覽一候志にて候也。他視は御いとひ可ㇾ被ㇾ下候。跡より訂正は候而、生涯脫稿は仕かたき事に存居候へは也。（五月八日附）

（足代弘訓よりの消息文抄錄）

朋友とも打寄候節は、毎々貴君御噂申出し候。なつかしく存申候。又々當所御出掛奉ㇾ待候。（九月晦日附）

一公卿補任拔萃之儀致ニ承知一候。○中略來陽早々抄錄いたし候て、可ㇾ入ニ御覽一候。將又御著述御成業之上、一部文庫へも御奉納所ㇾ希候。○中略一御詠歌あまた御見せ被ㇾ下、致ニ感吟一候。愚詠も入ニ御覽一候。御笑覽可ㇾ被ㇾ下候。（十一月七日附）

大疑錄御面倒相掛、方々御探索御借出し被ㇾ下候由、不ㇾ遠內拜見可ㇾ致と、相樂申候、○中略やちまた追々御熟し被ㇾ成十二三人も御敎授も御座候由、珍重之御事に御座候。韻鏡是は韻學者流之說は、韻書之上之吟味のみに御座候。下拙は皇朝之假字を正し、紀記之歌等を疑なく讀候ために、仕度存候事に御座候。○中略金玉集御書拔御預申置候。○中略太宰管內志、段々事廣く御仕立之由、卷數も多く大部に相成、一段目出度奉ㇾ存候。何卒無ニ御懈怠一御成業奉ㇾ祈候。諸陵式備考御取掛之由、下拙も陵墓之儀は、骨折置申度所存故。一入悅敷奉ㇾ存候。○中略江戶人狩谷掖齋、和名抄考證致申候由に而、國郡之部、下拙にも手を入吳候樣、申越候。九國之所は、御調子奉ㇾ願候。追而藤田へ托し可ㇾ申候。（七月廿二日附）

御著述書目、御しるし被ㇾ下、御領主より御稱美之趣も、御風聽被ㇾ下、目出度御儀に奉ㇾ存候。御著述はいつれも有用之品、御骨折感心仕候。○中略何卒ちよとなりとも、拜見相願申候。○中略御詠短冊御惠贈、久々にて御染筆拜見、大悅仕候。少しも御老筆之御氣味も無ㇾ之、御丈夫なる御事に御座候。（三月十八日附）

今年八十御滿齡のよし、誠に以目出度奉ㇾ存候。拙者儀も七十に相成申候。御悅可ㇾ被ㇾ下候。鐘のひびきの辨、時のつゞみと申もの、御著述のよし、何とぞ拜見いたし申度、渴望いたし申候。江戶にては平田を大ばけもの、守部をこばけ

物と申候。（四月九日附）

次に翁が家庭に關する事蹟に就きて述べんに、翁は其子孫を戒むるに、其家の職務を忽にすべからざること、學問の道を怠るべからざることを以てし、家訓を作り、毎年元旦に家族に讀み聞かするを例とせり。左に掲ぐるは、即ち翁の家訓なり。

於二當家一年々正月元日一家に讀聞せ可レ申條數之事

一寛文七年從二公儀一被二仰出一候御條目、屹度相守、神祇道無二懈怠一可レ致二修行一事。

付公儀之御趣意を道之本といたし、其身學問之筋に而致二自得一候趣者、道之枝葉と相心得可レ申事。

一兩親へ之仕方、是又公儀之御趣意を目當として、麁略無レ之樣に相謹可レ申事。

付兄弟子孫、其外一族等之間も、是に準じて心得可レ申事。

一職分之事に付、聊に而も新規之儀、取起し候節は、手筋之役柄者、申に不レ及、村方役人中、兼而及二熟談一可レ申事。

付上之役人者勿論、村役人に至迄、假初にも致二誹謗一間敷事。

一儒學者學問之根元たる之問、八九歳之比か、廿四五歳迄に、四書、五經、左傳、國語、史記、漢書、文選、蒙求、唐詩選體之事者、且々心得させ可レ申事。

付諸子百家之書に渡候事、幷詩文章體之事者、其身之才不才に依而、可レ爲二勝手次第一事。

一和學之儀者、廿六七歳之比か致二稽古一、六國史律令格式を初め、古事記、萬葉集、倭名鈔、三代和歌集、伊勢、源氏類迄も、且々心得可レ有レ之事。

付歌道之儀、是非共少々心得無レ之而者、相濟不レ申事。

一手蹟之事者、和漢之流儀に不レ拘、七八歳之比か、不レ怠稽古爲レ致可レ申事。

付村内子供指南之儀者、勝手次第たるべき事。

一當家受持氏子、少分之事に付、家業之外、何業に而も、産業之助と相成可レ申筋、指はまり稽古可レ有レ之事。

付職分不似合之儀者、可レ致二遠慮一。但畫道之類は、苦敷かるまじき事、（以下六條略）

古之條數、元祖より之趣旨に任せ、且拙者愚意指加へ、相極置候間、當家累代に相傳へ、神職無レ恙樣に、相續可レ有レ之者也。

天保十三年寅九月　古月村社人（當家子々孫々に當る）伊藤魚沖（花押）六十九歳

以て翁の人と爲りを察すべし。

この家訓の文中「當家受持氏子少分之事に付、家業之外何業に而も、産業之助と

相成可レ申筋、指はまり稽古可レ有レ之事」とあるは、一小祠官の身にては、生計の余裕とても無き故、産業の助となるべき事をも、勵むべしとの意なるべし。これに關して、翁の逸事として特筆すべきことあり。蓋し翁は常に文墨に親しみ、研鑽怠らざりしを以て、小祠官の身にては、家計も自ら不如意となりしものゝ如く、現に翁の爲に企てられたる賴母子講の帳簿類の存せるものあり。又家に傳ふる所によれば、或は子守を置くことに差支へし等の逸話あり。これによつて察すれば、翁が家訓に産業の助云々の一條を加へ、其子常滿に書を學ばしめし如き、深意の存する所を知るに足るべし。

翁の境遇は、實に書を得るに難く、研學に最も不便なりき。而して翁はこれに屈せずして、研鑽怠らず、幾多の著述をなせり「かきながす言の葉ゆかし水莖の岡遠からぬ里に隱れて」とは、周防の近藤芳樹が、「伊藤翁世の名利にのみおもむける學者にあらそはて、かくれ住給ふ槇の屋をとふらひて」詠める歌なり。「くさ〳〵の書ら、あらはしものし給ふに、一寸のかげをもをしみおはしますとや」とは、豐前の佐久間種が消息文中の句なり。研學に最も不便なる境遇に在りて、一寸のかげをも惜み、終身矻々として、かきながしたる水莖の跡、豈ゆかしからずや。

明治四十年十一月　伊東尾四郎しるす

太宰管内志序

鞍手郡古門村祠祝伊藤魚沖錄二九國之風俗土産神祠佛宇及其古今所レ傳之說一以爲二地志一名曰二太宰管内志一蓋以二其地皆係二古昔太宰府之所レ管也嘗持來示二我先人一請二之序一先人觀レ之謂レ彬曰祠祝氏之學大率以二一人之見一定二千載不レ可レ考之蹤迹一自以爲二博識多聞一而誇二尙于其徒一也今觀二魚沖之所レ爲異二于此一其所二采錄一多正史之所レ載而所二紹述一亦古人之說也不レ敢以二己之見一亂レ古是則可レ序也汝其代レ余序レ之彬謝不レ敢焉及二先人即一世魚沖請レ彬猶レ請二先人一也余曰子之所二輯錄一皆可二自傳一固不レ待二序之有無一也況余不文何以應二子之需一也子其請二之能文人一魚沖曰常足之爲二此舉一也竊效二益軒先生續風土記之撰一顯求二事實一而務去二虛誕一故欲レ就二先生之徒一而徧求二之序一是常足之志也余聞二此言一愈不二敢當一也已而魚沖有レ病不レ踵二余門一者十數年尙以レ書請レ之不レ休且令二其子大貳請一曰病夫生前願得二子之一語一於レ是余不レ忍二固辭一乃言二先人之意一以爲二之序一云。

天保十一年十一月　島村彬士質序

舉古而遺乎今則不足徵也無徵則人不信焉舉今而遺乎古則無所本也無本則亦人不信焉古今兼舉而無有遺漏而後可謂備矣伊藤氏之作太宰管內志也上焉國史實錄下焉野乘私記隨見聞之所及而收載不遺焉又有身經而目擊發秘而閱寔者亦居其半矣而其至取此舍彼別嫌闕疑則自備權度于心目之際而剖決不謬矣比諸索隱釣奇而炫燿凡目及淺膚庸陋而不恥自欺者不啻天壤已盖泼合于　皇國正直之道矣爲有徵有本之書孰有如之者焉其爲書也幷九州二島七十有二卷伊藤氏之舉吁嗟勤乎哉但以其浩瀚也每困乎淨寫是以脫稿者僅止十之四不亦惜乎雖然其言曰授諸同志而使圖繼成也其如是則其成全之功亦有望于佗日也果矣頃者回時枝司館需予之序予也之寔見諛聞固靡涓滴撮土之可裨益海岱矣但不欲辜遠徵之勤故彊顏漫題以塞命云。

天保十年己亥秋八月

鋸谿井土周磐撰印

太宰管內志凡例

一太宰府の管領する處九國二島其他聊三韓の事又南島等に及ぶといへども今此志に記せるは九國二島のみなり。

一此志に引用ふる書皇國なるは更にもいはずから國の書と云へども明朝リ已前なるは是をもらさず、其他神社佛閣の銘文諸家の文書の類、慶長リ已前なるは皆引出て證とせり。

一志の書體大むね貝原先生の筑前續風土記による、志中先哲說と云へるは皆彼先生の說なり、次に師說と云へるは靑柳種麻呂翁の說なり。

一今引用ふる六國史世本と異なる處あるは皆水戸本に據る、又軍記略とて引出たるは常足ガ先祖伊藤常信八十餘歲にして元祿比に書る書なり、軍記を引出んに事長くしてくだくだしきは負げなるれど此書に據れり。

一初に國次に郡次に鄕里次に神社佛閣名處古跡と次第を定むる事大むね貝原翁の例にならへり、次に世に名高き舊家は其系圖を出して又一件とせり。

一神社佛閣の事慶長已前の書に見えざるも世人の口碑に殘りて其名高きは別に引出て一件とせり。

一慶長以後の書といへどもから國などの書に見えて其名高きは別に引出て一件とせり。

一太宰府の事に至ては舊證を漏せる事多し、別に太宰府徵三冊を編錄すればなり。

天保九年十月

伊藤常足記

太宰管内志上卷

筑前人　伊藤常足編錄

筑前之一

○筑前國志之一

〔延喜式〕に西海道筑前國あり、〔倭名抄〕に筑前（筑紫乃三知乃久知）とあり、（からぶみの〔武備志〕に職骨前とあり、）名義は〔筑後風土記〕に筑後國云云本與筑前國合爲一國昔兩國之間山有峻狹坂往來人之所駕鞍轡被摩盡土人曰鞍轡盡之坂云云、昔此堺上有麁猛神往來之人半生半死其數極多目曰人命盡神于時筑紫君肥君等占之今筑紫君等之祖甕依姫爲祝祭之自爾以降行路之人不被神害是以曰筑紫國云云爲葬其死者伐此山木造作棺輿因曰筑紫後分兩爲前後とあり、又〔釋日本紀五卷〕に〔名義〕私記の既を引て曰云云有四義一云此地形如木兎之鼻故名之木兎鼻之名此云三都久とあり、其次に〔筑後風土記〕を引出たり、又〔風土記抄〕と云物に允恭天皇の時異國貢紫草而著筑紫也筑者著之義也故曰筑紫なども見えたれど古意にあらざれば本文に引出ず、かくて此國の事御代御代の書どもに見えたるは〔古事記上卷〕伊邪那岐の命伊邪那美の命御子生ませる件に云云生筑紫島此島亦身一而有面四毎面有名故筑紫の國謂白日別、〔日本書紀一卷〕に云云次生伊豫二名洲次生筑紫洲次生隱岐洲與佐渡洲とも〔名義〕あり、又〔一書の既〕とてのれるにも種々ありて生たまへる島の次第のここととかわれるもあり、〔同書中

名義
鞍坂
○神代
白日別

岡田宮
○景行西征
國造
〔田道命〕
○神功征韓
〔風土記〕
○應神朝
武內宿禰
御使君

卷〕神武天皇ノ件に云云即自日向發幸云云於筑紫ノ岡田ノ宮一年坐、〔書紀〕の方には元年十有一月天皇至筑紫ノ岡水門とあり、〔景行天皇紀〕に十二年八月幸筑紫國、〔國造本紀〕に筑紫國造、志賀ノ高穴穗ノ朝御世阿部ノ臣同祖大彦命五世ノ孫田道命定賜國造、〔孝元天皇紀〕に七年二月立二欝色謎ノ命一爲皇后、后生二男一女、第一曰大彦命、大彦命、是云云筑紫國越ノ國造伊賀臣ノ祖大彦ノ男彦瀨立大稻起命也ともあり、田道命ノ事、〔仲哀天皇紀〕に八年二月此外物に見えず〔仁德天皇紀〕十五年に田道と云人見えたれど別人ときこゆ、〔仲哀天皇紀〕に元年十二月生譽田天皇於筑紫、〔振津國風土記〕に人皇十四代仲哀天皇將レ攻三韓一到二筑紫一而崩今氣比大明神者此帝也其后神功者開化天皇五世ノ孫息長宿禰ノ女也於レ是發レ軍伐三韓一時當二于產月一取レ石挿二其腰帶一欲レ不レ產遂入二新羅百濟高麗一皆悉臣服跪、到二筑紫一產二皇子一是譽田天皇也とあるは後人の僞作なるべし、世さまも悲つたなくたがへる事も多し、さてこゝの前後に引出る書紀ノ歌に干子を書さるは省きてひけるなり、次の卷ども二たび引出る處に委く書加ふべし、〔應神天皇紀〕に九年四月遣二武內宿禰於筑紫一以監二察百姓一時武內宿禰弟甘內宿禰欲レ廢レ兄即譖二言于天皇一　武內宿禰常有レ望二天下一之情一今聞在二筑紫一而密謀レ之曰獨裂二筑紫一招二三韓一令レ朝二於巳一遂將レ有二天下一於レ是天皇則遣レ使以令レ殺二武內宿禰一時武內宿禰歎レ之曰吾無二武心一以レ忠事レ君今何禍矣無レ罪而死耶於レ是有二壹伎直眞根子者一其爲人能似二武內宿禰之形一獨惜二武內宿禰無レ罪而空死一　便語二武內宿禰一曰今大臣以レ忠事レ君旣無二黑心一天下共知願密避レ之參二赴于朝一親辨レ無レ罪而後不レ晚也且時人每云僕形似二大臣一故今我代二大臣一而死レ之以明二大臣之丹心一則伏レ劍自死焉時武內宿禰獨大悲レ之密避二筑紫一浮レ海以從二南海一廻レ之泊二於紀水門一　僅得レ逮レ朝乃辨レ無レ罪、大臣の子孫の事又壹岐直の事なと四卷早良郡ノ件に云べし、四十一年二月阿知ノ使主等自レ吳至二筑紫一　阿知使主を吳に遣はして縫工女を求給ふ事は三十七年二月ノ件に見えたり、云云以二兄媛一奉二於胸形ノ大神一是則今在二筑紫國一御使君之祖也　御使ノ君ノ事は那珂郡御田ノ社ノ件にいさゝか云べし、〔履仲天皇紀〕に五年三月戊午朔於二筑紫一所レ居三神見二于宮中一言何奪二我民一矣云云或者ノ曰車持ノ君行二於筑紫ノ國一而悉按二車持部一兼取二充神者一必是罪矣天皇則喚二車持君一以推二問之事旣實焉因以數之曰云云　自今以後不レ得レ掌二筑紫之車持部一、〔雄略天皇紀〕に二十三年夏四月百濟文斤王薨天皇以二昆支王五子中第二末多王幼年聰明一云云使レ王二其國一仍賜二兵器一幷遣二筑紫國軍士五百人一衛送於國一是爲二東城王一、筑紫ノ安致ノ臣馬飼ノ臣等率二船師一以擊二高麗一、安致臣ノ事はいまだ考へず、馬飼臣の事は早良郡ノ件に聊いふべし、〔繼體天皇紀〕に二十一年夏六月甲午近江毛野臣率二衆六萬一欲レ往二任那一爲二復興一建二新羅所レ破南加羅喙己呑一合任那一於是筑紫ノ國造磐井陰謀二叛逆一猶豫經レ年恐レ事難レ成恒伺二間隙一新羅知レ之密行二貨賂于磐井所一而勸防二遏毛野臣軍一於是磐井掩二據火豐二國一勿レ使レ修レ職外邀二海路一誘二高麗百濟新羅任那等ノ國一年貢職內遮遣二任那一毛野臣軍一亂語揚言曰今爲二使者一昔爲二吾伴一摩レ肩觸レ肘共器同レ食安得二卒爾爲一レ使俾二余自伏一你前一遂戰而不レ受驕而自矜是以毛野臣乃見レ防二遏中途一淹滯天皇詔二大伴大連金村物部大連麁鹿火許勢大臣男人等一曰筑紫磐井反掩二有西戎之地一今誰可レ將者大伴大連等僉曰正直仁勇通二於兵事一今無レ出二於麁鹿火右一天皇曰可秋八月辛卯朔詔曰咨大連惟茲磐井弗レ率汝徂征物部麁鹿

○履仲朝
宗像君
車持部
○雄略朝
安致君
○繼體朝
磐井

火大連再拜言嗟夫磐井西戎之奸猾負川阻而不庭憑山峻而稱亂敗德反道侮慢自賢在昔道臣爰及室屋助帝而爵拯民塗炭彼此一時唯天所贊臣恒所重能不恭伐詔曰云云長門已東朕制之筑紫以西女制之專行賞罰勿煩頻奏二十二年冬十一月甲子大將軍物部大連麁鹿火親與賊帥磐井交戰於筑紫御井郡旗鼓相望埃塵相接決機兩陣之間不避萬死之地遂斬磐井果定壇場十二月筑紫君葛子恐坐父誅獻糟屋屯倉求贖死罪云云などのみにて其外〔宣化天皇紀〕に元年五月辛丑朔詔曰云云筑紫肥豐三國屯倉散在縣隔運輸遙阻儻如須要難以備卒亦宜課諸郡分移聚那津之口〔欽明天皇紀〕に十五年正月丙申百濟遣中部木劤施德文次酒杆率塞敦等以去年閏月四日到來云臣等以今年正月到如此碧而未審來不也又軍數幾何願聞若干預治營壁別諮方聞奉可畏天皇之詔來詣筑紫看送賜軍聞之歡喜無能比者此年之役甚危於前願遣賜軍使逮正月於是內臣奉勅而答報曰即令遣助軍數一千馬一百疋船四十隻百濟軍兵を乞ふ事は十四年正月の件に見えたり、內臣を遣はして百濟に使する事同六月の件に見えたり、百濟又使をつかはして救兵をこふ事十五年二月の件に見えたり、さて內臣は國名とあれば知がたし內臣六月より筑紫に下りて筑紫より軍指麾をせしなるべし、云云夏五月戊子內臣率舟師詣于百濟冬十二月百濟遣下部扞率汝斯

糟屋屯倉〔筑紫君〕
○宣化朝
那津屯倉
○欽明朝
筑紫內臣

于奴上表曰云云領其方軍士攻函山城有至臣所將來民筑紫物部莫奇委沙奇能射火箭蒙天皇威靈以月九日酉時焚城拔之故遣單使馳船奏聞別奏若但斯羅者有至臣所將軍士亦可足矣今狛與斯羅同心戮力難可成功伏願速遣竹斯島上諸軍士來助臣國又助任那則事可成云云餘昌謀伐新羅者老諫曰天未與懼禍及餘昌曰老矣何怯也我事大國有何懼也遂入新羅國築久陀牟羅塞云云明王の子なり餘昌遂見圍繞欲出不得士卒追駭不知所鬪有能射人筑紫國造進繽弓占擬射落新羅騎卒最勇壯者發矢之利通所乘鞍前後橋及其被甲領會也復續發箭如雨彌屬不懈射却圍軍由是餘昌及諸將等得從間道逃歸餘昌讃國造射却圍軍尊而名曰鞍橋君此云云、十七年春正月百濟王子惠請援於是遣阿倍臣佐伯連播磨直率筑紫國舟師衛送達國別遣筑紫火君百濟本紀云筑紫君火中ッ君弟率勇士一千衛送於彌氏彌氏ハ津ノ名因命守津路要害之地焉〔崇峻天皇紀〕に四年壬午差紀男麻呂宿禰巨勢臣比良夫狹臣大伴嚙連葛城烏奈良臣狹の字あたりに落字ありと思えたれど今考へがたし、為大將軍率氏々臣連為神將部隊領二萬餘軍出居筑紫遣吉士金於新羅遣吉士木蓮子於任那問任那事〔五年十一月丁未遣驛使於筑紫將軍所曰依於內亂莫怠外事內亂は蘇我馬子天皇を弑奉るを云〕〔推古天皇紀〕に三年秋七月將軍等至自筑紫十年春二月己酉朔來目皇子為大將軍率氏々臣連為神將部隊

筑紫舟師
○崇峻朝
筑紫將軍所
○推古朝
來目皇子

軍ニ授ニ諸神部及國造伴造等並軍衆二萬五千人ニ夏四月戊申朔將軍來目皇子到ニ于筑紫ニ乃進屯ニ島郡ニ而聚ニ船舶運ニ軍粮ニ六月己酉大伴連嚙坂本臣糠手共至レ自ニ百濟ニ是時來目皇子臥病以不レ果ニ征討ニ十一年春二月丙子來目皇子薨ニ於筑紫ニ十六年夏四月小野臣妹子至レ自ニ大唐ニ云云 大唐使人裴世清下客十二人從ニ妹子臣ニ至ニ於筑紫ニ遣ニ難波吉師雄成ニ召ニ大唐客裴世清等ニ、妹子を唐に遣はし給へる事は十四年七月の件に見えたり、〔皇極天皇紀〕に元年正月乙酉百濟使人大仁阿曇連比羅夫從ニ筑紫國ニ乘ニ驛馬ニ來言百濟國聞ニ天皇崩ニ奉レ遣ニ弔使ニ臣隨ニ弔使ニ共到ニ筑紫ニ而臣望レ仕ニ於葬ニ故先獨來也然其國者今大亂矣、二月戊子遣ニ阿曇山背連比良夫・草壁吉士磐金（イハカヲ）・倭漢書直縣ニ遣ニ百濟弔使所問ニ彼消息、大仁比良夫が百濟に到りし一年月つまびらかならず、〔孝德天皇紀〕に白雉二年新羅貢調使知万沙飡等著ニ唐國服ニ泊ニ于筑紫ニ朝廷惡ニ恣移ニ俗訶嘖追還ニ于レ時巨勢大臣奏請之曰方今不レ伐ニ新羅ニ於レ後必當レ有レ悔其伐之狀不レ須ニ舉力ニ自ニ難波ノ津ニ至ニ于筑紫ニ海裏相接浮ニ盈艦舳ニ召ニ新羅ニ問ニ其罪ニ者可レ易得焉、五年七月丁酉西海使吉士長丹等共ニ百濟新羅使ニ泊ニ于筑紫ニ、四年五月に長丹を唐〔齊明天皇紀〕に六年正月壬寅朔高麗使人乙相賀取文等一百餘泊ニ于筑紫ニ、〔備中國風土記〕に皇極天皇六年大將軍蘇定方率ニ新羅軍ニ伐ニ百濟ニ遣レ使乞レ救天皇行ニ幸筑紫ニ將レ出ニ救兵ニ云云其後天皇崩ニ筑紫行宮ニ不レ遣ニ此軍、〔備中風土記〕の戰は本朝文粹清行意見封事に引出たり、島極天皇とあるは重祚の後齊明天皇とまおせし時の御事なり此度の事委しくは上座郡朝倉ノ宮ノ件に云へり、〔天智天皇紀〕に三年於ニ筑紫ニ築ニ大堤ニ貯レ水、此事委しくは御笠郡水城ノ件に云へし、夫筑紫ノ國ニ築ニ大野及椽二城、委しくは御笠郡大野ノ件に云へし、九年二月又築ニ長門城一筑紫城二、〔續紀一卷〕に文武天皇三年十二月甲申令ニ太宰府修ニ三野稲積二城ニとあるはこゝの二城をいふにや、十年四月筑紫言八足之鹿生而即死、〔天武天皇紀〕に元年三月己酉遣ニ内小七位阿曇連稲敷於筑紫ニ告ニ天皇喪於郭務悰等ニ、〔天智天皇紀〕に十年十一月癸卯對馬ノ國司遣ニ使於筑紫ノ太宰府ニ百月生二日沙門道久筑紫ノ君薩野馬韓島ノ勝裟々布師ノ首磐四人從レ唐來曰唐國ノ使人郭務悰等六百人送ニ沙宅孫登等一千四百人總合二千人乘ニ船四十七隻一俱泊ニ於比智島一相謂之曰今吾等人船數多忽然到レ彼恐彼防人驚駭射戰乃遣ニ道文等一探ニ稍ニ披ニ陳來朝之意一とある是なり、於レ是郭務悰等咸著ニ喪服一三遍擧レ哀向レ東稽首 壬子郭務悰等ニ再拜進書函與ニ信物一、夏五月壬寅以ニ甲冑弓矢一賜ニ郭務悰等一是日賜ニ郭務悰等物一總合縑一千六百七十三匹布二千八百五十二端絲六百六十六斤 庚申郭務悰等罷歸、六月云云 大友皇子四國ノ軍をめし給ふ件に 遣ニ佐伯連男於筑紫一遣ニ樟使主磐手於吉備國一並悉令レ起ニ兵仍謂ニ男與ニ磐手一曰其筑紫太宰栗隈王與ニ吉備國守當麻公廣島二人元有レ隷ニ大皇弟一疑有レ反歟若有ニ不服色一即殺レ之 云云 男至ニ筑紫一時栗隈王承レ符對曰筑紫國元戍ニ邊賊之難一也其峻レ城深レ湟臨レ海守者豈爲ニ内賊一耶今畏レ命而發レ軍則國空矣若不意之外有ニ倉卒之事一頓社稷傾レ之然後雖ニ百殺一臣何益焉豈敢背レ德耶輙不レ動レ兵者其是緣也時栗隈王之二子三野王武家王佩レ劒立ニ于側一而無レ退於レ是男按レ劒欲レ進還恐見亡故不レ能レ成レ事而空還之、十一月辛亥饗ニ新羅客金押實等於筑紫一即日賜レ祿各有レ差、金は新羅の姓なり、押實が來たりし年月いまだ考へず、二年閏

水城
大野城椽城
筑紫太宰
○天武朝
○孝德朝
○齊明四征
○天智朝
小野妹子
○皇極朝

筑紫大郡

六月己亥新羅遣ニ韓阿飡金承元・阿飡金祇山・大舍霜雪等一賀ニ騰極一幷遣ニ一吉飡金薩儒・韓奈未金池山等一弔ニ先皇喪一其送使貢于寶眞毛送ニ承元薩儒於筑紫一戊申饗ニ貢于寶等於筑紫一賜レ祿各有レ差、八月癸卯高麗遣ニ上部位頭大兄耶子・前部大兄碩干等一朝貢仍新羅遣ニ韓奈未金利益一送ニ高麗使人于筑紫一十一月壬申饗ニ高麗耶子・新羅薩儒等於筑紫大郡一（大郡ノ事ハ那珂郡鴻臚館ノ件ニ聊云ベシ、）賜レ祿各有レ差、四年二月新羅遣ニ王子忠元大監級飡金比蘇・大監奈未金風那未金孝福送ニ王子忠元於筑紫一、三月戊午饗ニ金風那等於筑紫一即自ニ筑紫一歸之、八月壬申朔就羅調使王子久歴伎泊ニ筑紫一、己亥新羅高麗二國調使饗ニ於筑紫一賜レ祿有レ差、十月丙戌自ニ筑紫一貢ニ唐人三十口一則遣ニ遠江國一而安置、五年十一月丁卯新羅遣ニ沙飡金清平一請レ政幷遣ニ沙飡金好儒・弟監大舍金欽吉等一進調其送使奈未被珍那・副使奈未好福送ニ清平等於筑紫一、六年四月乙巳送使珍那等饗ニ于筑紫一即從ニ筑紫一歸之、七年十二月筑紫國大地動之地裂廣二丈長三千餘丈百姓舍屋每レ村多仆壞是時百姓一家在ニ岡上一當ニ于地動夕一以岡崩處遷然家既全而無ニ破壞一家人不レ知ニ岡崩家避一但會明後知以大驚焉（「後風土記」に飛鳥淨御原宮御宇天皇御世戊寅年大有ニ地震一山岡裂崩とあり、又天平勝寶六年の「紀」に令ニ太宰府鎮ニ奈管内諸國山岡崩壞之處一とあるも此時の地動を云か、）七年新羅送使奈未加良井山・奈未金紅世到ニ于筑紫一曰新羅王遣ニ級飡金消勿・大奈未金世々等一貢ニ上當年之調一仍遣ニ臣井山一送ニ消勿等一俱逢ニ暴風一於海中一以消勿等皆散之不レ知レ所レ如唯井山僅得レ著レ岸

筑紫儲用物

○持統朝

然消勿等遂不レ來矣、八年二月壬子朔高麗遣ニ上部大相桓欠下部大相師需婁等一朝貢因以新羅遣ニ奈未甘勿那一送ニ桓欠等於筑紫一、九年四月己巳饗ニ新羅使人項那等於筑紫一賜レ祿各有レ差、五月丁亥高麗遣ニ南部大使卯問西部大兄俊德等一朝貢仍新羅遣ニ大奈未考那一送ニ高麗使卯問等於筑紫一、十年夏四月乙卯饗ニ高麗客卯問等於筑紫一賜レ祿有レ差、六月癸卯饗ニ新羅客若弼於筑紫一賜レ祿有レ差（若弼が來たりし事は九年十一月の件に見えたり、）十二月甲戌小錦下河邊臣子首遣ニ筑紫一饗ニ新羅客忠平一（忠平が來たりしは十月なり、）十一年正月乙巳饗ニ金忠平於筑紫一、六月壬戌朔高麗王遣ニ下部助有卦婁・毛切大古昴加一貢ニ方物一則新羅遣ニ大那末金釋起一送ニ高麗使人於筑紫一、八月甲子饗ニ高麗客於筑紫一、十三年二月丙子饗ニ金主山於筑紫一、（師說に金主山金氏なるべし、）十四年三月己未饗ニ金物儒於筑紫一即從ニ筑紫一歸之（金物儒ガ事は十三年十二月ノ件に大唐ノ學生土師宿禰甥白猪ノ史寶然及百濟ノ役ノ時沒ニ大唐一者猪使連子首筑紫三宅連得許傳ニ新羅一至則新羅遣ニ大奈未金物儒一送ニ甥等於筑紫一とも見えたり、）十一月筑紫太宰請ニ儲用ノ物絁一百疋絲一百斤布三百端庸布四百常鐵一萬斤箭竹二千連一送ニ下於筑紫一、十二月乙亥遣ニ筑紫一防人等飄ニ蕩海中一皆失ニ衣裝一則爲ニ防人衣服一以ニ布四百五十端一給ニ下於筑紫一、朱鳥元年正月庚申爲レ饗ニ新羅金智淨一遣ニ淨廣肆川内王直廣參大伴宿禰安麻呂直大肆藤原朝臣大島直廣肆坰部宿禰鯛魚直廣肆穗積朝臣虫麻呂等于筑紫一、夏四月壬午爲レ饗ニ新羅客等一運ニ川原寺伎樂於筑紫一、戊子新羅進調從ニ筑紫一貢上云云　戊辰饗ニ金智詳等筑紫一賜レ祿各有レ差、（持統天皇紀）

筑紫館
○文武朝

に二年二月己亥饗ニ霜林等於筑紫館一、霜林等が來たりし時が事など委しく筑紫防人ニ滿ニ年限一者替、九月己丑遣ニ直廣參石上朝臣麻呂直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫一給ニ送位記一且監ニ新城一、新城は三野稻積ノ二城を云ふ、〔續紀三卷〕に大寶三年七月甲午以ニ災異頻見一年穀不レ登詔減ニ京畿及太宰府管內諸國調半一并免ニ天下之庸一、〔同書八卷〕に養老五年十二月辛丑新羅貢調使大使一吉飡金乾安副使薩金飡金弼等來ニ朝於筑紫一、〔同書十卷〕に神龜四年七月丁酉筑紫諸國庚午籍七百七十卷以ニ官印一印レ之、〔萬葉集五卷〕に神龜五年七月廿一日挽歌一首並短歌筑前守山上憶良云云日本挽歌一首

○奈良朝
山上憶良

年月姓名等ノ事〔世本〕ハ歌ノ後に出せり、今〔拾穗本〕による、

大王能等保乃朝底等斯良農比筑紫國爾泣子那須斯多比枳摩斯提伊企陀爾母伊
麼陀夜周米受年月母伊麼陀阿良爾婆許々呂由母於母波奴阿比陁爾宇知那比枳
許夜斯努禮伊波牟須弊世武須弊斯良爾石木乎母刀比佐氣斯良受伊弊那良婆迦
多知波阿良牟乎宇良賣斯企伊毛乃美許等能阿禮乎婆母伊可爾世與等可爾保鳥
能布多利那良毗爲加多良比斯許々呂曾牟企豆伊弊社可利伊麼須

反歌

伊弊爾由伎豆伊可爾可阿我世武麼久良豆久都麼夜佐夫斯久於母保山倍斯母
伴之技與之加久乃未可良爾之多比已之伊毛我已許呂乃須別毛須別那左

久夜斯可母可久斯良麼世婆阿乎爾與斯久奴知許等其等美世麼斯母乃乎
伊毛何美斯阿布知乃波那波知利奴倍斯和何那久那美多伊麼陀飛那久爾今一首ノ母は御笠郡大野山ノ件に引出ればここには省きつ、

〔同卷〕に天平二年正月十三日萃ニ于帥老之宅一申ニ宴會一也云云　筑前守山上大夫云云
筑前介佐氏子首云云　筑前目田氏眞人云云　筑前椽門氏石足〔同卷〕に聊布ニ私懷一歌三首

阿麻社迦留比奈爾伊都等世周麻比都都美夜故能提夫利和周良延爾家利
加久能未夜伊吉豆伎遠良牟阿良多麻能吉倍由久等志乃可伎利斯良受提
阿我農斯能美多麻多麻比豆波流佐良婆奈良能美夜故爾咩佐宜多麻波禰

〔山上憶良〕

天平二年十二月六日作筑前守山上憶良上〔萬葉集〕に依て考ふるに憶良主は神龜三年に筑前守となりて天平二年までに五年の任限終りて天平三年に都に歸られしなるべしされども天平四年に肥後國熊凝が事をよめりし歌に筑前守とみゆれば又一とせもとゝまり年八月乙未勅曰如レ聞此日太宰府疫死者多思欲下救ニ疫疾氣一以濟中民命上是以奉ニ幣彼部內ノ神祇一爲レ民禱祈焉、〔十二卷〕に天平七年又府ノ大寺及諸國諸寺讀ニ金剛般若經一仍遣下使賑ニ給疫民一并加ニ湯藥一丙午太宰府管內諸國疫瘡大發百姓悉臥今年之間欲レ停ニ貢調一許レ之、八年先レ是有レ勅諸國司等除ニ公廨田事力借貸一之外不レ得ニ迎送一者太宰管內諸國已聚ニ處分一訖云云、十月戊辰詔曰加レ此比年太宰所レ管諸公事稍繁勞役不レ少加以去冬疫疾男女悲困ニ農事一有レ廢五穀不レ饒宜下免ニ今年田租一令中絹ニ民命一なども有り、〔萬葉集六卷〕に天平十二年庚辰冬十月依ニ太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發ニ軍幸ニ于伊勢國一之時云云、〔群書類從廿五卷〕に松浦廣宮本緣起云

藤原廣嗣

右近少將從四位下藤原廣繼太宰少貳任中慮外難觀世音寺讀師能鑒執筆筑前介南淵

廢太宰府

〔國府〕

深雄內豎礒上興波等慕主公而傅、〔續紀十三卷〕に天平十年四月庚申外從五位下大宅朝臣君子爲筑前守、〔同十四卷〕に天平十四年正月辛亥廢太宰府遣右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂等四人以廢府官物付筑前國司（廢府ノ後も國司の居所はなほ太宰府の地なりときこえて別に國府ノ地あるこ、となし、）八月丁酉制大隅薩摩壹岐對馬多禰等國官人祿者令筑前國司以廢府物給公廨又以便國稻依常給之其三島擬郡司并成選人等身留當島名附筑前國申上、仕丁國別點三人皆悉進京、〔同書十五卷〕に天平十五年三月乙巳筑前國司言新羅使薩飡金序直等來朝於是遣從五位下多治比眞人土作外從五位下葛井連廣成於筑前檢供客之事、十二月辛卯始置鎮西府、（御笠郡ノ件に委くいふべし、）〔同書十六卷〕天平十七年五月己未筑前筑後豐前豐後肥前肥後日向七國无姓人等賜所願姓、六月辛卯復置太宰府、（八月己丑給太宰府管內諸司印十二面、）十八年九月己巳從五位上粟田朝臣馬養爲筑前守、〔同書十八卷〕に天平勝寶二年正月己亥左降從四位上吉備朝臣眞備爲筑前守、〔續紀三十三卷〕眞備ノ傳にも勝寶二年云云とあり、又〔江談抄中卷〕にもみえたり、〔同書二十三卷〕に天平寶字五年七月甲申西海道巡察使式部少輔從五位下紀朝臣牛養等言戎器仗設諸國所同今西海諸國不造年料器仗既曰邊要當備不虞於是仰筑前筑後肥前肥後豐前豐後日向等國造備甲刀弓箭各有數每年送其樣於太宰府、〔延喜兵部省式〕に筑前國甲四領横刀十口弓二十張征箭四十具胡籙四十具右每年所造具依前件其儀仗者色別一箇云云筑前筑後肥前肥後豐前豐後日向等國送太宰府府官勘校貯納府庫具錄色目附朝集使申送また太宰府所部國云云等國郡司書生等並聽帶仗なども見えたり、

鎮西府

復太宰府

國司廳ヲ廢ス

筑紫營大津城監ヲ置ム

十一月丁酉正四位下吉備朝臣眞備爲西海道使從五位上丹比眞人土作佐伯宿禰美濃麻呂爲副判官四人錄事四人筑前筑後肥後豐前豐後日向大隅薩摩等八國撿定船一百二十一隻兵士一萬二千五百人子弟六十二人水手四千九百二十人皆免未勅曰云云有免左右京五畿內七道諸國今年田租などもあり、）〔同書二十七卷〕に天平神護二年四月太宰府言防賊戍邊本資東國之軍持衆宜威非是筑紫之兵今割筑前等六國兵士以爲防人以其所遣分番上下人非勇健防守難濟望請東國防人依舊配戍勅修理陸奥城柵多興東國力役事須彼此通融各得其宜今聞東國防人多留筑紫宜加檢括且以配戍即隨其數簡却六國所點防人具狀奏來計其所缺差點東人以塡三千斯乃東國勞輕西邊兵足、（同書二十九卷神護ノ條ニトアルベシ）三年三月戊寅從五位下阿倍朝臣三縣爲筑前守、〔類聚國史五十二卷〕に神護景雲二年戊申天下有大疫筑前國常無大疫之災云云、（續紀廿九卷）に、丁亥去八月大風產業損壞率土ノ百姓被害者衆詔免京畿七道ノ田租ともあり、）〔同書廿一卷〕に寶龜二年十二月城監（九月丁卯陸奥國俘囚三百九十五人分配太宰管內及讃岐國〔同書廿九卷〕に延暦六年三月甲辰詔曰云云左右京五畿內七道諸國百歲已上各賜穀二斛一斛八十已上一斛八十已上五斗餘寡孤獨及癈疾之徒者量其老幼三斗已下一斗已上、仍令本國長官親見鄉邑存

○桓武朝　郡領職事

清眼瞻六（同書四十卷）に延暦九年八月乙未朔太宰府官所部、飢民八万八千餘人請加二賑恤一許レ之などありなほ此外にもあるは省きつ、〔類聚國史□□（十九）卷〕に延暦十七年十月丁亥勅國造郡領其職各殊今出雲筑前兩國慶雲三年已來令二國造帶二郡領一託二言神事一動廢二公務一雖レ有二其意一無レ由二勘決一自レ今以後不レ得レ令二國造帶二郡領一云云、〔後紀七卷〕に延暦二十五年九月甲戌免二田租一以濟二窮民損害一定二年遠近一勅筑前肥前者宜二二箇年一〔今本類聚三代格〕に大同二年符云諸國雜米立二進納一筑前〔六月卅日以前爲二進納之期一〕などもあり、〔類聚國□□（三代格五）卷〕大同三年四月十六日太政官謹奏省二太宰府監典各二員一置二筑前國司一事守一員介一員掾一員大少目各一員右謹按二令條一太宰府帶二筑前國一自レ爾已來或別或隷至二延暦十六年又廢レ國隷レ府〔拾芥抄〕に延暦十六年九月日廢レ筑前付二今得一府解一偏臨二交替事一細加二檢校一未レ進二調庸一並欠二失正税一器仗戎具等ノ類毎レ物有レ數此是攝行之日彼此相讓無レ心二國政一之所レ致也望請分請分置官人一以爲二別當一專二一其心一令レ濟二國務一然則帶レ國之名不レ乖二令條一欠負之煩絶二於國内一者臣等商量承前府帶之時或下二官符一而定二別當一或府司相量分二置其人一同僚之官兼預二國務一勘二責雜怠一不レ同二比國一望請省二大同元年所レ增監典一便充二補國司一庶令二所守有レ別各濟二繁劇一謹錄二事狀一伏聽二天裁一謹以申聞謹奏聞、〔後紀十七卷〕に大同三年五月乙未從五位下紀朝臣長田麻呂爲二筑前守一是日置二筑前國守介椽大少目各一員一、先レ是令二府官攝一行國政一彼是相讓□非二專一一事多二廢闕一因レ茲改レ焉、庚子從五位下大中臣朝臣鯛取爲二筑前守一、〔類聚國史百

○文德朝

九十卷〕に弘仁四年十一月庚午勅夷俘之性異二於平民一雖レ從二朝化一未レ忘二野心一是以令二諸國司勤加二教喻一而更乖二朝旨一不レ事二存恤一彼等所レ申經レ日不レ理含レ愁銜レ怨遂二致二叛逆一宜レ令二云々筑前介正六位上榮井王筑後守從五位下弟村王肥前介正六位上紀朝臣三井肥後守從五位大枝朝臣永山豐前介外從五位下加茂縣主立長等厚加二教喻一所レ申之事早與二處分一其事既重不レ可二輒決一者冒上聞レ勅若撫慰乖レ方令レ致二叛逆一及入レ京越訴者準二當人等准レ狀科罪一但不レ得二因レ此今復二百姓一とも見えたり、〔僧綱補任抄出〕に弘仁五年傳敎大師年四十七爲レ遂二前度海願一重向二筑紫國一修二諸功德一造二等身白檀千手像一軀大般若二部法華一千部一〔後紀十三卷〕に弘仁八年六月辛酉筑前國飢令レ賑二給之一、〔同書十七卷〕に天長二年三月筑前國人舍人臣福長女產二見三人一男二女一給二正税四百束一、〔類聚國史五十二卷〕に淳和天皇天長二年乙巳三月天下大水經二數日一但筑前國無二水害一云云、〔十八卷〕に天長四年三月甲申筑前國人難波部安良賣叙二位二級一免二戶□田租一云云委くは宗像郡ノ件に云べし、〔類聚國史八十四卷〕に承和二年七月甲子先レ是稟二貸筑前國貧民正税一萬束一限以二五年一而窮乏之輩餘弊未復因更延二三年一也、〔續後紀七卷〕に承和五年四月庚子勅筑前筑後肥前豐後等五箇國頻年遭レ疫死亡者半蘇息之輩既疲二造船一就レ中擇二窮貧者一給二復一年一、五箇國の五は四を誤れるにや、〔同書九卷〕に承和七年四月辛亥從五位上文室朝臣宮田麿爲二筑前守一、〔武家大系圖〕に清原夏野子筑前守清原海雄と云人あり、〔同書十卷〕に承和八年正月甲申從五位下南淵朝臣年名爲二筑前守一、〔文德實錄□卷〕に仁壽元年正月甲戌朔從五位下藤原朝臣眞數爲二筑前守一、〔同書七卷〕に齊衡二年正月壬午朔從五位下藤原朝臣興邦爲二筑前介一、〔同書八卷〕に齊衡三年正月丙辰橘朝臣三夏爲二筑前守一、〔文德天皇實錄十卷〕天安二

藤原興邦

年二月辛卯紀朝臣本道爲筑前權守、閏二月壬子藤原朝臣興邦爲春宮大進、右衛門佐筑前守如レ故、〔三代實錄一卷〕に天安二年十一月七日從五位下守內藏ノ權ノ頭兼行左衛門佐筑前守藤原朝臣興邦云々とある守は介を誤れるにはあらぬにや、なほよくかむかふべし〔三代實錄二卷〕に貞觀元年正月十三日右近衛中將從四位下兼行相模守源朝臣興爲筑前守、〔同書四卷〕に貞觀二年正月十六日右近衛中將從四位下源朝臣興爲筑前守、興去年正月兼筑前守、母憂去レ職今以本官赴レ之、〔同書五卷〕に貞觀三年正月十三日大藏卿正四位下源朝臣生爲筑前守、八月廿一日從五位下紀朝臣本道爲筑前權守、本道天安二年二月拜此職、母憂去レ職今詔赴レ之、〔同書七卷〕に貞觀五年二月十日太宰少貳從五位下藤原朝臣眞庭爲筑前守、散位從五位下永原朝臣永岑爲介、〔同書十卷〕に貞觀七年正月廿七日從五位下行雅樂助藤原朝臣業世爲筑前權介、〔三月廿二日以筑前國水田三十町充對馬島上縣下縣兩郡司統領職田、〔同書十二卷〕に貞觀八年三月八日勅遣大安寺僧傳燈法師位一如於筑前筑後豐前豐後肥前肥後等國諸神社讀經、〔同書十四卷〕に貞觀九年二月十一日筑前守從五位下藤原朝臣安棟爲武藏守、從五位下守大判事紀朝臣恒身爲筑前守、〔十六卷〕に貞觀十一年云々筑前權介長岑宿禰恒範云云〔同書十九卷〕に貞觀十三年五月二日制筑前國所レ輸攝津國住吉神封戶調庸綿便付太宰貢綿使送彼神社、永以爲レ例、〔同書二十四卷〕に貞觀十五年十二月十七日類聚國史には二月とあり、太宰府言筑前國去仁壽二年班レ田其後歷十九年一死亡口分散入富豪一無

○清和朝

益貧身徒苦賦役仍須早班口分令民安堵但課役之民日無偷安不課之戶時多閑逸論其身事固非同年然則所得之分多少宜殊昔唐制丁男中男給田一頃殘疾癈疾四十畝寡妻妾四十畝差降之法誠非無故今定課丁給三段三百二十九步不課男給二段女一段然則女子得半男之分乘田益舊年之數又依弘仁十四年二月二十一日格管內諸國始置公營田而筑前國耕作數年即以停止尋其由緒緣土地薄墝穫輸數多也今須班田之日擇良田九百五十町不論土浪人頒充令耕作夏時以正稅買備調庸秋月以穫稻塡納本倉然則百姓免徵責之酷貢賦絕逋懸之煩又府之備隣敵其來自邈代而去貞觀十一年新羅海賊窃窺間隙掠奪貢綿自斯遷運甲冑安置鴻臚差發俘囚分番鎮戍重復分置統領選士備之警守今所用糧米無闕有數出納之事非無勾當加以朝夕資給米鹽煩多仍差置書生駈仕等計口給貧結番宿直自餘之色觸類猥雜件國割女子口分置公營田所遣之田猶倍他國須分置一百町名營固田如其耕營收所輸之地子充年中之雜用但相割地子因准例進納又府儲料稻惣三万束凡使粮並水脚賃及厨家雜用凡百庶事惣在其中諸國所備各有色數而或致違期或置未進府中之用常苦闕乏須割置田二百町名府儲田收其地子以充府用但租穀同上依請許之、〔同書廿八卷〕に貞觀十八年三月九日參議太宰ノ權ノ帥從三位在原朝臣行平起請二事一其一事請營壹岐島ノ水田一百町使充

〔典範〕

○醍醐朝

對馬島年粮二日檢二文簿一六國一年所レ漕二逗對馬島一年粮穀二千斛 運賃並雜田料穀縁三萬四千五十束 就レ中筑前筑後肥前豐前豐後等ノ國各三百二十斛云云などもあり、委くは對馬志一之卷に引出て論へり、さて又〔延喜主税式〕に凡筑前筑後肥前肥後豐前豐後等國每年穀二千石漕二送對馬島一以充二島司及防人等粮一 凡壹岐島島司及防人等粮 凡太宰管内諸國島ノ大帳調帳税帳令二府ノ雑掌勘申一 凡筑前筑後肥前豐前豐後等國副二當國雑掌一各得二勘辨一 凡太宰府管内諸國島ノ大帳調帳税帳令二府ノ雑掌勘申一即附二雑掌一收二大帳返抄並調帳損益等一朝集帳及自餘國島四度公文令二府一

貸挾抄水手功粮並用二正税一ともありまた〔今本類聚三代格〕に貞觀十八年三月廿七日太政官符云應周防國田租穀充紙錢料雑物直事右參議從四位下主右大弁兼行侍從播磨守源朝臣希炎狀偂謹檢二案内一錢料物者備後周防長門伊與筑前豐前肥後等國所二備送一也其用途支度前後有レ二自二弘仁十三年一至二于天長五年一年別以三千五百貫一爲レ限、自二天長六年一至二于承和元年一以二一萬一千貫一爲レ限定二此數一之日支度用物課二所レ出國一令二交易一進二其後依二銅鉛雖レ採減一者前後ノ數一以三三千五百貫一定爲二年料一須下隨二其程一減定ゑ定レ用而只減二錢數一不レ令二料物一然而諸國牧宰動致二闕怠一絶無二完納一年料之錢不レ出二結修一因レ茲年來之貫不レ過二五六百貫一是則縁以二周防一國ノ所送之物一所二錯送一也伏望者自レ今以後停二止件七箇國交易一割二彼國納官租穀六千九百斛九斗二升内二百七十九束四分二毫相折酒遣穀四千二百十二斛二升五合然則雖レ有二損年一猶可二以足一矣況無二損年一寧無二餘剩一乎但彼國交易雑物直稻除二銅鉛一之外每年爲擬附帳言上者大納言正二位兼行左近衛大將皇太子ノ傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依レ奏ともあり、〔同書三十二卷〕に元慶元年八月廿二日先レ是太宰府言去七月二十五日大唐ノ商人崔鐸等六十三人駕二一隻船一來二着筑前國一問二其來由一崔鐸言從二大唐台州一載二貴國使多安江等一頗賫二貨物一六月十五日散位從五位上毛野朝臣澤日爲二筑前守一、〔扶桑略記一卷〕に元慶九年十月九日太宰府言上七月十三日夜陰雲晦合間如二雨聲一遥明見レ雨紛々帰レ砂交下二境内一水陸苗稼草枝葉皆焦枯一既由降レ雨洗二去塵砂一苗稼更生とあり、〔同書四十七卷〕に仁和元年二月廿日從五位上行筑前守興我王爲二山城守一從五位下行造酒正布勢朝臣園公爲二筑前守一、〔同書五十卷〕に仁和三年八月廿二日掃部頭從五位下藤原朝臣興範爲二筑前守一、興範後に太宰ノ大弐となりて筑紫に下られしこと〔後撰和歌集〕にも見えたり、〔公卿補任五卷〕に藤原興範仁和元年八月二日筑前守、寛平五年正月十一日豐前守、同四月廿日筑前守とあるはいささか心得がたし、〔延喜廿四卷主計式〕に凡太宰管内筑前筑後肥前肥後豐前豐後等六箇國ノ大帳調帳者准二税帳一令二當國雑掌勘申一之〔同廿二卷民部式〕に凡太宰府管内諸國島ノ大帳調帳税帳令二府ノ雑掌勘申一筑前筑後肥前肥後豐前豐後等國副二當國雑掌一各得二勘辨一、〔同廿六卷主税式〕に凡筑前筑後肥前肥後豐前豐後等國每年穀二千石漕二送對馬島一以充二島司及防人等粮一其部領粮船賃挾抄水手功粮並用二正税一 〔同式〕に太宰管内ノ諸國充二對馬島司料一之外交二易輕貨一送二太政官厨一ともあり、凡壹岐島島分寺法會布施供養料稻一万二千九百七十一束把一分五毫太宰府以二管内諸國正税一通計以充行筑前國八百八十束云云凡壹岐島島分寺佛聖供料稻一千三百卅二束八分講師常供四千七百廿六束以二筑前國正税一每年充行〔同式〕に凡檢損並不堪佃田賑給疾死等使ノ程限筑前等國損田百日不堪佃田八十日また驛馬直法筑前等國上馬四百束中馬三百五十束下馬三百束また驛馬死損筑前等ノ國十分許二損二分一 右大臣從二位兼行右近衛大將菅原朝臣道眞任二太宰權帥一云云 二月二日如二筑紫國一〔續本朝文粹□卷〕に延喜元年正月二十五日〔政事要略五十三卷〕應レ行二雑事五ヶ條一事一應下返進諸國雑田二千三百六十六町九段五十二歩其地子稻混二合正税一事國造田四百十一町五段云云 筑前國六町云云 一闕郡司職田千八百三十町八段云云 筑前國六十四町齋衡二年云云 大納言正三位兼行左近衛大將藤原朝臣忠平宣奉勅依レ請、〔扶桑略記六卷〕に天慶三年十二月伐件帳所レ注 大納言正三位兼行左引二率武勇一自二陸地一行向慶幸春實等鼓レ棹自二海上一起向二筑前博多津一 純友征 好古 こゝの事委くは那珂郡博多の件にいふべし、

○藤原純友亂

筑前之一（國志之一）終

○刀爽冠入

筑前之二

○筑前國志之二

〔朝野群載廿卷〕に太宰府解申請官裁事言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀右件賊船五十餘艘來著對馬島切略之由彼去月二十八日解狀今月七日到來即載左言上先月且整舟船且與軍兵警固要害猥々然間壹岐島請師常覺同七日申奏來申云合戰之間島司及島內人民皆被殺略（是は寛仁年の合戰なりへり、）常覺脫者同日襲來筑前國怡土郡經人物燒民宅其賊徒之船或長十二箇尋或八九尋一船之櫂三四十許所乘五六十人三十人耀刃奔騰次負弓矢負楯者七八十人計相從如此一二十隊登山絕野斬食馬牛又屠犬肉叟嫗兒童皆悉斬殺男女仕者追取載船四五百人又所々運取穀米之類不知其數云云事出慮外要害地廣雖召人兵來未多雖整舟船勢未難與所差遣兵士並彼郡住人文室忠光等合戰之場賊徒中矢者數十人或扶以載船其中追所斬首數□兵士等中矢者十餘人同八日移來同國那珂郡能古島重錄在狀言上又了但彼郡人郡或迷國戰或爲賊虜飛驛言上之前不中子細也以前少監大藏朝臣種材藤原朝臣明範散位平朝臣爲賢平朝臣爲忠前監藤原助高從仗大藏光弘藤原友近等警固所令相禦同九日朝賊船襲

來欲燒警固所距却之間奪呼合戰其間中矢者十餘人賊徒遂不能前戰還著能古島其後二箇日風猛波高不能相攻十一日未明同國早良郡至志摩郡船越津先是分虫（遣）精兵豫虫（令）相待同十二日酉時上陸與大神守官權檢非違使賊弘延未合戰中矢之賊徒卅餘人生得二人其中一人被疵一人女少貳平朝臣致行前監種材大監藤原朝臣致孝散位爲賢同爲忠等差加兵士以船卅餘艘令攻追同十三日賊徒至肥前松浦郡攻切村閭爰彼國前介源知率郡內兵士合戰中矢者數十人生得者一人賊船不能進攻遂以歸却藤白兵船等攻戰云云又差遣救兵四十餘艘了但生虜者著皆高麗人者以通事令尋問之處中云高麗國爲禦刀伊賊遣彼邊州而爲刀伊被獲也者其疑難決追賊之船還之後搜見誠可言上上文所擊獲首虜并戎具等追將進上且錄在狀謹解寛仁三年四月十六日正□位上行大典上毛野朝臣師善三品帥親王（在京）從五位下行大監菅原朝臣雅隆正二位行中納言兼權帥藤原朝臣隆家大監正六位上大藏朝臣兄須（光）正五位下行少貳兼筑前守源朝臣道濟從五位下行少監豐島眞人靜風、從五位下行少貳藤原朝臣盛規正六位上行少監上毛野朝臣行陰（〔拾遺和歌集〕に源道濟筑前守にてくだりし事見えたり、又〔今昔物語三卷〕に筑前守源道濟ぬしの侍女最期に哥をよむ事見えたり、事長ければ省きつ、）〔武家大系圖〕に筑前守小野朝臣葛雄、參議篁之子道風之父也、また筑前守菅原朝臣清鑒菅家之御孫也、（筑前守藤原朝臣行泰又筑前守藤原基廣又筑前守藤原朝臣基輔など物に見たれど時代詳ならざれば暫く省きつ）〔後拾遺和哥集〕に筑

前守高階成順、〔後撰和歌集〕に父のもとになさなくて、筑前ノ國にはべりて年へて後成順が其國に成てはべりたればくだりてよめる中將ノ尼、そのかみの人は殘らじ筥崎の松ばかりこそ吾をしらめとあり中將ノ尼は〔百練抄四卷〕に寛德二年八月廿九日諸卿定申法家勘申筑前國住人成順の母なるべし、（永承二年）清原守武入唐事云云十二月廿四日渡唐者清原守武配流佐渡國同類五人可浴徒年之由被宣下件守武太宰府召進之於貨物者納官厨家天喜四年新成櫻花宴殿上記に筑前權守長政應召候寶子是携綵竹之輩也（古今著聞集）に前筑前守兼俊殿上に笙吹なきによりて昇殿をゆるさるゝ事見えたり、時代はい　また考へず、〔新續古今和歌集〕に筑前守藤原經衡、〔詞書〕に筑前守にて國に侍りけるに日を卒るとて云云とあり、時代のこ　いたくてりければ雨の祈に鎮門明神に鏡とはいまだつまびらかならず、〔扶桑略記五卷〕に寛治二年十一月一日前太宰大貳藤原

○源平時代

實政左遷伊豆國依宇佐宮愁也云云前筑前守時綱配流安房國依同事也、〔朝野群載九卷〕に清原頼隆長治三年正月任筑前守〔大日本史五十三卷〕安德天皇本紀に元

〔戸次氏〕

曆元年八月十七日車駕至太宰府御太宰權少貳原田種直家菊池臼杵戸次松浦等營行宮衛護〔平家物語〕日菊池高直據城不出九國ノ諸將皆不至今從盛衰記長門本ノ平家物語〕源平盛衰記三十二卷に原田藤頼種直臼杵戸次松浦黨を始として云云とあり〔常足按〕ずるに戸次氏は頼朝卿の落胤大友親直が末葉と號す元曆の比に見えたるはいぶかし、（紀カ）家物語肥後（前）守作三云云九月尾形維義（能）叛臣杵松浦等應之維義犯太宰府菊池高直原田盛衰記〕今從盛衰記〕種直等防戰于博多〔平家物語作季貞盛澄遮戰于高野本平家物語〕莊、今從盛衰記長門本平家物語〕天皇御腰輿發箱崎公宮人徒步從焉自箱崎遷藤原秀遠山鹿城御船至柳浦〔同書白九十八卷〕天遠放傳に元曆元年從源範頼討平氏於西海頼朝賜書嘉之尋爲鎮西守護文治二年爲筑紫奉行

○安德天皇

〔兩朝平攘錄四卷〕に源頼朝以兵衛佐宣伊豆州遂與其黨起兵據關東以誅清盛爲名因乘勝席捲盡逐平氏平氏仍據筑前等九州與源各分其地連年相攻殺、〔鎮西要略二卷〕に文治元年二月朔日參州征豐前之敵伐筑前之敵云云軍而其一攻山鹿其一攻太宰府北條三浦爲前驅緒形惟義爲前登足利下河邊澁谷齋院以菊池爲先導向宰府岩門太宰少貳種直以岩門城爲要害大向源軍防拆二月三日原田種直及二男三池敦種以下一族多致死兵衛尉種益遂電岩門城沒落矣山鹿秀任亦失利出奔筑前國齊屬源軍九州逐日來伏平家一族咸亡、〔東鑑四卷〕に元曆二年五月八日因幡前司大夫屬入道筑後權守主計允筑前三郎等參會鎮西事等被經其沙汰早可令施行之俊兼奉之其條々々一所被遣鎮西之御家人等盧谷五郎以下多以歸參訖遣御使被止向後參上可沙汰鎮西海事一西國御家人交名仰義盛可令注進事云云〔藤原經長卿記〕に文永八年十月二十三日蒙古船至今津在太宰府西二可三里東使入洛云云〔太平記三十九卷〕に文永二年八月十三日大元七萬余艘の兵船同時に博多ノ津に押寄たりとあり、又〔八幡愚童訓〕に文永十一年九月の比異賊四百五十艘の大船に三万人乘て寄來たる云云とあり、〔太平記〕ノ說に委く博多の件に引出すべし、〔愚童訓〕は早良郡ノ件に引いづべし、〔一代要記〕に文永十一年十月十三日異國ノ軍兵亂入壹岐島云云同十九日亥刻攻來筑前國早良郡同二十日始合戰宰府軍等皆北畢爰同日亥刻許兵船二艘出來晴ノ天合戰非凡慮之所及測知是神明之化儀也即異國ノ軍兵退散彼兵船一艘留之所乘之人數六

○鎌倉幕府ノ世

○文永弘安之役

十人許云云、〔日蓮注論說〕云同十九日辰刻筑前博多筥崎今津佐原寄來同廿九日辰刻東郷入道兄惠子惠三郎左衛門尉資、大友出羽守直泰大友貳左衛門蛋秀雖波二郎在助　菊池次郎康成惣九國兵集戰故死者相枕などもあり蒙古襲來の事は此外多くの文どもたる見えたるを後の卷こそ引出て論へり、〔編年集成〕に建治元年正月十八日蒙古人二人高麗人二人已上四人自鎮西遣關東不入洛中自山崎東經岡屋醍醐七月廿一日自鎮西亦送蒙古人于關東路次依前九月六日以征夷大將軍惟康親王執權相模守平時宗之命於鎌倉龍口斬蒙古使等九人、〔元史二百八卷〕日本に至元十八年正月命日本行省右丞相阿剌罕右丞范文虎及忻都洪茶丘等率十萬人征日本二月諸將陛辭、又爲風水不便再議定會於一岐島今年三月有日本船爲風水漂至者令其水工畫地圖因見近太宰府西有平戸島者周圍皆水可屯軍船六月阿剌罕以病不能行命阿塔海代總軍事八月諸將未見敵喪全師以還乃言至日本欲攻太宰府暴風破舟猶欲議戰萬戸厲德彪招討王國佐水手總管陸文政等不聽節制輒逃去本省載餘軍至合浦散遣還鄕里未幾敗卒于閭脫歸言官軍六月入海七月至平壺島移五龍山八月一日風破船五日文虎等諸將各自釋堅好船乘之棄士卒十余萬于山下衆議推張百戸者爲主帥號之曰張總管聽其約束方伐木作舟欲還七日日本人來戰盡死餘二三萬爲其虜去、九日至八角島盡殺蒙古高麗漢人謂新附軍爲唐人不殺而奴之閭章是也蓋行省官議事不相下故皆棄軍久之莫青與吳萬五者亦逃還十萬之衆得還者三人耳、此事〔綱資通鑑〕〔東國通鑑〕〔國書編〕〔武備志〕等に見えたり、〔五雜俎〕に元之盛時外夷朝貢者千余國可謂下窮天極地罔也不貢服而唯日本倭強不臣阿剌罕等率師十万往征得返者三人耳などもあり〔續四要略〕に弘安九年蒙古人舟師自志賀沖襲來而燒筥崎人家其舟大將名阿答海賊兵數百人所殺引退海上とあるも弘安四年の事を誤れるものなるべし、至元十八年はすなはち弘安四年にあたれり、〔八幡愚童訓〕にも弘安四年の夏蒙古大唐高麗已下の國々共の兵船具て三千余艘大船に數千万人乘連て、こそ來たりけれ云々ともあり、〔鎮西要略三卷〕に文永十一年秋九月蒙古兵船五百余艘襲來於北海亂入壹岐對馬其爲先陣者浮船於筑之海屯軍於志賀玄界島太宰少貳經資大友頼康菊池原田松浦黨臼杵戸次紀伊山鹿小玉黨草野高木龍造寺高來有馬純黨大村西郷深堀等及神職社務山徒防人都十万余騎、至壹岐松浦會津博多姪濱所々相戰十月二十日合戰於筑前赤坂防戰數廻云云少貳經資之證文見之、十一月二十一日異賊艘艦爲我神風溺海殲矣大將僅免而退亦有一巨船漂泊於志賀海云云我兵所得之首數百梟之水築云云、弘安四年蒙古大軍襲來於壹岐對馬松浦平戸筑前之北海云云少貳大友島津菊池以下鎮西諸國之侯伯卅二人及中國四國軍兵參陣於太宰府者廿五万騎也至宗像香椎立花多々良濱青柳筥崎博多名島鳥飼赤坂生松原百路原今津今張姪濱松原平戸東西數十里張陣如蟻之列七月云云蒙古軍之在筑前海者大亂入於今津赤坂百路原生松原云云我兵爲蒙古大射所敗失利者多原田氏軍敗衆兵沒死深沼者不可等焉山田氏青柳氏以逞兵數百騎救原田奪擊蒙古軍累相拒而山田青柳亦敗矣蒙軍數万所陟赤坂菊池次郎驍勇万余騎二列而相戰蒙軍於赤坂惟蒙兵數万討圍之而敢無敢退郎從悉討死菊池亦被深創突出

敵中旋本陣所討取賊三千余人也少貳入道覺惠父子一族三千余騎相戰百路原嫡子筑後次郎盛經十三歳初并動於敵軍得首數級云云覺惠被創敗走二男豐前三郎左衛門尉景資、與臣近江平四郎平塚太左衛門等留搏戰而擊破其中堅景資能得騎射射蒙古軍長刹相公殺既而蒙古數万之兵亂入博多筥崎駈破大友之陣及留守所之軍大友頼泰父子一族分散云云蒙古數十万取構水木城而蒙古兵士據焉切斷數千余町累壘大盤石以爲城之堅蓋此城者往昔神功皇后行在之處也少貳大友菊池島津以下九州武人各督數万之兵擊破水木砦逆賊兵於海上八月朔日暴風大扇蒙古之艦艦爲風波被碎賊徒悉溺死、〔蛭蠅抄〕に弘安四年蒙古合戰時隨關東御使並守護命自保志賀向博多致警固賞肥前國神崎庄配分事一人筑前國榊定禪領主西願田地三町西郷東乞井戸里云云屋敷加崎郷秡田里云云畠地東郷横田村云云右孔子配分如此有限佛神事不可有懈怠之狀如件正應二年三月十二日書判、〔鎮西要略三卷〕弘安四年八月云云京兆六波羅武者所宇都宮下野守□綱帶大將軍印率六万軍兵下向筑前國時也蒙古沒落之後也然而在筑前爲異賊襲來之武備於是筑前海濱自志摩郡至宗像濱行程百二十余里築石垣高廣共一丈有余也最大儀計略也九國侯伯順而經營之是蒙古防拆之要壁也、同七年蒙古船師來於筑前海亂入湊而燒博多民家警衛武士擊而走之、〔鎮西要略〕に弘安五年北條遠江守爲時爲異賊之

鎮西探題

北條英時

○南北朝時代

武備下向處筑前姪濱（博多）遂抽稱奉行所、〔鎮西要略三卷〕に永仁元年奉行所從五位下北條遠江守爲時卒鎮西之職十二年也、北條越後守兼時任鎮西探題下筑前築姪濱是探題之始也以令監九國二島、〔鎌倉將軍家譜〕に永仁元年三月以北條兼時爲鎮西探題居筑前以監九州、正安二年七月異賊防禁事被相觸於上總前司北條實政（在鎮西時）（玄孫）並西國堺相論事可沙汰之、〔雷山文書〕に異賊警固番之事關東御事書掃部助御教書案如此如狀者自今月來十二月晦にいたり可在陳之由相觸筑前國地頭御家人已下輩不日催上候早任被仰下之旨今月中可被相向役所也仍執達如件嘉元二年正月十一日沙彌花押中村彌二郎殿、元亨元年十二月英時爲鎮西探題、正慶二年五月廿七日少貳大友菊池等起兵於九州攻探題英時殺之、〔大日本史二百四卷〕に筑紫探題北條英時亦爲少貳貞經所亡時直塗窮投降于貞經島津貞久因僧俊雅奏請貸請死復食邑尋病死、〔鎮西要略三卷〕に正慶元年岑僧正春雅謫來于筑前國云云岑僧正春雅九州之事暫在僧正之計、〔太平記十一卷〕に長門探題遠江守時直云云其比案ノ僧正後雅と申せしは君の御外戚にておはせしゑ笠置の合戰の刻に筑前國へ流されておはしけるが、今一時に運を開きて、國人皆其左右に憑み從ふ九州の成敗敕計以前は暫く此僧正の計ひにありしかば少貳島津時直を同道し、〔同書二百十二卷〕に少貳貞經筑前ノ人也本姓武藤氏七世祖頼兼始任太宰少貳子孫世々襲其職居太宰府因更以少貳命族五世祖資頼甚善弓馬爲源頼朝所愛寵從討藤原泰衡有功爲筑後守食岩戸邑父盛經貞經早辭職薙髪曰妙惠、元弘元年大駕西幸

少貳貞經

船上山ニ貞經與ニ大友貞宗菊池武時ニ通レ謀奏請テ討ニ北條氏ニ綸旨ヲ帝聽レ之賜以ニ錦旗ニ武時將擊ニ筑紫探題北條英時ニ遣レ使報レ之貞經聞ニ京師之戰官軍不ニ利即斬ニ其使ニ與ニ貞宗ニ俱援ニ英時ニ遂殺ニ武時ニ及ニ官軍克ニ京師ニ貞經悔懼更與ニ貞宗ニ同攻ニ殺英時ニ以自贖足利尊氏之反也適貞經二子從在ニ鎌倉ニ尊氏因遣ニ書貞經ニ同レ逆已而尊氏攻ニ京師ニ大敗乃與ニ弟直義ニ西奔將レ赴ニ太宰府ニ貞經多備ニ馬仗ニ待ニ其至ニ遣ニ子賴尚及其弟某ニ率ニ銳卒數百ニ往迎並製ニ錦直衣ニ奉ニ尊氏兄弟ニ菊池武敏邀擊破ニ賴尚ニ掩至ニ太宰府ニ貞經兵寡不レ能レ支出走武敏縱レ火盡焚ニ其所レ備戎器ニ貞經保ニ內山佛寺ニ會ニ其女婿原某逼ニ貞經ニ欲俱出降ニ貞經不レ肯乃對ニ十卒ニ謂曰我荷ニ將軍倚賴ニ殊重ニ今聞其臨境遣ニ賴尚ニ奏レ迎而挫衂至ニ于此ニ何面目見ニ將軍ニ乎即與ニ衆百餘人ニ割レ腹而死小子僧宗聽毀戶爲レ薪火ニ其屍ニ自投ニ其火中ニ焦死貞經臨命囑ニ寺僧ニ戒ニ賴尚等ニ曰汝曹莫レ用レ爲レ我誦經修薦ヲ唯善助ニ將軍ニ濟ニ鴻業ニ此是大佛事矣昔三浦義明知ニ源家將起效ニ死衣笠ニ使ニ褒賞延ニ子孫ニ我將レ爲ニ義明ニ汝曹謹勿レ忘ニ吾言ニ也尊氏聞ニ其死ニ甚悼惜之至哀感左右而賴尚由レ是益被ニ恩遇ニ云子賴尚餘子失ニ其事蹟ニ賴尚襲任ニ太宰少貳ニ爲ニ筑後守ニ叙ニ從五位上ニ、（會津ノ〔津川氏文書〕ニ新田左衛門佐義貞與同之仁菊池掃部助武敏依奇來宰府於中途遣付去年十二月卅日抽軍忠之上引籠菊池山城之間今月三日致合戰親類若黨等討死手負中間被疵分取由事申狀賜候訖可令注進候仍執達如件建武三年正月十三日賴尚書判、安藝助太郎殿、貞經之舉兵也北條英時使長岡惟幸來察ヲ變貞經稱レ病不レ見惟幸更詣ニ賴尚ニ則視ニ士卒方製楯砥鏃ニ謂ニ

菊池武敏

多々良濱戰

其果叛ニ也伺ニ其出就ヲ坐拔ニ佩刀ニ前刺賴尚素拳捷學ニ棋局ニ扞レ之因搏左右競集亂ニ刺惟幸ニ殺レ之、賴尚遂與レ父俱討ニ殺英時ニ後將レ兵迎ニ足利尊氏弟直義軍ニ比レ過ニ水木渡ニ菊池武俊奄至悉擊ニ殺後騎ニ賴尚隔レ水不レ能ニ還救ニ奔會ニ尊氏于赤間關ニ從至ニ蘆屋津ニ軍中已傳貞經死尊氏召問レ之賴尚恐レ損ニ軍氣ニ詭對云無レ有也乃前導至宗像大宮司政弼家ニ賴尚進陣ニ蓑尾濱ニ尊氏聞ニ武俊大兵來屯ニ博多ニ即夜召ニ賴尚ニ議計賴尚曰宰府之戰貞經輙失レ利以ニ賴尚ニ適出侯騎從兵守不レ多也雖レ然貞經素諳ニ本國地形ニ料其既間道脫出也將軍明日進レ兵則管內諸郡兵將爭レ先來屬ニ麾下ニ武敏孤軍不レ足ニ多慮ニ賴尚一人之力以能制レ之也聞者稍強膽進至ニ多々良濱ニ（多々良濱合戰前後の事太平記の趣とはいさゝかかはれる處あり、）賴尚望ニ武敏兵盛ニ謂ニ尊氏直義ニ曰敵兵雖レ衆今當ニ來降ニ欲レ抗ニ我軍ニ者不レ過ニ三百ニ賴尚奮死蕩レ之則彼直爲ニ風前埃ニ耳及レ戰降者果多武敏遂敗走、尊氏之取ニ筑紫ニ山ニ此戰ニ也尊氏直義至ニ太宰府ニ始知貞經之死甚哀直義爲持喪禁軍士喧嘩不レ出レ帳數日賴尚齎ニ酒肉ニ往謝曰公之乖意及レ此貞經雖レ死不レ朽矣然軍機難レ緩請速出視ニ將士ニ因自起勸レ酒直義爲之强飲而罷尊氏東向云云、後還ニ筑前ニ尊氏與以ニ采邑數處併贈ニ錦直垂ニ直義又贈以ニ愛馬ニ以勞ニ其前後功ニ且報ニ其父貞經者昔日之德ニ也、初多々良濱之戰其下雛庭某力戰有ニ殊功ニ直義又與ニ佩刀ニ賞レ之、正平中賴尚爲ニ菊池武光ニ所レ攻勢窮降レ之一色直氏攻ニ賴尚於古浦城ニ賴尚戰大危賴ニ武光援ニ得レ免

〔大原合戰〕

〔岡城〕

乃貽血書謝之及武光討畠山重隆令賴尚發兵相援賴尚輙叛與阿蘇大宮司宇治某通謀舉兵太宰府明年武光奉征西將軍懷良親王來攻賴尚隔筑後川而陣武光進濟川賴尚退陣大原夜與武光所襲大敗明日苦戰數十合又敗死者凡三千余人遂退保寶萬嶽尋與大友氏時逆擊武光於香椎又敗足利義詮以斯波氏經爲筑紫探題遣援之、賴尚氏時從其子松王戰長者原又敗賴尚退據岡城與武光相拒久之卒子忠資賴高並戰死大原、大原合戰の事〔太平記三十三巻〕には延文三年とあり、〔古本九州軍記一巻〕並に〔將軍家譜〕には延文四年とあり、〔太平記〕には將軍方には新少貳及一族二十三人郎從四百余人其外軍勢三千二百二十六人討死とあり、〔古本九州軍記〕には一族郎從四百余人其外軍勢二万六千人討れ手負一万八千余人なりしとあり、又〔太平記〕に菊池方に討死する者八百余人とあり尚ノ城とあるは松岡城なり松ノ字をもらせり、〔太平記〕〔日本史〕ともに松の字を落せり、岡ノ城と云は今の豐後竹田ノ城の事にて松岡とは其間はるかにへだたりてまがふべくもあらず、〔古本九州軍記〕に松岡ノ城あるぞ正しき、〔京都將軍家譜〕に延元元年二月六日尊氏逃於九州入宗像大宮司ヵ館、太宰少貳賴尚菊池掃部助武俊攻尊氏尊氏使義直拒戰多々良濱武俊敗北乃使仁木義長攻菊池城一拔之又陷九州處々之城郭以平之云云、四月尊氏出太宰府使義長及少貳大友守九州、貞和五年正月尊氏長庶子直冬爲西國探題、〔鎮西要略三巻〕に貞和五年九月直冬下向肥後後賴尚迎入太宰府以其女聖之堂一色道猷爲管領掌九州之事少貳賴尚不悅是故迎直冬欲逞權勢故乎、○〔雷山文書〕に爲直冬誅伐今月三日已發向之由直氏所注申也忠節之至殊以神妙猶可抽戰功之狀如件、觀應元年四月十九日花押、〔一色左京大夫直氏の判なり〕麻生一族中、志摩郡由比〔重富家ノ文書〕に直冬賴尚已下凶徒退治事就綸旨御教書所發向也、右付聽令可被致忠節仍執達如件、正平七年三月十四日、沙彌判　由比重富次郎殿、〔鎮西要略三巻〕に觀應元年足利左兵衛督直冬朝臣在宰府以廻文一應九州二島之軍兵其不從爲者加征伐矣、佐々木直貞爲直冬之執事太宰少貳賴尚行事、一色右馬助入道々猷在筑前姪濱、九月直冬之軍代今川五郎氏範所々發向筑前肥前之御家人屬其手矣、二年三月京都將軍與武衛直冬父子相和睦於是筑紫之武家方一統矣云云、文和元年右馬權頭範光下向子鎮西〔二年正月上旬京都以一色右京權大夫直氏斯波赤就宮内大夫爲守護代下向畠山治部大夫下向、薩隅日州之藩鎮也、範光爲肥州之守護、處船岡山直氏下向於筑之姪濱二月二日直氏與菊池武光於筑前國針磨柏合戰直氏敗退肥前綾部城菊池鎮筑前國（或曰少貳賴尚屬宮方相拒直氏針磨柏合戰）　觀應元年直冬ノ起兵於筑紫中國ノ人多應焉、延文四年二月筑紫探題一色直氏及弟範光爲菊池武光ニ被逐歸洛、六月使細川繁氏爲筑紫探題道死、七月菊池武光於筑紫與少貳大友等合戰大破之、初自建武已來菊池武重及子武光居肥後國從南帝之命不屈故屬武家屢攻擊邊境其威雲於九州云云關西親王良懷號將軍ノ宮初菊池氏奉之以爲主在筑紫、　應安五年今川伊豫守貞世下向九州、〔吉川系圖〕に應安四年今川貞世入道了俊補其介應見獄於兩城合戰懸先、〔雷山文書〕に爲今川伊豫入道了俊參洛九州ノ地頭御家人本知新恩事於證分明之地者不日可致沙汰付之由所被仰下也仍執達如件應永三年三月十六日花押（澁川滿頼也）右兵衛佐殿（入道々鎮と號す）、　七年三月將軍家發京師赴九州賴之及斯波義將畠山義深土岐佐々木赤松今川荒川已下從兵十萬餘人四月到安藝先陣於長門與菊池武政合戰九州人多背菊池者菊池奉關西親王引兵歸太宰府將軍家到豐前菊池退筑後高良山將軍家進著太宰府此間先鋒者與菊池屢戰互有勝負、九月菊池乞降和平事成菊池歸肥後國於是以日向賜伊東氏筑前肥前授少貳長門卑大内義弘豐後與大友永和三年朝鮮國使者鄭夢周來聘到筑紫遇今川了俊而歸國、〔京都將軍家譜〕に應永三年今川了俊歸自九州四年少貳菊池千葉大村在筑紫挾野心命大内義弘平之、〔續本朝通鑑百七十六巻〕に澁川家譜曰應永三年澁川滿頼始爲鎮西探題、　今津ノ家士〔津川氏所藏文書〕に九州ノ事不與力敬訴事罷屬探題ノ手可致忠節之由所被仰下也仍執達如件應永四年四月廿日沙彌書判

今川了俊

○室町時代　澁川滿頼

澁川滿直

三池中務少輔殿、同十二年八月剃髮號ニ道鎮一讓ニ探題於其子義俊一、同二十二年父子共辭レ職入洛、正長元年澁川滿直爲ニ鎮西探題一、永享六年正月與ニ少貳一戰ニ于肥前神崎一而死其子敎直以ニ同年五月二十二日一繼ニ探題職一、〔海東諸國記〕に小二殿居ニ宰府一或稱ニ大都督府一西北去ニ博多一三里民居二千二百餘戸正兵五百餘源氏世主レ之稱ニ筑豐肥三州總太守一、太宰府都督司馬少卿號ニ小二殿一至ニ源嘉賴一今天皇嘉吉元年辛酉大臣赤松作レ亂、〔古本九州軍記二卷〕に嘉吉元年赤松性具亂を起せし時、少貳嘉賴も赤松に隨ふ云云とあり、國王徵ニ兵諸州一小二殿不レ至國王命ニ大內殿一討レ之嘉賴兵敗奔ニ肥前州平戸源義所一居尋投ニ對馬島一居ニ美女浦一對馬島亦其所レ管大內殿遂盡有ニ少貳所管筑前州博多宰府等地一後嘉賴欲レ復ニ舊地一擧レ兵而往至ニ上松浦一大內殿迎擊敗レ之嘉賴奔還ニ對馬一嘉賴死子敎賴嗣、丁亥年敎賴又以ニ對馬島兵一往至ニ博多宰府之間見月之地一爲ニ大友殿及大內代官一〔九州軍記〕に大內ノ月代新井彌四郎廣貞とあり、可申所レ敗而死對馬島代官宗盛直等亦從敗沒己丑年文明元年を云ふなり國王以ニ大內黨一山名一命ニ山名復ニ舊土一又命ニ諸州一助レ之、秋七月對島島主宗ノ貞國擧兵奉ニ敎賴一〔後太平記廿六卷〕に筑後少貳敎賴男子筑前次郎政資蜂起する事見えたり、之子賴忠一〔古本九州軍記二卷〕に筑前太郎賴忠とあるは後太平記に政資とあるを同人のやうに聞えてまぎらはし、なほよく考ふべし、而往沿路諸會護送助レ之遂至ニ宰府一悉復ニ舊境一賴忠既至ニ宰府一令ニ貞國一守ニ博多一貞國身留ニ愁未要時一少貳殿所管在ニ博多西南半里一民居三百餘戸、遣ニ麾下一守ニ博多一肥前州千葉與ニ其弟一有レ隙小二右ニ其弟一命ニ貞國一往攻レ之貞國難レ之小二强遣レ之値ニ大雪一敗還ニ對馬島一兵千人凍

大友親世

嶽多ニ死者一、長門筑前一岐之境海賊縱橫、今辛卯年春我宣慰官養民等往慰ニ賴忠一貞國至ニ對馬島一貞國聞レ之托以ニ海賊梗一路宣慰官不レ能レ來我當ニ往迎一遂留レ兵守ニ博多愁未要時一不レ告賴忠身還ニ對馬一賴忠前在ニ對馬島一約歲遣ニ一二舡一今還ニ本土一其使人依ニ臣會使例一館待、辛卯は文明三年にして韓政將軍の時なり、〔澁川家譜〕に敎直云云文明十一年卒長子政實早世次男萬壽丸繼レ職、長享元年十二月於ニ岩門龜尾城一爲ニ家臣足助森戸齋藤一被レ害尹繁者其弟也明應九年八月十二日補ニ探題職一、此後子孫衰微、〔續本朝通鑑百五十五卷〕に大友家記曰氏時親世二代與ニ菊池一戰爭累年菊池勢强大友屢敗云云菊池戰死親世乘レ機略ニ肥後國一九州二島畏ニ其威風一悉屬ニ麾下一勅以ニ親世一爲ニ九州探題職一子孫相續任レ職云云、〔同書百七十六卷〕に明應四年政弘應仁文明之間陣ニ洛中一顯ニ武勇一歸國之後領ニ周防長門豐前筑前一如レ故〔留山文書〕に自ニ明應七年十一月一至ニ同八年十一月一、年八月九日兵部王沙彌、岡部彥左衛門殿、〔京都將軍家譜〕に弘治二年筑紫邊民侵ニ大明一地、天文弘治の比は筑前國中に城主多くして合戰絕る事なし、宗像四郎氏貞は宗像郡鳥嶽の城にあり、占部右馬助尙安は同郡許斐の城にあり、麻生隆實は御牧郡花尾の城にあり、麻生鎭里は同郡上津俣の城にあり、麻生上總介元重は同郡山鹿の城にあり、杉權頭連は鞍手郡龍岳の城にあり、毛利鎭實は同郡鷹取の城にあり、秋月長門守文種は嘉穗郡古所城にあり、筑紫上野介惟門は御笠郡天山の城にあり、村山近江守は同郡□城にあり、上野伊賀守は同郡杉塚村和久堂城にあり、櫛原兵庫助は同郡牛頸村不動城にあり、立花俱馬守鑑戒在ニ糟屋郡立花の城一奴留湯融泉は同郡白山の城にあり、大蛇彈正は那珂郡鷲岳城にあり、小田部民部少輔曲淵河內守は早良郡荒平の城にあり、原田彈正少弼種門は怡土郡高祖の城にあり、白仟進士兵衛は志摩郡柑子岳の城にあり、小金丸民部太輔は同郡□城にあり、其外諸將自立して要害による、委しくは〔古

諸鄉士

○秀吉西征

黑田氏入筑前

本九州軍記に見えたり、〔仙巣稿下卷〕如水居士の碑文に天正十四年丙戌秀吉有欲合海西八九州之志使居士率中國勇兵三萬餘騎征海西冬十月到豐前陷小倉津宇留津兩城死于鋒鏑之下者二千餘人也秀吉感之以書然後攻障子岳城圍香春岳城城主高橋降矣餘勇所及筑前筑後肥前肥後皆竪降旗臣降矣、十五年丁亥秀吉自征薩摩分軍南北北軍路歷肥後南軍路過日向居士在南軍於日向耳河與薩兵合鋒薩兵取敗不幾而薩劣太守島津降矣秀吉嘆曰今度海西八九州歸吾一握者是出自居士方寸賞其忠以豐前國（此時筑前國を毛利元就男中納言隆景に給ふ隆景は是を嫡子秀秋に讓る、云云）慶長五年九月十五日內府家康上京於濃州一戰擒三成諸國復舊長政以有軍忠改豐前任筑前於是築城號福岡可謂有惟父有惟子冬十一月居士携義統入京內府先問以九州戰鬪次第居士逐一答之內府不堪歡抃謂曰必奏朝轉位居士跪曰我已老矣富貴非願不如歸去生煙霞病疾發泉石膏肓陪僧話於幽竹之院內府家康颯茶烟於落花之風誦唐詩詠倭歌逍遙自適是亦歸後之賜也歸此言曰處今行古者除居士外又誰乎云云、七年壬寅退休筑前蓋以長政爲其大守也云云、九年甲辰春三月居士臥病向長政遺訓曰死期必在念日辰刻我沒後請愛士撫民舉直措狂慈孤弱憐貧賤親賢疎佞則何追福加焉哉臨期詠一首和歌其聲未絕端然逝矣壽五十又九也太守如法葬送用心皆不違居士遺訓

○江戸時代

大樣

主稅

驛馬

主計

可謂孝矣、承聞太守侍居士病床憂勞不交睫不解衣湯藥非太守口所嘗弗進勝夫曾參以布衣猶難之今太守親以長者修之過曾參孝遠矣、〔武鑑〕に松平筑前守（大廣間從四位少將參府御暇之節上使御老中）五十二萬石余、居城筑前早良郡福岡、當國名島金吾中納言秀秋居、慶長五黑田筑前守長政福岡城築代々領之、松平右衛門佐忠之代外五萬石弟甲斐守長興配分云云など見えたり、（中納言隆景は木下肥後守の子秀秋を養子として國を讓て自備後國三原の城に遷り、ここに退居せらる、秀秋は關ヶ原の軍功によりて移封て備前國岡山の城にうつらる、ほどなく病死せられて跡たえぬ、）次に國大樣事は〔延喜十卷神名式〕に筑前國十九座、大十六座、小三座、〔同廿二卷民部式〕に筑前國上、怡土志摩早良那珂鎧田糟屋宗像遠賀鞍手嘉摩穗波夜須下座上座御笠〔同廿六卷主稅式〕（卷末參照）に筑前國正稅公廨各二十万束、國分寺料三万二千二百九十三束修理觀世音寺料二万一千四百束、（四百數有增減下皆同之）修理府官舍料六千束池溝料三万束救急料八万束俘囚料五万七千三百七十束（すべて七十八万九千六十三束なり、〔和名抄〕に本額七十九万六十三束とありて一万束のたがひあり、）〔同二十八卷兵部式〕に（諸國驛傳馬件）筑前國獨見・夜久各十五疋島門二十三疋津日二十二疋席打・夷守・美野各十五疋久爾十疋佐尉・深江・比菩・額田・石瀨・長丘・把伎・廣瀨・隈崎・伏見・綱別各五疋、〔同廿四卷主計式〕に筑前國去府行程一日、（一百九十五日）調絲三十九約貲布三十五端綿紬五疋席三百六十三枚大甕九口小甕白九十五口麻笥盤五十六口水椀三百二十口海石榴油一斛四斗六升四合御取鰒二百六十斤羽割鰒六斤葛貫鰒百八斤蔭鰒一百三十五斤鞭鰒二十四斤腐耳鰒一百八十二斤醬鮒一百二十八斤鮨

郡郷

鮒二百八十斤（一）海藻三百六十八斤二兩自餘輸（ノ）絹布鍬鐵短鰒海鰒鮨鰒火燒鰒鹽庸
熬海鼠百二十八斤（八）鹽三石九斗七升五合自餘輸（ノ）綿布鐵米鹽海鰒火燒鰒雜魚腊中
男作物（ハ）木綿穀皮麻席防壁蒲薦韓薦苦簀、〔和名抄五卷〕に西海郡第六十七筑前國
太宰府並國府在二御笠郡一 管十五、田万八千五百餘町、正公名二万束、本穎七十九万六十三束、雜穎三十九万六十三束、怡土以止志摩・早良佐波良 那珂東西 席田
傘志呂多 糟屋加須也 遠賀・鞍手・嘉麻加万 穂波・夜須東西 下座下郡安佐久良 上座准御笠奚加佐 〔圖書編五十卷〕
日本國筑前件（ノ）に右勢（ヨシイ）・加菩里（カブリ）・加打奴馬（カヤマ）・多賣里（タマリ）・一萬字（ヘカタ）・奴打（ナタ）・世加（キヤドマリ）・經字里（ヘカタ）・多罷（ミナト）・密那多（ハカタ）・法哈（ハカタ）・
又右勢・加薩里・加也馬・多哩里・一撥字・那打・十里松・各發・哈逢・博多・白沙塗・世加・
經家里・多罷・那多・ともあり、上に密ノ字を落せりときこゆ 〔海東諸國記〕に筑前州
郡十五、水田一萬八千三百二十八町、〔拾芥抄〕に筑前國田數一万九千七百六十三町、
〔山王神道〕に筑前國十五郡田數一万九千七百六十町、〔天文十二年ノ舊記〕に筑前國三
十三萬五千六百九十石、〔小早川秀秋時ノ舊記〕筑前國田畠町數二万九千六百六十九
三町餘、田畠高三十万八千四百六十一石餘、〔元祿記〕に筑前國高六十万六千九百八十一石四
四百十二石八斗一升九合嶋岡領、此内五万石直方領也、高五万石秋月領、斗二升村數三千三百六十六村内高五十二万九千
十四石八斗二升六合怡土郡 唐津領、二万四千八十三石七斗七升五合怡土郡公領、〔本朝鍛冶考八卷〕
田數

鍛冶

に筑前國鍛冶系圖、西蓮後堀河御宇貞應頃談議所國吉ト號ス 左後伏見御宇正安歴應間實阿カ子或外孫トモ云相模國正宗門人ニテ年長也 安吉後醍醐御宇元德歴應左ノ子左衛門三郎ト號ス 國弘光後 余歳或二代同名實阿是ト長銘 入西西蓮後深草御代康元西蓮ノ子七十
ハ二代トモ云、殿御宇ノ文和左ノ舘、或吉弘ノ子トモ云、安弘稱光御宇應永國弘ノ子、行實光明御宇貞治行貞ノ子同名 貞弘後小松御宇嘉慶
弘安ノ子或安吉門人應永中トモ云、貞國稱光御宇應永國弘ノ子、行實和左ノ門人 正平七年ノ作有リ、
永德國弘ノ子トモ云、資貞後四融ノ御宇康歴左ノ門人 定行後光嚴院御宇貞治左ノ門人或文和中トモ云 弘行光明御宇

貞和左ノ門人、國房同御宇左ノ門人平戸左衛門佐或正中ノ作有トモ云、行弘後光嚴御宇文和弘行ノ子
行同御宇同弟或應永同名有リトモ云、貞房同御宇同弟、貞秀光明御宇貞和左ノ弟、延
定行ノ子トモ云、文貞秀ノ子、治吉後光嚴御宇觀應ヨリ應安ノ間或吉貞ノ子
宇延文安吉門人筑州住吉弘ト銘ス、貞吉景光御宇觀應ヨリ應安ノ間或吉貞ノ子彫物ノ上手、吉弘後光嚴御
ス或正中トモ云、按スルニ不レ審 貞吉後四融ノ御宇永和康歴貞吉ノ子或康永中鎚五分小肉片山形
貞秀子、貞治中トモ云、平戸ノ住トモ云、宗吉光明御宇貞和行弘子或門人トモ云 時行延文貞治ヨリ至德貞行ノ子同名三代或貞行ノ父トモ云 貞行
後光嚴御宇延文宗吉子、吉貞後小松御宇永德系圖未考、行鬼延元中安弘門人或行吉門人ト
或時行子康歴中トモ云、サックワ安門人同名三代或貞行ノ父トモ云
和系圖未詳、敎光後小松御宇嘉慶大石ノ住 良西後堀川御宇寛喜西蓮父或高綱門人ト
ヒ法師、歳阿後醍醐御宇元德、國弘ノ門人ニテ 入西西蓮弟ニテ左ノ實父トモ云、或
住法師也トモ云、年ハ師ヨリ長ズ、或康安存生ス 按ニ世々伊ナルベシ、永仁中トモ云或瓦西ノ子安藝國
或建歴中ト 生玉時代系圖未詳三笠郡宰府村 吉次後四融御宇永和ヨリ明德ノ間吉貞ノ子
云不審也、清眞後小松御宇明德或弘安二王 內山ト云處ニテ造ルト云、
當國ニ住ストモ云、高綱後鳥羽御宇元歴文治本國
備前或瓦西門人トモ云、敎永或敎永ノ子大石ノ住
生佛時代系圖未レ考、或陸奥住人後當國ニ住ス 按ニ敎ハ敎ノ略歟、
國光光明御宇延元國房ノ子相州貞宗ノ風、〔金剛兵衛系圖〕に高綱龜山御宇文
情有リ上手按藝州住人ナルベシ 永入西妹聟
金剛兵衛盛國後宇多御宇弘安高綱ノ子西蓮ノ孫後伏見御宇正安作有リ或金王トモ號ス、盛高後醍醐御宇元亨正中盛高ノ二男一本
高ノ祖父、盛國見御宇正安作有リ或金王トモ號ス、盛高後醍醐御宇元亨盛高ノ子或父
ハ相州正宗門人トモ云又永 盛綱後醍醐御宇元亨正中盛高ノ子
或盛高子トモ云、正二同名有リトモ云、 高綱初代ノ次男多ノ住トアリ別人カ
吉同御宇盛綱ノ子、盛秀後光嚴御宇貞治吉盛子 盛康後光嚴御宇貞治吉盛子 盛方後小松御宇至德盛康子、盛清光明御宇康永盛綱ノ子、盛
盛元稱光御宇應永盛重子、盛昌光明御宇貞和盛綱ノ子、盛次後光嚴御宇延文盛昌ノ子、盛實後小松御宇至德盛秀二男
後光嚴御宇延文國光ノ子左ノ一門、貞盛同レ上或北朝ノ貞治三年或正平二十年二月日筑州冷泉盛ト銘ス、國忠時代系圖未詳、家永後花園御宇天治長承筑後
國三池同人或後花園御宇嘉元陸奥貞盛ト銘ス、利延崇德御宇長暦、
御宇嘉吉同名有リ、寶壽後二條御宇嘉元出羽ノ末流當國ノ住、盛廣諸書當ニ記ス平戸ノ住トスルハ然ラズ肥前ナルベシ、左國房ノ一類ナラン、長圓延源義經薄

土產　絲ノ太刀ヲ作ル喪後大和筑後皆同人　國永鳥羽御宇保安傳來系圖未考、　寶次文德御宇仁壽當國內山ニテ髮切膝丸ヲ作ルト云滿仲朝臣百四十年前ナリ、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國土產唐織自二神多一織二出之一　綿酒博多所レ釀白酒也　釜遠賀郡芦屋里所二出之一　松露曹鮑、宗像郡鐘崎出二稱二蒲屋釜一、鯖

方位　鰷玉島川之名物、野雁など見えたり、方位は東は豐前を限り南は豐後筑後肥前を限り西北はすべて海を限とす、東西二十二三里にして南北十二三里あり、薪水魚鹽の便よろしき國なり、〔宋史四百九十一卷〕日本國ノ件ニ西海道有二筑前筑後豐前豐後肥前肥後日向大隅薩摩凡九州共統二九十三郡一〔海東諸國記〕に筑前州在レ距二海濱二三里上山項ニ有二火井一日正照烟漂天水沸雨溢凝而爲二硫黃一島皆同とあり、是は豐後か肥後か肥前かなきしひがめてかくはかけるなるべし、筑前に火井と云つへき物昔も今もあることなし、さて〔若狹草十九卷〕日本考に山口之西爲二長門一關渡在レ焉渡レ此而西爲二豐前一其南爲二豐前一而後一又其南爲二日向一豐前之西北爲二筑前一西南爲レ後筑後之南爲二大隅一大隅之西爲二薩摩一云云、薩摩之北爲二肥後一又其北爲二肥前一肥前ノ西縣海爲二平戸一平戸之西爲二五島一云云利二入寇一故防レ海者以二三四五月一爲二大汛一九十月爲二小汛一其入寇多々薩摩肥後長門三州ノ人次則大隅筑前筑後博多日向豐前豐後和（肥カ）前ノ諸島俗喜盜輕レ生好レ殺每レ戰必單列殺步爲二劫蝶陣一前二一人揮二白扇一爲二進止一水弓竹矢以骨爲レ旗刀極ヶ剛利也中國モ不及也、男子ハ蝟頭斷レ髮鬚レ面文レ身、婦人披髮跣レ足間用レ麻土氣溫煖宜二禾稻麥麻一產二金銀琥珀水晶硫黃水銀銅錢白珠青玉蘇木胡椒細細花布漆器扇刀劍鎧甲一なども見えたり、かくて此國ノ中にして三代實錄に見えたる天豆留神次に馬野神其後の社にしては荒戸山東照權現櫻井村ノ社秋月八幡社などの事は太宰管內志別記一ノ卷に擧れば今郡を分ちて是を出さず。

（三十五頁九行目編世書寄料ノ下二頁書一万葉文藻寄料二千五百萬國卒料ノ二十一字ヲ脫セリ）

筑前之二（國志之二）終

筑前之三

○怡土郡

名義　〔延喜式〕に筑前國怡土郡あり、〔和名抄〕に筑前國怡土（以止とあり、〔風土記〕に逸都、また〔書紀〕に伊觀、又からぶみに伊都又緣などもあり、）名ノ義は〔仲哀天皇紀〕に八年正月幸二筑紫一時筑紫ノ伊觀ノ縣主ノ祖五

伊都國

五十迹手　十迹手問二天皇之行一　拔二取五百枝賢木一立二于船之舳艫一　上枝掛二八尺瓊一　中枝掛二白銅鏡一　下枝掛二十握劍一　參二迎于穴門引島一而獻レ之、因以奏言臣敢所二以獻一是物一者天皇如二八尺瓊之勾一以曲妙御レ宇且如二白銅鏡一以分明一看二行山川海原一乃提二是十握劍一平二天下一矣、天皇即美二五十迹手一曰二伊蘇志一　故時人號二五十迹手本土一曰二伊蘇國一今謂二伊觀一者訛也、〔風土記〕に怡土郡昔者穴戸豐浦宮御宇足仲彥天皇將レ討二球磨贈一於二幸筑紫一之時怡土縣主等祖五十跡手聞二天皇幸一拔二取五百枝賢木一立二于船舳艫一上枝掛二八尺瓊一中枝掛二白銅鏡一下枝掛二十握劍一參二迎穴門引島一獻レ之天皇勅問阿誰人五十迹手奏曰高麗國意呂山自レ天降日掉之苗裔五十跡手是也天皇於レ是譽二五十跡手一曰二恪手一五十跡手之本土可レ謂二恪勤國一今謂二怡土郡一訛也、〔姓氏錄〕大和國諸蕃に絲井ノ造伊豫志ノ臣同祖新羅ノ天ノ日槍之後也とあり、〔和名抄〕に但馬國養父郡糸井ハ伊土井といふもあり、〔魏志〕倭人傳に云云渡二一海一千餘里至二末盧國一、東南陸行五百里到二伊都國一云云世有レ王皆統二屬女

怡土城
怡土

王國」（鈴屋ノ翁ノ既に世有レ王とは〔仲哀天皇紀〕に見えたる伊覩縣主なるべし、）〔唐書〕日本傳に伊覩國官曰ニ爾支一副曰ニ汝謨觚柄渠柄觚一有ニ千餘戸一世有レ王皆統ニ屬女王國一郡使往來常所レ駐、〔續紀十九卷〕に天平勝寶八年六月甲辰始築ニ怡土城一、〔廿九卷〕に神護景雲二年二月癸卯筑前國怡土城成、〔檜垣家集〕に怡土郡に物いひし府官の心替りて妻設けて其處に耳著て最邂逅に音づるゝに只ならむやは同樣の人の見ゆるに何地ぞと問へば怡土へぞ罷ると戯るゝに此道を怡土志摩郡とぞ云ふかし

怡土志摩を掛て飛ぶとぞまてや雁尾にも羽にも言傳せむ

〔朝野群載廿卷〕寛仁三年三月刀伊ノ國ノ賊船襲來たる事を太宰府より言上する時の解文（虫喰）に云云　同日襲ニ來筑前國怡土郡一經虫喰人物燒ニ民宅一其賊之船長十二箇尋或八九尋一船之檝三十四十許所乗五六十人云云〔小右記〕寛仁三年ノ件に筑前國怡土郡住人文室忠光云云、〔東鑑十卷〕に文治六年三月九日癸亥法金剛院領怡土庄事可レ令レ去ニ進地頭職一給上之由度々被レ下ニ院宣一畢而奥州征伐之後可ニ隨仰一之趣先日被レ獻ニ御請文一之間義經泰衡滅亡畢然而猶能盛法師難ニ知行一歟之由有ニ御沙汰一被レ下ニ院宣一今日到來云云　法金剛院領怡土庄地頭事子細度々被仰畢而去々年仰遣之處奥州事切之後可レ隨ニ重仰一之由令レ申給畢於レ今者不レ及ニ異儀一事歟加之彼院領異ニ他之上能盛法師相傳所帶不ニ知行一之條殊令ニ歎申一非レ無ニ其謂一不レ便ニ聞食一者也不レ云ニ是非一令レ止ニ地頭一給者可レ宜事歟

怡土莊

〔怡土庄〕
○鎌倉時代

依レ爲ニ難レ去事一重所ニ仰遣一也於ニ委旨一者被レ仰ニ含廣元一早可レ令レ存ニ知其旨一給上者院宣如レ此仍執啓如レ件三月一日權中納言藤、謹上源二位殿、（こゝに怡土ノ庄とあるは怡土志摩二郡にわたる名か、原田氏高祖在城の後に書る文書は多く二郡に渡れり、）〔筑前軍記略〕に筑前守大藏種直値レ救自ニ鎌倉一入ニ于筑前國一云云頼ニ怡土郡高祖神社ノ神官上原兵庫兵庫則以ニ種直四男早良四郎大夫種成一爲レ婿領ニ早良郡一居ニ重留村一乘ニ其勢一押ニ領近邊一漸振ニ武威於國中（已上原田記）其子孫長居ニ高祖城一〔鎮西要略二卷〕に建久元年原田種益種遠等所優恕裂賜本領原田相築高祖城矣、〔源平盛衰記四十六卷〕に文治三年十一月一日肥後國住人原田大夫高直被レ切けり、是は此三ヶ年の間平家につき度々合戰に勳功ありしかども云云とあるはまぎらはし、種直とは別かよく〳〵考ふべし、〔三十二卷〕に菊地次郎高直とある是か、怡土郡波呂村に種直再筑前に入て後小松重盛の爲に造れる寺あり、天台宗にして極樂寺といふ重盛ノ位牌あり、開山を徹隆といふ、其後原田了榮再興して禪宗となし號を龍國寺と改む、此地に種直の墓もあり、（筑前軍記略）

〔高直〕

原田氏

弘安四年蒙古襲來之時種直八代之後胤原田五郎種之於ニ博多合戰一有ニ軍功一鎌倉將軍惟康親王給ニ褒美之御敎書一其後元弘建武之亂屬ニ將軍方一抽ニ忠節一預ニ軍功之賞一遂伐ニ取近邊一成ニ大家一、〔先哲ノ說〕に遠國に居たりし國士なれば世にしらるゝ事なく〔太平記〕等の記錄にも記さず、此類諸國に多し、原田孫次郎種遠建武年中雷山に狩せし事を公家雜訴決斷處より筑前守護所に當て賢否糺明の牒狀雷山にあり、又歷應二年原田種貞博多津警固番を勤仕せしめ其趣奉行所に言上の狀あり、〔常足按〕ずるに原田系圖に一代大藏春實孫四郎種政十三代種次十四代種頼此時高祖ノ城を築く十五代種資六代種納七代種成八代種雄九代種直十代種榮十一代種秀二十二代種政十三代種次十四代種頼此時高祖ノ城を築く十五代種資六代種納七代種成八代種雄九代種直十代種榮十一代種秀二十二代種時二十一代種貞廿二代種賢廿三代種□廿四代種宗尊氏に屬して多々良浦ノ合戰に軍功ありて後に筑後に至て原ノ家に代種三十代隆種云云とありて、種貞ノ兄種宗尊氏に屬して多々良浦ノ合戰に軍功ありて後に筑後に至て原ノ家をつぐよし見えたり、されば大家と成りしは種貞の時なるべし、〔雷山古文書〕に筑前國怡土郡庄内武田中三ケ村水田八十町押領地停止事雷山寺領所右去文治三年六月七日給ニ于如寺一怡土ノ庄一郡案堵御下文上者停ニ止板□五郎押領一如レ元雷山可レ令ニ寺務一之狀依ニ錄倉殿仰一下知如件安貞二年六月二日武藏守平朝臣判相模守平朝臣判〔同文書〕に筑前國怡土庄友永半分（除ニ山浦式部房重榮給分定一）事爲ニ怡土庄一正應二三

〔原田氏〕

○戰國時代　糸島踏鄕士衛突

原田隆種

四年貢未進代所ヶ引ニ波留山一也任ニ代官道蓮隆惠等今日ノ狀ニ可ヶ被ニ知行一之狀如件嘉歷二年十月六日沙彌判、雷山衆徒御中、（同文書）に雜訴決斷所牒、筑前國守護所當國雷山千如寺衆徒等中原田孫次郎種遠押ニ領當寺ノ山野以下一致ニ狩獵一由ノ事、解狀（具書）牒ニ乞ニ糺明一來十二月廿日以前宜召ニ進論人種遠一之狀□□件故牒建武二年閏十月廿九日前筑後守藤原朝臣明法博士兼左衛門少尉左京大進中原朝臣判、右中辨藤原朝臣（同文書）に筑前國怡土庄名主庄官等事今度雖レ有ニ違犯之輩一以ニ別儀一可ヶ被ニ免許一之由所ヶ被ニ仰出一也可ヶ相ニ觸此旨庄內一也、一庄內住宅名主庄官等名家委細ニ相尋且令ヶ注ニ進之一且可ヶ參ニ上一之由同所被ニ仰出一也、一庄家土民百姓等恐動亂有ニ其聞一逐電可ニ參本宅還住一之山同可ニ相觸一之狀如件、建武三年三月十一日沙彌可昌奉島方改所、義敎義政兩將軍之時天下大亂原田並其一族秋月・波多江・原・江上・三原・高橋等皆屬ニ大內家一、至ニ應仁之亂一於ニ洛中合戰一有ニ軍功一永正年中於ニ洛北船岡合戰一原田隱岐守興種波多江中務少輔種廣追ニ退大軍一討ニ果細川政賢一足利義稙卿再任ニ征夷大將軍一給事全依ニ二人之武功一因レ之將軍下ニ賜感狀一加ニ賜所領一興種一男稱ニ原田五郎一大內義隆授ニ隆之一字一號ニ五郎隆種一任ニ越前守一後剃髮號ニ劉雲軒了榮一有ニ武勇之譽一振ニ威於近郡一、先レ是大友義鎭之一族臼杵新助鎭慶居ニ于志摩郡柑子岳城一稱ニ志摩郡之旗頭一元岡・古庄・由比・泊・小金丸等之郡士皆從ニ臼杵下知一、爰弘治改元之比興種於ニ羈旅之中一頓死家累及ニ分散一隆種廻レ計再興レ家、大友宗麟欲ヶ押ニ領隆種之所帶一聞レ之隆種舍レ恨且賴ニ毛利元就一敵ニ大友一隆種有ニ武德一而賞罰嚴重也因レ之士卒心服家門繁昌而振ニ威於近國一、宗像郡（非原家ノ文書）に去四月十六日筑前國怡土郡高祖里城切崩之時致ニ矢疵（左脚）（左肩）又次郎致ニ矢疵（右耳）之由降兼注進畢尤神妙淵可レ抽ニ戰功一之由如件天文廿二年七月廿七日判井原隆岐守殿（筑前平記畧）隆種有ニ二子一、惣ニ原田五郎種門同三郎繁種一依ニ隆種家臣大原備後守廣世之諫言一父子之間不睦也於是二子欲ヶ赴ニ勳後大友家一至ニ先志摩郡岐志ノ地隆種聞レ之指ニ向討手一二子不ヶ得レ息櫛ニ籠在家一防ニ討手一繁種爲ニ強弓精兵一之間射ニ倒數人於ニ金福寺ノ前一追ニ拂寄手一自殺種門二十二歲繁種十六歲于時弘治三年八月七日也其後隆種聞ニ二子無ヶ罪之由一悔レ之於ニ其處一建ニ寺弔ニ二子之菩提一（眞言宗金福寺）兄弟の墓は新町村の內にあり墓は一つ也前に社あり兩所櫛現と號す彼寺は絕て其跡に今の南林寺をたて給へり是も同宗也、南林寺は初め上座郡宮野村に在しを移し給へりしなり、（隱德太平記一卷）に明應六年四月少貳政資大內義興の平勢に攻立られ高祖城に逃入る其子高經は木山の城に入る大內勢又追て兩城を落す政資高祖を落て肥前小城ノ城主千葉資胤を賴む云云とあり、義植將軍ノ時の事也　永祿十年之比肥前國住人龍造寺隆信欲ヶ伐ニ取怡土郡一遣ニ大田賀江八重犬塚等一以ニ三千餘人一越ニ無津呂山一令ヶ働ニ于怡土郡御悅一隆種聞レ之以ニ國士有田因幡守家人大原・中島・鬼木等一令ヶ押ニ柑子岳之臼杵一其身率ニ二千餘人一出ニ張于曾根原一對陣及ニ兩日一之處肥前勢遂引退、九月十日引ニ率八百餘人一發ニ向于長石一攻ニ大友家臣西左近鎭兼之居城一鎭兼落城上ニ一貫山嶺一隆種追攻レ之鎭兼又逃籠ニ于雷山旗振嶺一原田家人彌追レ之鎭兼伐ニ拂追來敵數十人一而自殺家人四十餘人或自害或落失殘者十餘人被レ虜於ニ深江・吉井等一者不レ及ニ異儀一、同十一年七月因ニ大友宗麟之下知一臼杵鎭慶欲レ亡ニ原田了榮一與ニ志摩郡士泊中務少輔源盛家・同又太郎統家・由良重留六郎次郎・同大學助・元岡衞門大夫藤原鎭宗・馬場越後守紀清貞・松隈將監源正行已下一合レ謀乞ニ加勢於立花立橋等一而押ニ寄于高祖之麓小金坂（戶次平藏三卷）に道雪高祖城を攻むる事見えたり、隆種聞レ之以ニ千人一分爲ニ二隊一一隊自ニ上原一下而巡ニ北濱一而斷ニ敵之後一一隊（隆種撰）選兵八百餘人逆下挾ニ討敵勢一臼杵忽敗北入ニ柑子岳城一於ニ原田方一討取首二百三十三掛ニ並于池田下河原一揚ニ凱歌一入ニ于高祖城一此時志摩郡中通之士不レ殘屬ニ原田之手一、元龜二年正月吉井左京與ニ肥前國岸岳城主草野

龍造寺隆信侵怡土郡

吉井左京　草野種吉

四郎種吉ニ爭ニ論領地之堺ニ度々將レ及ニ合戰ニ、草野四郎元原田了榮之三男也、爲ニ草野中務永久養子ニ繼レ家因レ茲了榮以ニ深江豐前守ニ雖レ勸ニ和睦ニ草野更不ニ承引ニ剩越ニ鹿家峠ニ燒ニ拂吉井深江兩人之城下ニ因レ爲ニ小勢ニ遣ニ使於小金丸・波多江等ニ乞ニ加勢ニ小金丸・波多江同十五日暮方與ニ由井重留等ニ出ニ張于吉井濱ニ之處草野方無レ利而引退因レ之吉井深江亦引ニ入于居城ニ、小金丸・波多江等聞ニ此由ニ待ニ夜明ニ欲ニ引退ニ先取ニ野陣ニ云云、寅刻許ニ草野勢押寄作レ鬨小金丸等押ニ出備ニ候ニ敵陣ニ只四五百人ニ在ニ一處ニ見レ爲ニ敵之小勢ニ小金丸・波多江等深入攻戰之處草野之伏兵六百餘人與ニ青木大村等之兵ニ一度起包ニ小金丸・波多江等之後ニ而責戰身方大狼狽而重留六郎・波多江上總介鎮種・同次郎・岩熊河內・吉田又五郎・德丸勘左衞門・鬼木次郎八等三十九人一時戰死スニ深江吉井等聞ニ鐵炮之音ニ一騎駈來盡レ力攻戰スニ草野大村已下於ニ二度之合戰ニ打負而指ニ草野ニ將ニ引入ニ之處追討而討ニ取首百許ニ切ニ掛鹿峠ニ而歸陣スニ、原田聞レ之欲レ鎭ニ雙方ニ自ニ高祖ニ打出此時兩陣已引退之由聞レ之滯ニ留于加布里城ニ、重留・波多江已下之士於ニ吉井濱ニ戰死之骸骨送ニ其所々ニ而將レ爲ニ草野吉井之和睦ニ、二月十一日依ニ大友宗麟之下知ニ安藤某來ニ于柑子岳城ニ與ニ新助ニ會議而勸ニ草野・吉井・深江等ニ令レ成ニ和睦ニ云云、高祖城主原田下野守信種（信種實は草野中務大輔鎭永が男なり、原田親種死後に了榮是を養て親種が子とす鎭永は了榮が三男なり信種は了榮が孫なり、）祖父彈正少弼入道了榮病死之後與ニ草野中務少

輔家久ニ談ニ諸事ニ云云、原田之一族家老等嫌ニ草野之指麾ニ欲レ討ニ亡之ニ此時肥前國松浦郡住畑三河守聞レ之忽侮ニ兩家ニ到ニ上松浦之堺ニ將レ押ニ領山川ニ已及ニ兩度ニ信種已下憤レ之云云、天正十二年三月爲ニ上巳之祝詞ニ畑三河守使者畑掃部助來ニ于高祖ニ饗應之後雙方及ニ爭論ニ草野聞レ之大怒欲レ攻ニ亡高祖ニ乞ニ助軍於大村ニ自率ニ三千餘人ニ著ニ陣于濱崎ニ分勢爲ニ二隊ニ以ニ一隊ニ令レ押ニ草野ニ尙以ニ二千餘之兵ニ取ニ陣於鹿家ニ下野守種信引ニ率二千餘人ニ四月十二日早旦出ニ陣于高祖ニ先著ニ于深江ニ先手之兵出ニ張于吉井濱ニ、十三日原田中務少輔・有田因幡守・富田大膳亮・笠・萩原・小金丸民部大輔等一千五百餘人與ニ畑之先手畑掃部助・池田・德末・有浦等一千餘人ニ合戰種信率ニ旗本勢一千五百人ニ自ニ山陰ニ巡ニ敵陣之後ニ而揚レ鬨畑勢一千餘人忽敗走只畑掃部助與ニ郎等廿四人ニ駈ニ入于敵陣ニ切ニ立多勢ニ此時笠大炊助與ニ其弟勘助・右井內膳・富田四郎兵衞・中岡左馬助・長盛物・西三郎左衞門・波多江丹後守・朱雀小次郎・上原與一兵衞・大田彌次郎・浦志孫右衞門・萩原長門守・吉留兵庫助等五十七騎ニ取ニ籠畑掃部助等ニ悉討ニ取之ニ因レ茲池田・德末已下敗軍之士崩ニ掛于本陣ニ爰ニ原田信種先陣後陣爲ニ一隊ニ都合三千餘人駈ニ掛于畑本陣ニ原田家臣深江豐前守良治從ニ五百餘人自ニ深江嶽城ニ打出乘レ船而自ニ海上ニ攻擊スニ吉井左京亮自ニ橘岳ニ橫合突掛見レ之畑勢大崩指レ北引退大將三河守只一人踏止而目ニ掛敵大將信種之馬印ニ欲ニ

○秀吉四征

引組指達一此時池田左馬允・大川野玄蕃允・岡九郎兵衛等勇士十六人引返留二三河守一遂指二肥前濱崎一引退高祖勢猶追レ之池田大川野岡已下十餘人引返戰死之間三河守遁二虎口一入二于唐津一信種所二討取一之首四百餘級掛二並于淵上一雙方死人七百餘手負不レ知レ數云云、天正十五年春爲二島津征伐一有二出陣一云云　秋月種實原田信種以レ爲二無二之薩摩方一出二張于豐前小倉一將レ押二上方勢一先爲レ候二上方之軍勢一信種遣二波多江丹後守種賢笠大炊助興長於長州赤馬關一兩見二秀吉公之軍勢一而知レ不レ可二敵對一而賴二宮部善祥坊・淺野彈正長政一啓二信種降參之由一秀吉公有二喜悅一被レ召二兩使於御前一問二此間九州合戰之樣一給且賜二御太刀一可レ加二薩摩之先手一之由被二仰付一兩使蹄二高祖一陳二其趣一之處信種不二承引一與二秋月父子一合レ謀偏立二敵之色一然處秋月恐二秀吉公之武威一降參信種不レ知レ之且侮二上方勢一於二大門河原一成二勢揃一分レ手固二所々之要害一遣二宮田大膳亮・上原新左衛門・大原伍渡守一相二添五百人一令レ備二長垂山一次遣二笠大炊助・中島治部左衛門・柴田伊賀守一相二添五百人一令レ備二汕坂口一次遣二鬼木又左衛門泊丹後萩原備中一相二添五百餘人一令レ備二日向嶺一云云小早川左衛門佐隆景率二多勢一押二寄于高祖城一隆景先手福原左近・兒玉隼人・井黑田孝高家人久野四兵衛・衣笠右兵衛等打二破汕坂砦一直到二高祖城下一、原田兵見レ之引二入于城中一久野四兵衛一番乘二付于城一（孝高今度九州征伐先手ノ軍奉行なりしか監使として隆景にそへらる故に四兵衛城責にくはゝる）於レ是原田勢自二本丸一上望二見東方一自二原村田島之前後一金竹・日向山三四里之間旗指物馬物具濟々充二滿于山野一城兵大恐立二降旗一秀吉公九州平治之後以二原田信種一爲二肥後國主佐々陸奥守成政之與力一而於二筑後國黑木兵庫頭家實先知之內賜二三百町於信種一とあり、（信種は後に肥後守清政の與力となり朝鮮征伐の時彼地にて討死せり、其子伊勢守宣種父の遺跡を繼て肥後守に仕ふ其後清政に疎ぜられ唐津に行て寺澤家の食客となりて二千石を領す、島原の逆徒蜂起の時兵庫頭興高の家人どもに天草に馳向ひしかに嘉種戰功あり寺澤家亡びて後會津領主保科肥後守に仕へて二千石を領す、其裔今も彼家にありとある物に見えたり、）さて郡ノ大樣ノ事は〔和名抄〕に怡土郡飽田多安久多託杜・大野乃於保長野奈加乃雲須久毛波留良人・石田伊之太海部已上八郷なり、〔名島中納言ノ時ノ舊記〕筑前國田畠高指田帳に怡土郡田數六百八拾九町貳段貳畝拾歩、分米八千百三拾六石三斗七升三合、畠數百五拾貳町壹段四畝九歩分、大豆六百八拾四石九斗五升九合、合田畠數八百四拾壹町三段六畝拾九歩、并米大豆八千八百貳拾壹石三斗三升七合（公領は此外なるべし、）〔元祿ノ舊記〕に筑前國怡土郡六十一村、高四萬三千六百七十四石一斗九升六合（福岡領一万六千百石、公領他領二万七千五百六十八石六斗一合）〔舊記〕に怡土郡ノ七大寺雷山千如寺（千坊）一貫山夷魏寺小藏山小藏寺（村）染井山靈鷲寺（四十二坊）鉢伏山金剛寺（眞言宗）久安寺（吉井村）楠田寺（東村）已上（皆眞言宗、〔舊記〕に筑前五所寶願寺（雷山千如寺一貫山ノ夷魏寺染井山ノ靈鷲寺高麗寺皆振山東門寺已上、）などあり、此郡東西六里餘南北二三里、東は早良郡を堺とし南は肥前國松浦郡に隣り西は海を限とし北は志摩郡にとなる、海近くして水災なく薪木魚鹽ともしからず、（郡內に原田家士の後裔と稱するもの多し、さて井原山村ノ北ノ方にめづらしき瀧あり一大石の中をほりうがてるが如くなる處をくだる急流なり二段になりて下るすべて八間許あるべし、其下段をあゆがへりといふ是より上に年魚も登る事あたはず、）

○大樣郡石高

七大寺

年魚返瀧

祭神
末社
祭祀
社領
照光寺
所在

○志登神社

〔延喜式〕に筑前國怡土郡一座小志登神社とあり、志登は斯等と訓ゝべし（此義いまだ考へず、）志登は地名なり、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國志登神社在二志摩郡志登村一（怡土郡一所祭之神一座豐玉姫相殿高祖明神・志賀大明神・神功皇后・高良明神、）〔和爾雅□卷〕に筑前國志登神社（在二志摩郡志登村一昔屬二怡土郡一、所祭之神一座豐玉姫相殿之神四座高祖明神・志賀大明神・神功皇后・高良明神、）〔筑前神社志〕に志登神社元祿三年御建立以後之御神□第一殿（神功皇后第二殿（高良大明神第三殿高祖大明神第四殿志登大明神、末社五宇伊勢大明神・筥崎八幡・天滿天神・田島不動・觀世音寺觀音、往古之末社井手天子・三角天子・眞須岐大明神・祇園八龍大明神・若宮大明神・橋本天子・辨財天・伽藍大明神・左右御前大明神・以上社也、〔社記略〕に志登神社九月七日有二祭禮一往者此日奉レ遷二神輿於閏村一宮司七人巫女八人神人樂人八人此外祀官多供奉元龜天正之比猶神田十二町存レ之其後領主小早川秀秋沒二收神田一末社頹廢其遺跡成二田畠一、神官之家悉斷絶而僅社僧一家存レ之眞言宗而號二照光寺一元祿三年國主光之朝臣之時神殿及末社鳥居等有二造營一神田三十石有二寄附一而神事聊復二古禮一などあり、御社は村の北ノ方にして田間の林中にありて西に向へり、（志登村は今志摩郡に屬けり、）宇都宮〔飯野氏文書〕に今津住人尼光阿重言上三雲入道法圓祗候伊勢次郎永經乍入流志土神宮寺田一町四段於質劵致押妨間就訴中相□訴陳處永經搆不實光阿號遣懇望狀於法圓許由令備進上者早仰法圓被尋下彼狀實否應速被經御沙汰欲蒙御成敗田地屋敷等事副進一通永經所進號光阿書狀案文右彼狀山事指雖非相論潤色永經責過無理之條爲令遁避御沙汰無跡形搆不實仰主人法圓可被召出之由望申候條自由所存太背正理畢雖然光阿自元如然之狀於不遣之上者被尋下候眞僞可露顯歟然早被經急速御沙汰蒙御成敗爲被行其身於重疊罪□重言上如件延慶四年五月日、（松本久陸云、志登社神殿は五尺間三間四方許なり小板葺なり中殿入一間拜殿入三間横二間瓦葺なり中西に向へり末社五宇觀音堂一宇あり石ノ鳥居あり銘に寶永四歲次丁亥夏五月三日建立從四位下侍從本州牧松平肥前守綱政とあり、）

○高磯比咩神社

〔三代實錄三十二卷〕に元慶元年九月廿五日授二筑前國正六位上高磯比咩神從五位下一とあり、高磯は多加之と訓ゝべし、御名ノ義は〔師說〕に多良志と同言にて息長帶姫命を祭れる社なればやがて御名のまゝに滿へたるなりとあり、さて〔宗像神社緣起〕（文安元年ノ副本）に云云第三度者乙巳年八月十六日辛酉夷類五万三千人發來造二亞羅津城一樓主住吉ノ親父高磯强石將軍放二鏑失一出二火術一船幷人民併射致燒害乎云云、第五度者甲子四月九日戊戌夷類十万人發二來於夷魔津一高磯强石將軍住吉合戰給天皆悉討害畢、（初ノ文に宗像ノ先祖强石將軍と見え、又住吉ノ親父高磯强石將軍などあるは聊おぼつかなけれども、高磯とあるはまた〳〵この高磯比咩神の御事と聞えたり、）〔高祖神社棟札〕に奉二造立大日本國筑前國怡土庄鎮守高祖山大菩薩御社壹宇一右志趣者爲二天長地久御願圓滿國土安穩殊者信心大檀那原田彈正少弼大藏朝臣興種家門繁

位階名號
高祖將軍
〔高磯〕
緣起

昌武運增長息災延命諸願成就皆令滿足也永正□年丁卯七月十日敬白大工藤原公吉引頭小工三十人奉再興大日本國鎮西筑前州怡土郡一宮詫祖大菩薩寶殿一宇云云

所在　願主宮長從五位下原田大藏朝臣彈正少弼隆種云云天文十辛丑年云云、奉再興大日本

祭神　國鎮西筑前州怡土郡一宮詫祖大菩薩寶殿一宇云云奉行宮別當上原和泉守種豐大工松林藤原正安小工廿八人引頭藤原重德元龜三年壬申十二月十八日宮司權大僧都法印永圓敬□殊者願主宮長從五位下原田彈正大弼大藏朝臣親種武運長久云云、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國高祖神社在二怡土郡高祖村一祭神一座彦火々出見尊相殿左資滿明神右神功皇后〔和爾雅□卷〕に筑前國高祖神社在二怡土郡高祖村一所祭之神一座彦火々出見尊相殿之神二座左資滿明神右神功皇后也〔筑陽記八卷〕に怡土郡高祖大明神當郡之宗廟也、祭禮九月廿六日、當社大明神者彦火々出見尊云云、神功皇后三韓征伐之時祈二此神一以二冥助一容易降二伏敵一歸朝之後經二營

創立　宮社一爲レ防二禦異敵一向レ乾建二立宮殿一也後世幷二祭玉依姫・神功皇后一神田若干云及二末世一滅滅矣天正七年原田隆種建二立社一云云、〔社記略〕に高祖神社云云至二寛

祭事　文二年一國主光之朝臣修二補宮殿一給、九月廿六日有二祭禮一往昔奉レ移二神輿於三雲村一云云今神官有二一家一上原氏也など見えたり、火々出見尊を祭る故に高祖と云よしいひ、又原田氏漢ノ高祖の末流にして其祖を祭る故に高祖といふとある説にいづれもひがごとなり、原田氏此處にうつりしは建久ノ比の事なり、〔筑陽記八卷〕に怡土郡高祖山ノ古城ハ往昔原田氏代々之居城也云云平家没二落西國一之時甚竭二忠節一爲二源氏ノ世一軈朝卿尊レ之預二平山ノ武者所季重一籠二居于鎌倉扇ヶ谷一已十三年迄久年勤二救免一雖レ叛二哲里一非二昔日之威勢一故當所之神職上原兵庫者有レ勢以親レ之四男種成爲二兵庫婿一以二其力一伐二取於近郷一漸擬二武威於國中一修二擬當城一子孫及二

高祖

數代一などあり、〔古本九州軍記〕〔原田系圖〕等に委しく見えたり、初件に擧ゲたる〔軍記略〕の説をも考ふべし、さて高祖は今寺にタカスと唱ふる事なり、さればシの方には彌近くソの方には遠し元ふりコウソと云事にはあらずされどもソは初より正しくソと唱へたるにてもあらむかと思はるゝ由もあり、そは託杜郷ノ件にいさゝかいふべし、

○雷神社

社職

〔雷山詔書〕に曰レ被レ停二筑前國怡土庄雜掌威儀師能除（検カ）非據寺務一事右内大臣宣奉勅筑前國雷山千如寺僧等解狀偏當山者水火雷電神之開山神功皇后宮之御願也是以僧衆以上首爲二院主一撰二器量一補二學頭一之處也所謂山領御坂村田薗等者爲二法持聖人開發千手觀音之佛性燈油料田一之間於寺家一圓進止自二往古一至二于今一寺務來之處能除以爲隣山號庄内致非分濫妨云云此條豈可レ然乎早任先規殊可レ有二其沙汰一之旨依宣行レ之符到奉行、建長七年三月十九日　參議　忠棟源大納言殿、〔宗像神社緣起〕文安元年ノ副本に宗像先祖強石將軍與二往吉大明神一云云異類乎征伐志量敵乎降伏玉事七度也云云第六度者戊申年八月十日丁卯夜類十萬人發二來夷土志寛爾郡南山（號二雷山一）山中城一堰二水城一先城中住吉ノ高祖父水火雷電神廻二水火之支度一招寄夷類一以水流害或雨二夫雨一燒殺乎、

緣起

また〔文書〕に注進雷山權現堂以下燒失ノ事一權現堂七間六尺間、東向奥三間正安三年六月二十日ノ夜子ノ刻云云　一拜殿十二間八尺間四向奥三間同前　一鐘樓前三間、正面五尺間、脇間四尺宛、奥三間五尺宛自二權現堂一南東向同前　一經藏前三間六尺間、奥二間六尺間、自二權現堂一北東向同前　右就二御教書一令二實檢一燒所之處衆徒所レ進注文無二相違一仍注進如件乾元二年九月十三日淨蓮（御家人）列增慶列、また筑前國雷山衆徒中遷宮事□□來月廿日可レ遂其□□□（御家人）早仰二近隣地頭□等一可レ被レ守二護社頭一也仍如レ件正和五年二月廿七日左近將監列太宰少貳殿、筑前國雷山衆徒等遷宮辻固ノ事去月廿七日御教書案如レ此如レ狀者廿日云々定而可レ爲二來月二日一之由所令申也任下被二仰下一之

旨上可レ被レ守ニ護社頭一候更不レ可レ有ニ緩怠之儀一仍執達如レ件正和五年三月十九日太宰少貳判福井地頭殿、　また筑前國雷山千如寺衆徒等申祈禱事

雷山文書

如ニ解狀副具書一者曰當山者水火雷電神開闢神功皇后御願法持聖賀開發以來代々進止地云云　然早任ニ先例一爲ニ一圓進止一至ニ未來際一可レ被ニ祈禱一之狀如レ件元弘三年九月十八日尊氏判書　雷山衆徒中、　また夫雷山謂ニ伽藍一則千手千眼之尊容謂ニ社壇一亦三十三身之化現也爰炎旱累レ旬而苦ニ農夫一祈禱因レ舊而課ニ衆徒一不レ圖雷雨忽降州土普潤誠是冥聰之奇妙也豈非ニ玄應之潛通一乎然間以一首之和歌爲ニ万代之支證一而已

雷山

世の末といかで思はむ鳴神の又あらたなる天ノ下かな

屠增岐岳

觀應貳年七月十三日左兵衛佐源朝臣直冬などあり、　雷山古證文二卷六十五通は中之坊金剛淸淨院にあり、なほその外にもありといふ奉寄進雷山雷神御寶前御太刀一腰國宗　神馬一疋印三葉柏　右所奉寄進之狀如レ件天文五年七月廿三日左京大夫從四位下兼行周防介多々良朝臣義隆敬白、爲ニ年頭之祝儀一卷數幷杉原十帖到來悅思食候彌勤行等可ニ相勵一事肝要候猶長束大藏大輔可レ申候也二月十八日朱印秀吉　筑前國雷山惣中、〔筑陽記八卷〕に怡土郡雷村雷山高山也本名屠增岐山、雷電神鎭坐故號ニ雷山一也有ニ上宮中宮下宮一　山嶺今謂ニ屠增岐岳一云云、神功皇后征ニ伐異國一之時一七日參ニ籠當山神社一奏ニ神樂一其時假面三今猶存在旱魃之時出レ之必大雨云、中宮自レ麓二十丁所レ祭水火雷電神瓊々杵尊命也云云號ニ神護石二間四方、〔搭志隨筆〕に雷

神護石祭神

面岳

山に神功皇后奉納の面あり太守惣衛公ある時登山して云云　强て是を出さしむ蓋をひらけば忽飛去る俄に雲暗く大風大雷山も崩るゝが如し大守〔はだしにて麓にに〕げ下給ふ此時に山汐出て田地多く損じたり雷神社の向ひなる數仞の岩角に此面かみつきてあり今にいたるまで人其下にいたれば即雨ふる、雷社の祭禮は十月廿一日なり其夜社に燈をともすにて、に十あれば面が岳にも十の火みゆ廿あれば廿の火みゆ其事年々にかはることなければ人あやしむ事なし又〔社記略〕に雷山中宮本社ニ水火雷電神相殿聖母宮・八幡宮・高祖宮・殿島大明神　垂仁天皇勅建ニ中宮一云云　祭日毎月十九日也、雷山四至東限ニ東谷岸一西限ニ旗振嶽一南限ニ祖曾岐一北限ニ立石一云云、小早川中納言隆景卿社領十石有ニ寄附一至ニ秀秋一被レ沒ニ收之一委しくは千如寺の件に云べし　寛文六年寄附永代雷山村內田高拾石五斗七升九合畠高七斗五升、仲之坊秀鏡に當る、　寶曆二年於ニ雷山村內高來寺村內一貳拾六石余有ニ寄附一仲之坊に當る、云云　とあり、上宮下宮社僧等事は次々件どもに云べし、

祭日

四至

社領

〔松本久陸云〕雷山本社より上宮まで十七丁あり本社は東向にして神殿は入一間半横一間ノ社小板葺なり、中殿入り一間余あり拜殿は入二間半横二間にして草葺なり下宮まで三丁余あり本社は女人の參詣を許さず、〔常足按〕ずるに雷神社を菊記に神功皇后紀に元年三月云云更祭ニ祝神祇一明欲ニ四征一爰定ニ神田一而佃レ之時引ニ儺河ノ水一欲レ潤ニ神田一掘及ニ于洪崖ノ岡一大磐裂レ之不レ得レ穿レ溝皇后召ニ武內宿禰一捧ニ鏡劒一令レ祈ニ祭神祇一而求レ通レ溝則當時雷電霹靂裂ニ其磐一令レ通レ水とある此時ノ事なるべし、聖賀上人に勅して祭給へる由を云說はひがことなり聖賀は佛法此國に渡來て後ノ人なるべければ神功皇后には由なしなほ後の件に云べし、

○曾祖岐社〔神功皇后紀〕に屠增岐野とあるとは則なりまがふべからず、

祭日
所在
祭神

〔雷山古文書〕に注進雷山千如寺中宮曾祖岐社造營用途注文事、一正殿壹仟伍佰貫文一拜殿伍佰貫文一樓門壹千貫文一廻廊前壹千貫文脇兩方壹千伍百貫文、後伍佰貫文、一若宮殿四所肆百貫文、一經藏伍佰貫文、一鐘樓伍佰貫文、一鳥居一百貫文、惣已上漆仟伍佰貫文、右注進大略如件、永仁六年正月日とあり、〔雷神社記略〕に雷神社上宮三社、中屠增岐大明神左右天神地神、祭日九月十五日也とあり、〔和漢三才圖會〕に筑前國雷社在怡土郡雷山一祭神一座瓊々杵尊、左高祖明神右神功皇后、右住吉明神、八幡大神、〔和爾雅〕に筑前國雷社在怡土郡雷山一所祭之神一座瓊々杵尊相殿之神四座云云、〔筑前神社志〕に雷山上宮瓊々杵尊なる由高祖神社緣起に見ゆ、雷山高處を屠增岐野と云其處に坐す故に屠增岐大明神と號す上宮より中宮に廿六七丁あり、上宮四社あり、

石祠

天神七代惣社一宇地神五代惣社一宇雷大權現社一宇沙渴羅龍王社一宇右四座共に石窟にあり、大日堂觀音堂阿彌陀堂あり、〔筑陽記八卷〕に雷山上宮在屠增岐嶽一自山下一凡一里半許自中宮二十七丁所祭屠增岐大明神雷電神也、里民稱絶頂於广所不登、天神七代惣社地神五代惣社娑渴羅龍王社社傳云娑喝羅龍王往古現老翁於此處一書寫法華經三部一納當嶺一匿一像守護之一云云因之於當山一祈雨有効驗一已上四社各石窟也、〔松本久隆云、雷山上宮瓊瓊杵尊を祭る、石祠三宇その内に中ノ一ッは四尺四方許にして廻りに石玉垣あり寶歷三年三月再興と記せり此方許二ッは三尺四方許二宇は天神地神を祭る、山上を面嶽と云神功皇后の石祠あり同所に金毘羅ノ石祠あり絶頂に龍王塔ありみつの墓なり天ノ宮と云傳へたりと云り、神領等の事は本社ノ件にいへり社僧ノ事は次の件にいふべし、〕

祭神
祭事
緣起

風穴
香合石

所在

○笠折大權現

〔雷山社記〕に下宮三社笠折大權現兩脇住吉大明神志賀大明神也神功皇后歸朝之後勅建ノ之、祭日九月十九日、風伯神有風穴一神託云云とあり、笠折は加差遠利と訓ムべし、名義詳ならず、〔筑陽記八卷〕に雷山下宮自麓十町余所ノ祭笠折權現風神也相殿高祖大明神香椎大神也社記曰上中下ノ宮總曰雷電神一、祭禮九月十九日、八幡愚童訓曰往古異賊乘二十八千艘之艦一發來日域一時水火雷電神以雷火一敵船悉燒失云云其後大元國蒙古三百七十萬自五島沖一至博多津一組船筏一攻寄當社神發火雨火風一燔沉賊船一也如此奇瑞及七度一也とあり、上中下ノ宮ともに雷村にあり、〔松本久隆云〕雷山ノ下宮神殿に歷十枚をしくべし其内に神殿あり拜殿は入二間半横二間あり神殿ノ右入ノ左に風穴あり風神二座を祭る、毎年八月に六十歲已下の男子を以て穴上を掩ふ事なり前ノ年に掩ひたるを除けずして其上におくなり、下宮より中宮に登る道三町許なり、其間に右ノ方五六間許山ノ側に大なる石ありて是を神護石と云俗に是を香合石と云ニッ合せたるが如くなればなり、是上古に三種ノ神器のうつしを納めたる處なりといひ傳へたり、

○染井權現社

〔染井山古文書〕に當山被二相拘一候權現山森社頭境目行木採用事從二前々一雖被レ加二制止一候上當時甲乙仁等令二狼籍一之條禁制之儀被二申請一度之由言上之通令披露二被レ成二御心得一候條調進之儀可レ被レ得二其心一候恐々謹言、十一月六日隆兼判武助判宗長判　染井山とあり、〔筑陽記八卷〕に怡土郡大門村枝村染井神功皇后爲

緋威石　祭神　祭事　緣起

レ退ニ治異國一ニ祈ニ當所之神一ニ可レ有ニ勝利一者令レ見ニ奇瑞一誓而涵ニ井水於白糸鎧一忽爲緋威一也因レ茲其井號ニ染井一故爲ニ所名一也、件鎧置ニ石上一滴レ水以號ニ緋威石一、有ニ大木一謂ニ鎧掛松一慶長年中枯也、祭神〔熊野三所權現社幷祭ニ豐玉姫一、九月十八日舊記曰神功皇后依ニ當社冥助一降ニ伏異敵一歸朝後經ニ營上宮中宮下宮一神領莫大也云云、自ニ永正一覃ニ天正一九劫爭亂罹ニ兵火一寺社悉炎滅供田豐臣秀吉卿沒ニ收之一依レ之名跡礎而已偶存雖レ有ニ寺社一如レ亡、天神社二所辨財天社云云、

長野宇美宮　社領

○長野宇美宮

〔長野八幡宮文書〕に奉寄進（神領）下式部房宇美宮領筑前國長野庄（所）武光名內室下壹町貳丈同名募仁講田貳段內參丈ノ事右任ニ本主幸康（法名素將）契狀之旨一相傳領掌不レ可レ有ニ相違一但有レ限御年貢以下萬雜公事等無懈怠可致其沙汰者直人百姓等宜承知敢勿違失故下、康永貳年九月日預所、〔同文書〕二段（得吉名）一段三丈横路（太郎丸寛野丸）一段（辨分名內）三丈武光名內三段（金丸名內）三段（五郎丸名新開）二段四丈中（三郎丸名新開）一段（得吉名內下尾田）一丈（金丸名內宮ヘ行貞新開）三丈中（得吉名）已上田數壹町六段定也正平十八年三月十五日宮司御坊所奉預所花押〔長野ノ宇美八幡宮緣起〕に夫當宮開闢者往昔人皇十五代氣長足姫尊征服三韓歸朝之時、皇后船上老翁化現時皇后向老翁曰汝誰耶翁曰吾是新羅國之御棺歟ニ于當山一且詔無陵所謂皇后即位之年移先帝御棺乃樂陵者是也、又命ニ武內宿禰一祭ニ彼船中所レ現清滝權現於留山一是以此山仲哀天皇之山陵亦是清滝權現最初鎮座之勝地、自爾當ニ于仁德天皇治天十年壬午ノ詔平咩木菟宿禰博公祭氣比大神於此山、亦令博公爲神主也是則當山所以因起也、其後當于人皇四十八代稱德天皇神護景雲丁未年率勸請八幡宮及香椎聖母宮寶滿宮一時務公實然則當山緒神集會之古跡鎮護國家之霊場也、雖然八幡大神威德靈驗超過餘社朝野崇敬不レ同一諸神一是故雖レ合ニ祭諸社一以ニ八幡一爲レ最矣、抑祭祀者二月初卯日讃經及神事殿重也、是則神靈之時乎復九月十九日行ニ幸神輿於寶宇祁能美夜爾一明二十日亦行ニ幸神輿於子負原一十四日還ニ幸于寶宇祁能美夜爾一翌廿五日還座本社矣、殿是如在禮奠古今無レ怠年々不順爲ニ恒例一矣、仁諾壬申年二月日とあり、仁諾ノ年號はいかゝなれども明えざれは暫くひきいてつ、

社殿

〔宮司瑞雲院密龍ノ書上ゲ〕に清滝權現・氣比大明神・八幡宮・聖母宮・寶滿宮右五社爲ニ相殿一今以ニ八幡三社一爲レ表、一當寺開山者武內宿禰第四子平群都久宿禰博公仁德天皇十年行宮齋祭攸、朱雀院ノ御世贈於忠辨僧都或書に見えたり右博公之後胤七十七世至ニ博辨法印一其次密城律師成ニ清禮僧（邑）一此時博辨有ニ二女子一長女嫁ニ于瀨戸村古川茂助一後胤在ニ此兩家一などあり、又宇美分四十町之內作人云云此末帳損失松浦分四十町寄進坪付云云此末損失右二本者正長二年之帳合八十町也、但正長より元禄十年迄二百六十九年也元禄十年己（丑）正月長野村八幡宮司毀藏坊とあり、〔神宮寺藏本八幡愚童訓上卷〕ノ末に奉寄進筑前國怡土郡長野庄八幡大菩薩御寶前天正十四年丙戌五月廿二日水崎加賀入道沙彌一仙とあり、

社領

○熊野ノ權現社

〔小藏寺文書〕に下長野庄（破損）新開田院主一所（宇美所）溫屋□（女）一所西園武丈一所宇土口壹段壹丈、右新開田者爲公田雖可辨所當權現四節供料田之內際舜令申之專奉天長地久御願圓滿令彼役院主際舜不レ可レ有ニ後々轉退領掌相違一之狀如レ件元亨三年十月廿五日預所彈正忠□とあり、怡土郡小倉村熊野三所權現、（相殿龍樹菩薩）、祭禮十一月十八日なり、婦人の參詣を許さず、神功皇后の建給へる社なりと云、（今按ずるに上に引る文書どもに院主とあるは小倉寺の院主の如くにも明えまた八幡宇美宮の院主の如くにも明えて定めがたし、また權現とあるも清滝權現にてもあらむかとも思ひたりしかど小倉村の小倉寺すなはち熊野權現の宮司なれば、こゝなるは熊野なることは論なし、小倉寺ノ事は後ノ

祭神　祭禮　緣起〔院主〕

件どもに云るを勘合すべし、また長野の宇美八幡宮の宮司は豐藏坊にて今も小倉寺とは別なりなほ委くは亟ても考ふべし、

○千如寺

〔雷山縁旨〕に雷山千如寺ノ衆徒等申知行地之事任ニ往昔之證文一怡土庄壹郡被レ令ニ宛行一畢者天氣如レ此悉之以レ狀延喜（元カ）二年九月十八日左大辨（書判）千如寺衆徒中、また筑前國雷山千如寺當知行地事被ニ聞食一畢衆徒等可レ存ニ其旨一者天氣如レ此悉レ之以レ狀元弘三年十一月十八日式部□□□（大丞書）（書判）また筑前國雷山當寺是爲ニ勅願之靈地一奉レ祈ニ聖運之長久一可レ致ニ王道之大平一者天氣如レ此悉レ之以レ狀建武二年九月廿四日右少辨（判）千如寺衆徒中、また〔文書〕に雜訴決斷所（牒）宇都宮常陸前司冬綱所雷山千如寺衆徒等申當寺造營用途貳拾陸貫百文事解狀（具書）牒造營用途事任ニ代官善覺去年十一月（十月）十七日請文一宜レ令ニ□（充）濟一之狀牒送如レ件故牒、建武二年二月廿日前筑後守藤原朝臣（判）中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣（判）・明法博士兼左衛門權少尉左京大進中原朝臣（判）・修理大夫藤原朝臣□左衛門權佐兼少納言侍從藤原朝臣□、正三位藤原朝臣（判）・左少辨藤原朝臣、また雜訴決斷所下、雷山千如寺衆徒等申當寺領筑前國法持聖賀開發田地御坂村在家田畠山野等事、右件千如寺當知行之由望ニ申安堵牒狀一之間被レ尋ニ問實否於當國守護人太宰少武頼尚一之處如ニ去年一（建武元）十一月八日所ニ執進一之證人三雲五郎入道道法以下五人請文者寺家所レ申無ニ相違一云云然者千如寺當知行不レ可レ有ニ相違一之狀下知如レ件建武二年九月廿九日前筑後守藤原朝臣（判）

中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣（判）・明法博士左衛門少尉左京大進中原朝臣（判）・修理大夫藤原朝臣□右少辨藤原朝臣□・信濃守藤原朝臣□・右中辨藤原

古文書縁起

初號ニ雷音寺一開山法持聖賀上人人王十三代成務天皇十八年來朝云云、（成務は物によりて聖武とかけるあり是を正とすべし、音同しきに因て後世にかく誤れるなるべし成務天皇の御代に佛法と云物も附と云物もあることなし、）應神天皇十一年庚子七月十五日歸天矣云云、（上中下宮等ノ邪士多明天持國天廿八部衆云云今是を略す、）金堂ノ本尊兩部並坐大日如來（年號不詳）大講堂丈六千手千眼ノ觀音大寺ハ當ニ曳ル地之時一有ニ□三尺金壺一依ニ神功皇后三韓征伐之御願一課ニ法持聖賀一構ニ造當院一曰ニ靈鷲出五尺釘一云云　如レ初還埋則當寺壇場也、千如寺號限ニ當寺大講堂一、〔筑陽記〕に雷音寺縁起曰成務天皇御時天竺羅睺山之僧法持聖賀上人來朝當山ノ溪結ニ草庵一居住日空霧雲收攀ニ嶺上一願ニ四方景氣絶勝樂ニ松琴一吟ニ風聲一然後伽藍造立之志雖レ發ニ心中一無レ暫默息祈ニ願諸天一速ニ半夜一寤寐ノ時虛空遥レ聲云汝勿悲歎ニ信心精誠天感納也　時刻未レ幾風伯雨師同時ニ相起雷電霹靂如ニ白日一或□ニ山岳之嶮或闢ニ碎岸之窄一凡千匠萬工不レ可ニ稱計一及ニ五更一風雨停排ニ戸扉一歷ニ見之一華麗之佛閣不レ虛而現レ形上人歡喜不レ斜恐超ニ上界之莊殿殆倍ニ他方之佛土一以レ寺號ニ雷音一山名レ雷也云云、當山四至東者長谷峯西者旗振岳南者屏堵岐山北者立石也寺社領莫大爲名所レ戚ニ于縁起記錄等一降レ世寺社同祿神官伺侶退散祭田不レ供故迫レ年及ニ衰替一矣云云觀音堂八間四面在ニ中宮地一多明持國ノ二像及二十八部衆皆古佛也千手立像長一丈六尺淸賀上人之作也、往昔此地有ニ雷山雷音寺一又名ニ千如寺一聖賀上人開基之大伽藍也其末尊當國三十三所巡禮十一番之札所也、〔筑前神社志〕に雷山千如寺は怡土郡七大寺の第一にして殘る六箇寺は皆此寺を本山とす、古は僧房十區あり今三房殘れり仲之坊寶池坊惣持院是なり惣持院は座主職ノ

惣持院

僧すめり延壽寺惣持院と云しとなりなど見えたり、〔松本久隆云〕、雷山に聖賀上人傳來の錫杖あり又延喜天皇ノ宸筆の由にて紺紙金泥の縁起あり又明山聖賀上人より千如寺代々住僧ノ名を記せるものあり百五十七代宥觀の時寶歴二年領主の御館に於て獨禮に仰付らるゝ由記せり、

○仲ノ坊

〔雷山文明十二年古文書〕に就ニ小金丸佛明寺□(免)田式部公相論事一御證跡披見申候□然者彼地事如ニ前□一不レ可レ有ニ相違一候恐々謹言九月廿二日繁持(細川)　夏世(赤松)　雷山

寺領

仲ノ坊とあり、〔雷山文書〕に奉寄進筑前國原田庄内木迫壹町三段餘並段別諸濟物之事任ニ先例一不レ可レ有ニ知行領掌相違一之狀如件嘉吉二年壬戌三月五日太宰少貳　雷山

雷山古文書

中ノ御坊、雷山古證文二卷ノ六十五通は中ノ坊金剛清淨院にあり、〔文明五年八月ノ文書〕にも雷山中ノ御坊とあり、〔松本久隆云〕中ノ坊本堂入五間半横五間客殿入五間横八間方丈間御靈屋食堂知事料、茶室、方丈厨等悉くそなはりて大寺なり總高公より寺領百石を寄附し給へり、

○惣持院

〔雷山大永七年古文書〕に當山於ニ本堂一潮滿出候之山態預ニ御札一候誠珍重候別而被レ遂ニ御祈禱一山承候尤肝要候委細惣持院江令レ申候恐々謹言六月九日興種　雷山衆徒

延壽寺

御中御報とあり惣持院は古に座主職たる僧のすむ寺にして延壽寺と云しよしなり

○寶池坊

〔天文六年七月書翰〕に雷山寶池坊參上之通以ニ興運吹舉狀一遂ニ披露一候就レ其當山領夜須郡赤坂村(號小地頭職)事　建武三年將軍家御寄進狀之□不知行之通愁訴候當時彼地明所

寺領

候哉又給人候哉相ニ尋巨細一可レ有ニ注進一之山被レ致ニ到來一之間寶池坊事被ニ留置一候急度可レ被ニ尋進一候由恐々謹言七月廿八日武助(判)興道(判)興重(判)持長(判)杉彈正忠殿とあり、〔天文六年古文書〕に當山領夜須郡赤坂村三町頭職(號ニ小地頭職一)事不ニ知行一之由依ニ御愁訴一御證補之被レ成ニ御判一候尤以目出度候彌被レ專ニ修造一可レ被レ抽ニ御祈禱精誠一之條肝要候恐々謹言十二月十八日武助(判)宗珊(判)興重(判)持長(判)寶池坊とあり、序に云昔は雷山にも山伏ありて峯入執行せりと云雷山の龍高野山に山伏の住めりし坊八區有しと云其うちに寶殿といふのみ其跡のこりて、其餘は詳ならず、又雷山の觀音堂に大なる釜ありそのわたり四尺六寸許あり是雷山坊中さかんなりし時食物を煮調たる釜なりと云傳へたり、

雷山の山伏寶殿

○原田八幡宮

〔高祖神社願文〕に一連歌千句三年、一能五番三年、一原田八幡神樂十番、一二之宮神樂十番、一長野八幡神樂十番右之意趣者爲ニ原田信種御家御祈堵一也天正十五年丁亥七月二日敬白各中とあり、此社は怡土郡原田村にあり原田は公領なり、此處に原田次郎種直の菩提寺もあり社ノ事はなほかさねても考ふべし、

所在原田種直

○靈鷲寺

〔染井山古文書〕に筑前國怡土郡染井山靈鷲寺事去明應八年凶賊殘黨亂入之刻此寺大内家記にも見えたるよしある物に見えたり、歴代數通之文書以下悉令ニ紛失一剩堂舍寺逐(略)日及ニ荒廢一云云雖レ然於ニ山領一者無ニ相違一當ニ知行一之條爲ニ向後一以ニ下知一可レ勵ニ造立之功一之山任ニ衆議一同申請之旨一所レ令ニ裁許一也者早守ニ先例一可レ勤ニ行紹隆一之狀如レ件大永二年八月十五日從三位(大内義興ノ花押ナリ)(略)　當山衆中、また當山領半濟貳町五段之事去天文十二年雖レ被レ

寺領

名義　成ニ御還補一之大村春澤（舞）朝有ニ申子細一不ニ打渡一之條雖レ及ニ寺家衰廢一於ニ修造御祈禱一者聊不レ存ニ油斷一之通先御奉書兩通仁別當遲賀相ニ副一通一遂ニ披露一之處右半濟地重而被レ成ニ御還補一畢者早下地云土貢云被全領地彌可レ被レ抽ニ修造御祈禱精誠一之由所レ被ニ仰出一也仍執達如レ件天文廿一年十月一日左衛門尉（判）美濃守（判）尾張守（判）

絲起　染井山衆徒中とあり、染井は曾米爲と訓ムべし、名義は〔筑陽記八卷〕に怡土郡大門村染井云云　聖武天皇詔ニ天竺靈鷲山之僧清賀上人一（ヲシテ）搬ニ寺院四十二區一（ハ）號ニ靈鷲寺一神佛共昌云然而自ニ永正一覃ニ天正一九州爭亂權ニ兵火一寺社悉炎滅供田豐臣秀吉沒ニ收之一也、依レ之名蹟礎而已偶存雖レ有ニ寺社一如レ無、天神社二所辨財天社藥師堂號ニ正嚴寺一古刹之本尊也清賀上人之作也、別當靈鷲寺閼伽井坊眞言宗福岡吉祥院之末寺也、湯屋坊眞言宗同院之末寺也、觀音堂號ニ聖寶寺一古刹之本尊也、釋迦堂號ニ蓮花寺一古刹之本尊也、各古靈鷲寺之末院也とあり、染井は本社にゆく道の右ノ側にあり四の方なり廣さ方三尺六寸あり石は長さ五間高さ二間上は平なり壓三壓なしくべし、少しかたふける處ともにすべて六壓なしくべし又藥師堂の前後に老松ありはなはだ奇異なる樹なり、四十二坊の內に阿伽井坊石橋坊湯屋坊能圓坊察所坊などの名は今にのこれり、阿加井坊に古の築山のあとあり、湯屋坊ノ池は雪舟給をかきてほらせたりと云傳ふ、〔松本久隆云〕、染井は四方井にしてめくりに石ノ玉垣あり前に石ノ鳥居あり染井宮石祠四尺四方許なり廻りに石ノ玉垣あり寶暦四年に怡土志摩兩郡より建たり拜殿二間四方にしてかやぶきなり少し下に藥師堂あり入三間半横三間あり、また蛇形の松形見之井戸閼伽之井などもあり、〔筑前續風土記〕に染井山は高麗寺村の內にあり、

末寺　○夷魏寺

所在　〔雷山文書〕に號新田禪師之仁并原田孫次郎以下凶徒等楯ニ籠筑前國一貴寺ニ之處抽ニ軍忠一追落凶徒條尤神妙可レ注ニ進京都一也仍執達如レ件曆應三年三月十九日沙彌（花押）松浦中村彌五郎殿、志摩郡〔山比重富家文書〕に深江孫次郎種長燒ニ拂深江片山村一楯ニ籠一貴寺山一之間所相待宰府御左右重富兵衛四郎正高馳ニ向彼山一今月十二日辰時責ニ落凶徒一候畢以ニ此旨一可レ有ニ御披露一候恐惶謹言曆應三年三月日太宰少貳〔舊記〕に怡土郡七大寺云云　一貴山夷魏寺とあり、一貴山村にあり、本尊は阿彌陀佛、社僧十二坊皆炎上して今はなし、神社は神功皇后三韓征伐の時勸請し給へりと云傳ふれども今は社もなくいかなる神を祭給ひしと云事も知られず、此寺も聖武天皇勅に因て僧清賀造れりと云今草堂一宇有て佛を安置するのみなり、村は高き處にあり、仁王門聊殘りて二王ノ像あり甚奇巧なる物なり〔四峯老人ノ說〕に一貴山ノ天ノ目一箇壹岐島などの壹岐に由ある事にてもあらむか、又は熊野三所ノ神にても有むか、

仁王門〔壹貴〕

寺領　○小藏寺

〔長野八幡宮所傳愚童訓上卷〕（小藏寺文書）奥書文書に小藏寺讓與小藏寺隆範之知行田地并院主等事合小藏寺內無レ所レ殘光善坊隆秀□□田地等員數者旣本證文面明白也爰云往古之□□證文云隆範最後之手繼狀顯然上者誰人可妨□存此旨早可令領掌之者也仍爲後々末代讓狀（如件カ）□建保五年正月八

古文書

日僧隆範、「同院主次第注進之勢加聖人衆勢聖人實法房勢祐明嚴房勢圓、明舜房圓祐明眞房圓慶莊嚴房圓秀了性房靜嚴里明房阿闍梨源清了榮房阿闍梨嚴祐敎明房阿闍梨隆範光善房隆梨右院主次第如レ此建保五年同日」（また仙判宇美宮領長野庄内小藏寺田地事今津僧隆舜帶往古之證文雖レ中二子細一件田地自去弘安十年至二元亨三年四種知行無相違之上者今更不レ及二改沙汰一者任故御時契狀之旨相傳領掌不レ可レ有二他妨一之由依レ仰執達如件元亨三年九月七日干手兵衛入道殿爲雅奉とあり、四種は草野次郎入道ないり、）下小藏寺免田并坊敷等重永代安堵□院主隆舜所佐會谷免田但當知行分山内坊敷内新開等安駄新開壹段中右小藏寺者忝神功皇后異國征伐□聖武天皇之御願寺聖賀聖人建立爲靈驗□地之旨隆舜訴申條具被聞食畢□向後者停止公事濟物宇佐造宮等之□任根本例爲院主進止之地無一塵之煩不レ可レ有二相違一仍可專公家武家被本所御祈禱者故以下元亨三年十月日預所彈正忠爲雅などあり、此外古文書多くあれど虫にはまれなどしてさだかに見えず（足利尊氏及國主領主の願書寄進狀などあり、）さて怡土郡小倉山小藏寺は小倉村にあり、小倉寺の鎮守の社といふは（近古瑞雲院の密蘭の書上には大用山小倉寺とあり小倉山とあるは後のことなるか、）熊野三所權現、相殿は龍樹菩薩なり、十一月十八日祭禮を行ふ、（婦人の參詣を許さず）神功皇后勸請し給ひし社なりと云其邊に寺址あり、是も僧清賀勅を請て開きし寺なりと云、社の下に觀音堂あり古佛を安置せり、是も怡土郡七大寺の內にして古は僧坊も多かりしと云、（今は小社と觀音堂とのみ殘れり、）

○金剛寺

所在

緣起

祭禮

七大寺の一

所在

鉢伏

〔由緣〕

寺領

照光寺

〔舊記〕に鉢伏山金剛寺、怡土郡七大寺之一也とあり、金剛寺の跡は怡土郡上原村の上にあり（高祖山の北麓なり、）開基詳ならず（是も眞言宗なれば清賀の草創なるべきか、）坊中の跡甚廣し（今は竹林と成れり）今草庵一宇殘りて觀音の小像を安置す昔本尊とある觀音の像も聊朽殘れり、（庵のむかひに大岩あり、）

（鉢伏と云所は他國にも多し、又こゝの鉢伏は弘法大師鉢を伏せられし所なりともいひ傳へたり、〔常足按〕ずるに此金剛寺は山城國葛野郡なる金剛院に由ある所などにてもあらむ彼金剛院の事は東鑑にも見えて此卷の初に引出たるが如しなほよくかむがふべし、）

○久安寺

〔舊記〕に久安寺、怡土郡七大寺之一也とあり、久安寺は怡土郡吉井村にあり（浮岳の下なり、寺はいつの比にか絕けん今は其趾のみなり、〔常足按〕ずるに七大寺はいづれも清賀の草創にして社僧の坊なるべくおもはるされば ここなるも神社あるべし今は絕て詳ならずなほかされても考ふべし、）

○登志（中村文書）神宮寺

〔文書〕に今津住人尼光阿重言上三雲入道法圓祇候（入）伊勢次郎永經乍入流志土神宮寺田壹町四段於質券致押妨間云云延慶四年五月日、また筑前國中村孫四郎入道榮永重言上爲北崎次郎丸後家尼去今兩年難澁至極上者任格別制旨欲被打渡下地同國志登社神宮寺別當職免田等事副進云云右子細本解以下訴狀具書炳焉爰仰使節三雲五郎入道（此下紙切れてなし）などあり、神宮寺今は詳ならず天正の比神官社僧多く絕たりと云今社僧一家殘りて照光寺と云眞言宗なり、

社領　○權現社

〔雷山文書〕に怡土郡内有田村權現免田五段半爲在城無難武運長久寄進天文壬辰十二月十三日石橋坊源正員とあり、此社事いまだ考へえず、（清瀧權現か熊野權現かもし此二所の内にしあらば創るべし、）

○十樂寺

〔雷山文書〕に筑前國青木庄内堀内十樂寺前田十三町内壹段之事先寄云被仰下旨知行不可有相違之狀如件應永五年卯月十五日吉積因幡守殿源頼秀とあり、此等の事いまだ考へ得ず、

所在　○天下天神社

祭禮　〔棟札〕に筑前國怡土郡世戸村天下天神御寶殿一宇大藏朝臣原田彈正少弼隆種殊造立旦那安曇朝臣西長門守豐國（年號不詳）丙午卯月吉日とあり、是は天文十五年棟札なり、〔師說〕に天下天神社は瀨戸村産沙神なり、本殿一間社小板葺拜殿瓦葺祭禮九月十五日、神官古川掃部、

寺領　○龍國寺

〔雷山文書〕に龍國寺領坪付之事一所幾野町壹町一所寺町一町一所丸隈參段屋敷六ケ所當社祭禮相當一所藏園一所丸甫園一所藥師屋敷一所道園一所横小地一所穴藏屋敷上之山小牛園一所深田屋敷一所百分一所百分一所百分一所百分一所施餓鬼田一所百分天正十一年癸未九月廿日花押とあり（原田了榮の花押なり、）〔師說〕に怡土郡瀨戸村萬年山龍國寺は洞家禪宗にして福岡金龍寺末寺なり（初は立國寺と云、）經藏鐘樓座禪堂あり、（豐前中津殿より近年紋付の幕を寄進し給へり、又享保の比波呂村の内にて高拾石是も中津の殿より寄進し給へり、）

所在　○醫王山社

〔祭神〕怡土郡井原村祠所納〔十六善神畫像幷大般若經筐題書〕に奉施入醫王山御寶殿文明十三辛丑二月吉日次郎太郎敬白とあり（原田次郎太郎中務太輔泰種の事なり、）此社事いまだ考へず、（醫王とあるは藥師又は大汝の神などを祭れるにや、）

寺領　○楠田寺

寺職　〔雷山古文書〕に楠田寺智敎房所司令早領掌楠田寺免田敷地事右件免田敷地任相傳之理所宛行也依之令領掌□（天）且修造彼寺且可令致本家領所御祈禱仍不可有後日違例之狀所宛行如件建暦三年歲次癸酉十月十七日地頭代江判（是房と書入れあり、）また僧舜幸可早如元引募立用免田且致建立備香花且令勤行長日不退佛事等、原田庄楠田寺事右於當寺者爲當庄根本建立之處及破壞佛事不法之由就訴訟舜幸□（聖）（命）應舜之時雖令鋪他人今舜幸建立當守（寺）可專佛事之由依令懇望所宛行也早遂造營備香花（花押）可勤行長日不退佛事之狀如件正嘉三年四月廿五日太宰少貳兼筑後守藤原朝臣（また奉寄進田庄御願楠田寺堂敷間事東限寫西限上滿中神田内堀敷下長畠上高岸北限嶋南限嶋右根木楠山）

寺□職之雖依レ爲二連□□持難二安堵一之間適依レ爲二荒野一重奉レ寄二進于地藏一之□□□未來際彼所□寔數綱可レ被レ致二御祈禱一之旨依レ仰執達如レ件弘長元年十一月廿四日地頭御代官中原吉國判、原田庄内楠田寺免田壹町余畠地等事任二代々支證之旨一領掌不レ可レ有二相違一之狀如レ件應永五年四月二日貞頼判楠田寺院主御房、

所在　などあり、〔光師說〕に楠田寺、怡土郡七大寺之一也とあり、怡土郡東村ノ上にあり今は卿なる地藏堂一宇のこりて寺地は民居となれり、開基ノ事は詳ならず、強て考ふるに七大寺はいづれも淸賀の草創ならむとおもはるゝなその事初にもいへるが如し、又いづれも神社あるべきを夫もたえて傳はらざるが多し神社ノ事もし試にいはゞ初の件どもに擧げたる寺々多くは熊野三所神を祭れゝばこゝなるもさる神にやおはしけむ、

〔七大寺〕

所在

緣起

○瑞梅寺

〔古文書〕に怡土郡瑞梅寺云云　とあり、〔寺記ノ略〕に怡土郡瑞梅寺在二瑞梅寺村一號二天德山授賓院一後圓融院康曆元年乙丸　美濃守　種綱　楊井入道道寂兩人草二創此寺一以二志摩郡常樂寺住僧仁效和尙一爲二開山一　志摩郡常樂寺は背木村にあり、此時ノ事此處に傳はれる古文書にのせたり、後改號二護聖山一今眞言宗而本尊如意輪觀音也往古寺產甚多云、〔雷山文書〕に此度於瑞梅寺長々地忍辛勞之段不及申候猶向後別而可顯其志候殊不レ可レ有二不沙汰一候恐々謹言十一月廿八日　有田右近丞殿　熊松丸、瑞梅寺可被懸御意之由申候之處被仰付候　委細彼方へ申候亂勝陣所事可被仰合候明日之儀於晴天者可打立候御出張觸申候恐々謹言六月廿一日　原田五郎殿御返報　道麒　花押　とあり道麒は陶尾張守持長入道の事也〔寺記略〕に肥前國小城郡榮泉寺并田知行不レ可レ有二相違一之由大永七年平亂勝送二瑞梅寺一之書翰今存レ之云云當今僅有二一草堂一耳などあり、井原村より井原山にゆけば西ノ側に瑞梅寺あり、井原ノ庄ノ內にして古は別所と云へりし處なり近來別村となる村中に觀音堂あり是すなはち瑞梅寺なり、

所在

緣起

○延命寺

〔古文書〕に怡土郡延命寺云云〔寺記略〕に延命寺在二怡土郡篠原村一、篠原村ノ支村なる延命寺と號す是延命寺の趾なり、當郡染井山之末院而眞言秘密之道場也弘法大師歸朝之時所レ造之地藏菩薩安二置之一爲二本尊一とあり、其趣古文書に見えたり、此寺廢れて今は傳はらず、又此村に淸淨寺と云寺有しと云、其本尊は等身ノ正觀音にて佛師岑日の作なりと云、延久年中に常國司藤原俊雅建立せし寺なりと云初は早良郡東門寺の末山にして天台宗なりしが正安年中濟家の禪宗と成れりと云、寺趾詳ならず、

〔淸淨寺〕

○金龍寺

〔享祿三年二月原田興種田畠寄附狀〕に云云〔寺記略〕に大祖山金龍寺在二怡土郡高祖村一、高祖城主原田彈正少弼弘種參二勤于周防國大內家一之時歸二依於山口瑠璃光寺桃岳瑞見和尙一而與二和尙一約云云於二居城高祖一創二立寺院一爲二其父彈正少弼種親法名悅岩之菩提所一號二大祖山金龍寺一故に種親を金龍殿と號す、以二桃岳和尙一爲二開基一以二其門弟慶庵一爲二第二祖一、實へ慶庵を以て此寺第一の住持とす、〔寄附狀〕に筑前國高祖郷太祖山金龍禪寺者爲先考悅了悟大禪定門菩提搬草之地也至二今玆享祿三庚寅一三雲五郎丸之地田地三町并畠地參段同怡土郡倉持庄之內田地三町已上陸町坪付別紙有之所レ奉二寄進一興種致二至孝之誠一云云者堅固有知行而補常住度僧衆彌興隆佛法益輝神明和光現當二世祈禱勤行無退轉者其庶幾乎一度拋志於佛刹上者及兒孫正續萬年莫成違亂況不可有他家妨者也仍可令

寺領

全寺務狀如件享祿三年庚寅二月廿一日原田彈正少弼大藏朝臣興種花押金龍寺、
金龍寺御寄進田地坪付事合五郎丸内一云云已上參町倉持分一云云已上參町一所
畠地參段右御寄進田地田畠六町參段事任御判者盡未來際御寺務肝要也如件享祿三
年庚寅二月廿一日金龍寺禪師上原掃部助泰行判大原四郎兵衛尉廣世判齊田主水允
盛茂判中島對馬守盛重判小崎治部丞盛政判、この外天文四年原田隆種の寄附狀一通
あり、〔寺記略〕に又原田隆種爲二其父興種追福一以二田地一町一寄二附于當寺一弘治三年
八月隆種之二子種門繁種因二云云之事一於二志摩郡岐志村一戰死其後隆種知二二子一
無レ罪而死一悲レ之以二岐志村一寄二附于金龍寺一求二二子之冥福一原田弘種已後代々之石
塔位牌及開山以來數代住僧之位牌幷古涅槃像等於レ今有レ之、至二慶長十六年一長政
公家臣高橋伊豆成二此等之旦越一吹二擧此寺一遂移二寺于福岡荒戸山一雖レ然依レ爲二舊
地一存二一寺一存二舊號一とあり、金龍寺禪宗なり、

五所勅願寺緣起

○高麗寺

〔舊記〕に筑前五所勅願寺雷山靈鷲寺後號二千如寺一一貴山夷魏寺染井山靈鷲寺高麗寺山號不詳、背振山東門寺是也、又〔寺記略〕に弘安四年大元蒙古兵將レ攻二日本一此時高麗王朝二于大元一依レ之從二元兵一欲レ攻二日本一大元高麗之軍兵凡十餘萬人寄二來于志賀島殘島等一日本人待レ之合戰之處八月朔日大風破レ船異國軍兵悉沒二于海底一而漂二着于

寺領

觀音堂

高麗首塚

茶白塚

端山塚

寺領

寺職

五龍山下一殘黨修レ船欲二逃去一之處日本人來捕二二万人一於二那珂河邊一斬レ之以
高麗人之首一埋二此地一建二立寺院一供二養亡靈一矣因レ之號二高麗寺一などあり〔元史〕に餘二去とあり、又殺二衆古高麗漢人一ともあり、高麗寺絶て今〔村〕名となれり、〔染井山文書〕に染井山閑伽井坊領內安窟竹藤押領地事、寺家愁訴之趣送二披露一兩方被レ成二御尋一候處閑伽井坊證文明白之條被付沙汰於寺家候仍押領之地當郡之內飯氏村壹町五段幷高麗寺村壹段已上壹町六段之地事、下地云土貢對二閑伽井坊一速可レ被二打渡一之旨恐々謹言卯月廿九日興國判興綱判武助判安富大藏丞殿寺ノ趾は村北ノの山上にあり礎石近世迄て殘れりしと云ふ其趾畠と成て堂地畠と名付て今も觀音堂殘れり、〔舊記〕に此寺の本尊丈六の彌陀なりし由見えたり、ある物に此近村三雲村に高麗人の首を埋めし所と云傳へたる墓あり、高麗人の首をば三雲村に埋みて寺を高麗寺村の地に建立せしにやといへり又高麗寺村に高麗人の首をうづみたりし所と云ものいまもたしかならず只甲掛の松の下に其趾とのみ云傳へたるあれど是も塚は見えず、三雲村東北に茶白塚とて茶白ノ形に似たる大塚あり東西七八間南北十四五間ありて上に石佛あり、其北に端山と云塚あり茶白塚より細し上に權現ノ社あり、是等高麗人の首塚の由云傳へたり、

○瑠璃光寺

〔雷山文書〕に奉寄瑠璃光寺藥師如來在國作田壹町肆段木曳地田畠國領花田屋敷井饒田堂東園井兎田一段錢參拾貫但爲造營也米參拾石同右件田畠屋敷等者沙彌惠達相傳之所領也然者且爲二公家武家安穩泰平之御祈禱一且爲二興隆佛法一相二副次第證文一□永代所レ奉レ寄二進于藥師如來一也然則以二持戒淨行之聖一爲二住持一可レ被二進退領知一縱雖レ爲二子親類一非二興隆佛法之器一是亂行不善之仁居二住此寺一不レ可レ有二次第相傳之儀一以二淨行之僧一可レ爲二寺主一者也、至二于子々孫々一守二此旨一不レ可レ有二相違一

藥師堂
瑠璃光寺
子負原
子負原ノ白石

仍爲ニ向後證驗一奉レ寄之狀如レ件弘安八年八月日沙彌惠達判　沙彌覺乘判　とあり、此寺ノ事いさゝか物に見えたる事なし、又怡土庄ノ内に名高き藥師堂などもある事をきかずなほよく考ふべし、（志賀郡菩顯寺末院の中に阿彌陀堂又藥師ありもし是などにはあらぬにや、追考志賀郡小金丸村の内火ノ山の上に瑠璃光寺あり眞言宗なり不知火山瑠璃光寺と云ふ寺より少し下にあり東南の間にむかへり、）

○子負原

〔筑紫風土記〕に怡土郡見饗野（在二郡四一）此野之西有二白石二顆一（一顆長一尺二寸大一尺重卅斤一顆長一尺一寸大一尺重卅九斤）者氣長足姫命欲レ征二伐新羅一到二於此村一御身有レ姙忽當二誕生一登時取二此顆石一挿二於御腰一祈曰朕欲三西界來二著此野一所レ姙皇子若此神若凱旋之後誕生其可三遂定二西界一還來即產也所レ謂譽田天皇是也時人號二其石一曰二皇子產石一今誤謂二見饗石一〔筑前風土記〕に神功皇后將レ入二于三韓一時旣臨二產月一皇后自爲二祭主一禱レ之曰事竟還日須レ產二于玆土一于レ時月神誨曰以二此神石一可レ撫レ腹皇后乃依二神石一撫二腹心一體忽平安也、今其石在二筑前伊覩縣道邊一後雷霹神石爲二三段一、〔萬葉集五卷〕に筑前國怡土郡深江村子負原臨レ海丘上有二二石一大者長一尺二寸六分圍一尺八寸六分重十八斤五兩小者長一尺一寸圍一尺八寸重十六斤十兩並皆橢圓狀如二雞子一其美好者不レ可二勝論一所レ謂徑尺璧是也（或云此二石者肥前國彼杵郡平數之石當レ占而取レ之）去二深江驛家二二十許里近在二路頭一公私往來莫レ不二下レ馬跪拜一古老相傳云往者息長足日女命征二伐

新羅國一之時用二玆兩石一挿二著御袖之中一以爲二鎭懷一（實是御裝中央）所二以行人敬一此石一乃作歌曰

〔故布〕可旣麻久波阿夜爾可斯故斯多良志比咩可尾能彌許等可良久爾遠武氣多比良宜
所在　豆彌許々呂遠斯豆迷多麻布等伊刀良斯豆伊波比多麻比斯麻多麻奈須布多都能
伊斯乎世人爾斯咩斯多麻比豆余呂豆余爾伊比都具可禰等和多能曾許意枳都布
可延乃宇奈可美乃故布乃波良爾美豆豆可良意可志多麻比豆可武奈何良可武佐
備伊麻須久志美多麻伊麻能遠都豆爾多布刀伎呂可儛
阿米都知能等母爾比佐斯久伊比都氣等許能久斯美多麻志可志家良斯母

御船繫石

右事傳言那珂郡伊知郷築島人建部牛麻呂是也などあり、〔風土記〕に見饗とあるも

名義

〔萬葉集〕歌に因て故布と訓ムべし、今深江町より西方五六町許にコブガハラと謂處あり（肥前國唐津ノ方に通ふ官道の東の側にあり、）彼二ノ石ある處今さだかならず、子負原に八幡ノ社あり、其下に皇后の御船繫石と云物もあり、

○深江驛

〔延喜式〕に筑前國深江驛あり、（〔萬葉集〕に深江村又深江驛家あり、）深江は萬葉集歌に因て布可延と訓ムべし、〔藻鹽草〕に筑前國深江里ともあり、名義は海底の深きに因て負せたるなり、さて深江は今も官道の驛にして肥前國松浦郡濱崎ノ驛をさる事三里廿二町なり、

〔草香江〕　西より東にさしいりたる江あり、その江のかたはらに人家あり、舟もいる所なり、こゝと引津ノ入江との間にさし出たる崎あり、さて此深江を草香江の事とする説〔八雲御抄〕を初として、これかれ見えたれどいづれもひがことなり、草香は河内國河内郡にあり、永享三年中國の大内盛見と肥後國菊池氏と深江にて合戰する事ありて、盛見戰死せり、〔大内系圖〕には六月廿八日肥前國筑原にて戰死する由記せり、〔豐前國田河郡與國寺ノ過去帳〕に國清寺殿大光德雄大居士永享三亥六月廿八日於筑前深江戰死大内盛見公とあり此與國寺ノ過去帳は〔宗氏家譜〕の説と合ず、家譜の説は志摩郡ノ件に引出たり考ふべし、〔海路記〕に深江ノ上の山を深江岳、又は人嶽岳とも云深江豐前守冥治居城す、永祿ノ末より原田了榮の抱となるとあり、〔或書〕に深江嶽ノ下に陳ノ尾と云處あり、是應永年中に大内盛見德鳳畑三河守と合戰せし所なり、德鳳討負て卒田孫右衛門に討とられるとあり、さて深江の西南の鹿家村の西官道ノ西ノ傍に包石とて丸き石二つを包める石あり其形甚めづらし、此石の四南に聊なる流あり是筑前肥前の堺なり、包石は波うちぎはにあり、

所在　○怡土城

水門　〔續紀十九卷〕に天平勝寶八年六月甲辰始築二怡土城一令三太宰大貳吉備朝臣眞備專當二其事一焉、〔同書二十六卷〕に天平神護元年三月辛丑太宰大貳從四位下佐伯宿禰今毛人爲レ築二怡土城一專知官ト、〔同書二十九卷〕に神護景雲二年二月癸卯筑前國怡土城成とあり、〔宗像神社緣起〕文安元年副本に筑前國怡土志摩兩郡南ノ山中仁同堤二永城二渚流二滅彼異賊二矣などもあり、怡土城の趾は雷村ノ西にあり石壘の石今も殘れり、又雷山ノ西ノ谷より北に流るゝ水あり水の落る處猶高山なり そこに大なる石樋を作りて谷水を其樋内より下す此水樋ノ内よりほとばしり出るさま世にめづらし、其水ノ落ル所筒の如くなれば筒ノ瀧と云ふ、樋ノ上に城門を立てたりと云其礎今に殘れり、筒は上下に有て上ノ筒下ノ筒と云、是水勢強くして下ノ筒にあまる時は上ノ筒より水を下すべきためなり、筒は高三尺長七尺あり、此水岩をつたひつゝ下る事百餘間なり、二三里北ノ方よりもよくみゆ、此水長野村・本村・神有・加布里を經て海に入る、此瀧ノ邊高所に旗振とて高峰あり、昔此所にて相圖の旗を振て近郷の兵士を招きたりし處なりといふ、

旗振　○比賣島

筒瀧

〔攝津國風土記〕に比賣島松原者昔輕島豐阿伎羅宮御宇天皇之世新羅國有二女神一遁二去其夫一來暫住二筑紫國伊岐比賣島一乃曰ヘ此島者猶不二是遠一若居二此島一男神尋來ヒ乃更遷來停二此島一故取二本所一住之地名一以爲二島號一、〔垂仁天皇紀一書〕に初都怒我阿羅斯等有レ國之時黃牛負二田器一將レ往二田舍一黃牛忽失則尋レ迹覓レ之跡留二郡家ノ中一時有三老夫一曰汝所レ求牛者入二此郡家ノ中一而推レ之必殺二殺食一若其主覓至則以レ物償耳即殺食也若問二牛直一欲レ得二何物一對如二老父之教一其所レ祭神是白石也授二牛主一因以將來置二于寢中一其石化二美麗ノ童女一於レ是阿羅斯等大歡之欲レ合然阿羅斯等去二他處一之間童女忽失也、阿羅斯等大驚レ之問二己婦一曰童女何所去矣、對曰向二東方一則尋道求遂遠浮レ海以入二日本國一所レ求童女者詣二于難波一爲二比賣語曾ノ社神一且至二豐國ノ國前郡一復爲二比賣語曾社神一並二所見祭焉

比賣語曾神

非米と訓ムべし、〔古事記上卷〕に云々生二女島一亦名謂二天ノ一根一とあるも日女島ノ日ノ字落たるにて此島を云なり、〔古事記傳〕に攝津國風土記に伊岐比賣島と云へる即筑前の日女島なり、名ノ義は彼女神の來て暫く住給ひし由緒なるべしとあり〔同書〕に伊岐とは彼女神新羅より來てまづ壹岐島に着、伊岐より直に此島に來着坐せる故に云か、豐後又津ノ國などの姫島と別む島に如レ此云しにやともあり、又〔師ノ説〕に筑前ノ國ノ中にして伊岐比賣島伊岐ノ松原などと云は壹岐島に由ある郡なるべし、今詳ならず、さて〔海東諸國記〕に道京戊子ノ年遣レ使來朝書稱二筑前絲ノ島大守大藏氏道京一以二貞國請一接待とあり道京と云人ノ事いまだ考へず、大藏氏とあれば原田氏の支流なるべし、此島にある城山すなはちかの大藏の居所なるべし〔和爾雅〕に筑前國志摩郡怡土島今稱二姫島一とあり、怡土ノ島今は志摩郡におけり、志摩郡岐志ノ浦より西ノ方の海中三里にあり、島ノ周り一里あり人家あり、島に姫大神ノ社あり六月十五日、十一月十五日兩度の祭あり、さて怡土島を怡土郡ノ樂島の事なりと云説はたがへり

〔伊岐比賣島〕

〔道京〕

絲島

所在

姫社

○怡土ノ濱

〔懐中抄〕に筑前いとのはま
　繩手なは吹切るほどに風吹ば糸の濱まで舟も寄りける
〔海路記〕又〔筑前名寄〕等に糸ノ濱は怡土郡深江村の西子負原の北の海邊にあり、

所在

○飽田郷
〔和名抄〕に怡土郡飽田（阿久多）とあり、名ノ義地理ともにつまびらかならず、

〔託杜〕

○託杜郷
〔和名抄〕に怡土郡託杜とあり、いまだ詳ならず（強て考ふるに杜はカシともよむ（タクカシ）事物に見えたり〔萬葉集十卷〕五十九丁に、足引山道不知白杜枝母等乎乎爾雪落者（アシヒキノヤマヂモシラズシラカシノエダモトヲニユキフレバ）とあり、さもあらば託杜（タクカシ）の一字にかりて託杜とよむにやとも思へりしかど高磯を託杜とかくべくもあらず、其上に〔三代實錄三十七卷〕に元慶四年三月廿二日筑前國正六位上託神峰神といふ事も見えて託ノ字を高にかへて用ひたる物とも明えず、此郡に今多久村と云もあれば上は多久にて下は村の誤にて乎良と訓ムべきか、又杜は社ノ誤にてタクノヤシロと訓むべきか、郷名に社字を負せたるも例多し、なほよくかむがふべし、）

〔在所〕

○大野郷
〔和名抄〕に怡土郡大野（於保乃）とあり、名ノ義は廣き野など有て負せたるべし、さて〔康和五年三月十日ノ文書（中村家文書）〕に怡土郡大野郷（注）云々ならず、（大分宮別當文屋神崎庄別當小野云々）ともあり、此郷地今は詳

名義

○長野郷

名義

所在

〔雷山文書（王丸文書）〕に去十日於怡土郡長野庄少貳衆等與合戰之時被ノ疵之山烏田玄蕃允種通對杉彦四郎興長以書狀興長又則注進之尤神妙之旨至ニ京都ニ可ノ遂ニ注進ニ候定而可ノ被ニ賀興（ヵ）ニ候彌可ノ抽ニ忠勤ニ候由可ノ爲ニ肝要ニ候恐々謹言二月廿八日　王丸神五郎殿、正種（花押）　弘依（花押）　重清（花押）　弘詮（花押）とあり、〔長野八幡宮（小禮ヲカ）文書〕に宇美宮領長野庄内小藏寺田地事云云、〔和名抄〕に怡土郡長野（奈加乃）とあり、名義は大野の類なるべし、今も此郡に長野村あり、

○雲須郷
〔和名抄〕に怡土郡雲須（久毛波留）とあり、名義地理ともに詳ならず（三雲村と云はあれど由ありげにも明えず、）

○良人郷
〔和名抄〕に怡土郡良人とあり良人は興志比等と訓むにや（肥後國球麻郡人吉といふ郷名もあり、）名義地理ともに詳ならず、

○石田郷
〔和名抄〕に怡土郡石田（伊之太）とあり、名ノ義は石の多き處にて負せたるべし此郷ノ地今は詳ならず、

○海部郷
〔和名抄〕に怡土郡海部とあり海部は安萬と訓ムべし（宗像郡海部安萬などもあり、）名ノ義は古に海部

の居たりし處なるべし其地今は詳ならず、

○右勢（ヨシイ）

〔圖書編五十卷〕に筑前州右勢あり右勢は興志伊と訓ムべし（右を興にかり勢をしにかる例此外にも多し）今怡土郡吉井を云なり吉井は海邊にして深江より肥前濱崎にゆく官道の筋なり、（元龜の比吉井左京亮隆光吉井岳に居城せり）

所在　吉井岳城

○加菩里（カブリ）公領なり

〔圖書編五十卷〕に筑前州加菩里（カブリ）あり加菩里は可夫利と訓ムべし、名義詳ならず、是は怡土郡加布里村を云なり海邊にして船のつく處なり深江に近し、（菩ノ字後には薩に誤れり、元龜の比原田了榮が城代岩熊河内守居せり）

所在

○加打奴馬（カダヤマ）

〔圖書編五十卷〕に筑前州加打奴馬とあり（後には加也馬とかけり、奴は也ノ誤にて可多邪万なり、名義は片岡片野の類なり、さて是は今の怡土郡片山村を云なり海邊なれども船のつく處にはあらず是も深江に近し、

名義　所在

○浮岳（ウキダケ）

〔海路記〕に怡土郡吉井ノ上の山を吉井岳とも雲ノ浮岳とも云、筑紫ノ富士是なり、〔西行筑紫紀行〕に

筑紫富士

音にきく筑紫の冨士を來て見れば霞にまがふ雲の浮岳

とあり、浮岳は雷山の西にありて聊ひくし、

○主船司

〔雷山文書〕に周船寺村壹町、楠木爲替地相渡者、山北村貳段右者、品川分天文廿四年霜月十二日吉積彦左衛門殿隆種花押、〔同文書〕に怡土郡主船司（スセン）云云とあり、主船司は須世仁自と訓ムべし、名ノ義は古に錢司ノ料を出せし處と聞ゆ筑前に鑄錢司ノ料を出せし事は〔今本類聚三代格〕貞觀十八年三月廿七日ノ太政官符に見えたり、さて今も怡土郡周船寺（スセン）村あり、〔姪濱殿上家文書〕に早良郡脇山三町分地頭職同郡小田部地頭職幷主船司名七町富永庄ノ内成貞名同久富名同國那珂郡ノ内廊子村八町同國深江庄内三町（草場彦三郎入道跡）事任本領旨知行領掌不可有相違之狀如件嘉吉三年三月庄崎彦三郎殿、太宰少貳とあり、

所在

名義

○海鹽津

〔宗像神社緣起〕（文安元年ノ副本）に宗像先祖强石將軍與ニ住吉大明神一云云異類乎征伐志皇敵乎降伏玉事七度也云云第二度者己丑年六月十七日（癸巳日）夷類四万二千人發來堰ニ海鹽津（名ニ今水城山）主住吉高祖源禪師命彼等誘寄放懸ニ淤水令ニ流竭乎とあり、海鹽津は宇志保と訓ムか（又ウミシホとも訓ムべきか〔散木集〕一本に筑紫船うみしほつみてもどるにもあし屋のねてもしらぬとはおもふとあり）今山は怡土郡德永村ノ

今山樓現

内横濱にあり、山上に熊野三所權現社あり勸請の時代詳ならず、

○鞍持（麻生文書永享六年九月廿六日文書）

〔永享年中文書〕に今月六日鞍持合戰事被レ致二忠節一之旨大内修理大夫注進畢尤以神妙彌可レ被レ抽二戰功一之由所レ被二仰下一也仍執達如レ件右京大夫（畠山持國）麻生上總介殿

名磯

とあり、鞍持は久良母知と訓ムべし、名磯は車持（クラモチ）君の居なる處なるべし、（天平行幸の時車持君供奉する事〔延喜式〕に見えたり、又〔竹取物語〕にくらもちのみこといふり見えたり、〔和名抄〕に上總國長柄郡車持、又越中國新川郡車持などもあり、こゝなるも古は車持と書たりけん事うつなし）

車持君

〔筑紫車持君〕〔綾君〕所在

〔履仲天皇紀〕に五年春二月戊午朔於二筑紫一所レ居三神見二于宮中一言何奪二我民一矣吾今慚汝於、是禱而不レ祀、癸卯有レ風之聲（ヒビキ）呼二於大虛一曰劍刀大子（ツルギタチヒツギノミコ）也、亦呼之曰鳥往來羽田之汝妹者羽狹丹（ハニ）葦（ヘツ）立往也俄而使者忽來曰皇妃薨、天皇悔（クヤ）之不レ治二神祟一而亡（ウセ）上二皇妃一更求二其咎一或者曰車持君行二於筑紫國一而悉挍二車持部一兼取二充レ神者一必是罪矣天皇則喚二車持君一以推二問之一、事既實焉因以數レ之曰爾雖二車持君一縱檢二挍天子之百姓一罪一也既分二寄于神祇一車持部兼奪二取之一罪二也則負二惡解除善解除一而出二長渚崎一令二被禊一既而詔レ之曰自レ今以後不レ得レ掌二筑紫之車持部一乃悉收以更分レ之奉二於三神一、〔天武天皇紀〕に十三年十一月戊申胸形君車持君綾君云云五十二氏賜レ姓曰二朝臣一などあり、〔天武紀〕なる車持君も胸形君ノ下に序てたれば筑紫に居たりし事はうつなし、綾君も日向の亞椰なるべきか、さはなほ讃岐阿野にてもあるべし又怡土郡倉持村あり、初に擧たる文書は當國麻生ノ家に多く傳はれるうちの一つなり、

筑前之三（怡土郡）終

筑前之四

○志摩郡

〔名義〕〔延喜式〕に筑前國志摩郡あり、〔倭名鈔〕に筑前國志摩あり、名ノ義は島ノ義なり（書紀に島ノ郡とあり委くは後にあげつらふべし、さて〔推古天皇紀〕に十年二月己酉朔來目皇子爲ニ擊ニ新羅ニ將軍上授ニ諸神部及國造等幷軍旅二万五千人ニ四月戊申朔將軍來目皇子到ニ于筑紫ニ乃進屯ニ島郡ニ而聚ニ船舶ニ運ニ軍粮ニ十一年二月丙子來目皇子薨ニ於筑紫ニ〔肥前風土記〕三根郡物部郷ノ件に小墾田宮御宇豐御食炊屋姫天皇命ニ來目皇子爲ニ將軍ニ造征ニ伐新羅ニ于時皇子奉レ勅到ニ於筑紫ニ乃遣ニ物部若宮部於此村ニ鎮ニ祭其神ニ因曰ニ物部郷ニ とあり此若宮部と云も〔推古天皇紀〕に諸神部と有る内の一つなるべし、〔續紀四卷〕に和銅三年六月乙巳筑前國云云（略）島郡少領從七位上中臣ノ加比中臣ノ志斐ノ連姓ニ〔三代實錄二卷〕に貞觀元年正月廿二日太宰府言筑前國志摩郡兵庫鳴庫中弓矢有レ聲聞ル外、〔小右記〕寛仁三年件に筑前國志摩郡住人多治久明〔宗氏家譜〕に嘉吉元年云云嘉賴・盛國率ニ州兵百餘ニ到ニ筑前州ニ與ニ大内德雄ニ戰ニ志摩郡荻原ニ破レ之活捉ニ德雄ニ以拔ニ其首ニ盛國威名大振、〔軍記略〕に天文年中臼杵安房守受ニ大友家命ニ居ニ志摩郡柑子嶽城ニ治ニ郡中ニ云云（臼杵安房守鑑速初は三郎右衛門と號す越中守鑑速の兄なり天文年中大友氏の命を受て安藝守親連に代りて志摩郡好士嶽の城督となる此人博多の南郭をつきて堅めとすそのおとゝを櫓門といふほりを堀て堅めとしたる跡を房州塚といふ是なり永祿四年二月十五日卒密竹紹貞と謚す、臼杵鑑續より諸家に遣はしたる文書の内今現に殘りたるは天文二年四月十五日、天文三年九月十一日、天文八年二月十八日、天文二十一年、永祿元年、）志摩郡泊ノ

〔名義〕
○王代
來目皇子
小領
島郡兵庫
多治久明
○武家時代
房州塚
泊城

城主泊美作者源姓而稱ニ新羅三郎末流ニ美作永祿八年以レ病卒臨ニ末期ニ三ニ分其所領ニ以ニ十六町ニ與ニ嫡子駿河ニ以ニ十町ニ與ニ二男兵庫助ニ又以ニ十五町ニ與ニ後妻所レ生男子ニ其外以ニ新田五町ニ與ニ後妻ニ美作死後兵庫助談ニ兄駿河ニ而害ニ幼弟ニ追ニ出繼母ニ其後駿河以レ使幼弟之遺領可レ分ニ領之ニ之由雖ニ申遣ニ兵庫助不レ及ニ返答ニ駿河又遣レ使兵庫助切ニ殺之ニ駿河大怒押ニ寄兵庫助館ニ兵庫打出攻戰及ニ日暮ニ駿河指レ泊引退其後兵庫助招ニ近邊溢者ニ於ニ桂木寺ニ搆レ城籠ニ置兵粮ニ以ニ二百餘人勢ニ押ニ寄泊館ニ駿河戰負引ニ退于馬場村ニ兵庫助於レ泊搆レ城猶招ニ寄惡黨ニ欲レ押ニ領近邊ニ其比大友宗麟家臣臼杵新助爲ニ志摩柑子嶽城番ニ掌ニ郡中政所職ニ聞ニ泊兄弟爭論ニ遣ニ駿河伯父山比紀伊守政長幷小金丸九郎秀種波多江上總介鎮種等三人ニ宿ニ雙方ニ令レ止ニ合戰ニ以ニ駿河ニ預ニ元岡右衛門大夫ニ以ニ兵庫助ニ預ニ馬場越後ニ而以ニ此旨ニ注ニ進豐後ニ宗麟大怒召ニ寄泊兄弟ニ命ニ一万田彈正ニ追ニ放駿河ニ令レ誅ニ兵庫助ニ又以ニ兄弟所領二十六町ニ預ニ山比紀伊守ニ以ニ繼母及其子所領十九町幷新田ニ給ニ於肥前國住人松浦黨浪人岡口出雲ニ號ニ泊出雲ニ爲ニ老年ニ之間長男中務少輔出ニ仕於大友家ニ云云永祿十一年春糟屋郡立花城代立花但馬鑑載企ニ叛逆ニ因レ之大友家諸勢攻レ之臼杵新助亦出陳然伺ニ其隙ニ高祖城主原田氏押ニ寄于柑子嶽ニ乘ニ取城ニ新助聞レ之大怒又押ニ寄柑子嶽ニ即時逐ニ出原田勢ニ取ニ返城ニ云云弘治年中高祖城主原田隆種賴ニ毛利元就ニ敵ニ大

泊美作
泊駿河
泊兵庫
柑子岳城
臼杵新助
泊出雲

由比重富六郎　臼杵鎮氏　池田河原合戰　小金丸民部大輔

友家ニ宗麟命ニ臼杵ニ企レ亡レ之臼杵與ニ泊中務少輔ニ同又太郎由比重富六郎已下ニ合レ力原田亦企レ亡ニ臼杵ニ合戰及ニ數度ニ一時隆種押ニ寄柑子嶽ニ攻レ之臼杵能防レ之不レ落原田遂引退ニ云云、元龜二年臼杵辭ニ政所職ニ歸ニ豐後ニ因レ之臼杵進士兵衛鎮氏來守ニ柑子岳城ニ鎮氏性質驕慢多慾不レ顧ニ耻辱ニ處分多ニ私曲ニ於レ是志摩郡城主給人等疎レ之輕ニ其下知ニ進士兵衛常思レ亡ニ隆種ニ、元龜三年正月十六日高祖城主原田彈正少弼隆種入道了榮有ニ宿願之事ニ參ニ詣于今津毘沙門ニ鎮氏不意雖レ討レ之不レ勝却敗走同月廿八日鎮氏打ニ通原田領地ニ之處原田勢多打出於ニ池田河原ニ大合戰鎮氏戰負指ニ泊城ニ欲ニ引退ニ先走至ニ平等寺ニ原田勢亂ニ入于寺中ニ鎮氏其外郎從二十八人同時切レ腹鎮氏首者西彌太郎討ニ取之ニ志摩郡士或戰死或遁散（鎮氏の墓を平等寺に築て其しるしに山茶花を植て臼杵塚と名付きといふ、）自レ是志摩郡城主小金丸民部大輔已下皆附ニ屬原田家ニ天正六年大友麾下木付兵部少輔鑑貫・是久上總介鎮俊爲レ鎮ニ肥前國ニ楯ニ籠于志摩郡柑子岳ニ此時麻生・宗像・原田等出レ勢而緊圍レ城且妨ニ領內ニ依レ之城中粮乏頗及ニ難儀ニ之間遣ニ使於道雪ニ頻告ニ此旨ニ道雪送ニ兵粮於柑子岳ニ命ニ小野彈介・米多比五郎次郎・足達對馬・後藤隼人・井手七郎左衛門ニ警ニ固道路ニ原田・麻生・宗像等設ニ伏兵ニ待ニ立花勢之歸ニ討レ之立花先手井手七郎左衛門・小野三九郎・安東主税・竹廻進士兵衛合レ鏃突ニ崩敵備ニ同後陳佐伯孫六・後藤隼人・文來大敗ニ敵陣ニ依レ之寄手終逃ニ入高祖城ニ（是に引つゝきて明年八月筥崎ノ合戰あり委しくは〔戸次軍談の三卷〕ニ見えたり、）などあり、次に郡ノ大樣は〔和名抄九卷〕に志摩郡韓良・久米・登志・明敷（安加之岐）雞永・川邊・志麻（已上七郷なり、）〔天正年中筑前國田畠高指出帳〕に志摩郡田數千五百五拾三町五段貳畝拾七歩分米二万九百九拾壹石五升七合畠數七百六拾四町六段貳畝拾五歩分大豆三千七百八拾八石壹斗六升四合、合田畠貳千三百拾八町壹段五畝貳歩并米大豆貳万四千七百七拾九石貳斗貳升壹合、〔寛知集〕に志摩郡四十四村などあり〔貝原翁曰〕此郡島ノ郡と云由は昔今津ノ前夷魔山ノ後なる入海西へ通りて桑原・元岡等ノ前より前原に至て西北ノ諸邑諸山皆海中に有しなり今より百年許昔入海漸々田と成る故ニ彼西北ノ諸邑皆怡土・早良兩郡に連て陸地と成る云云志摩郡ハ海に近くして所々に漁家ある故海味乏しからず運漕ノ便宜しと云ども薪材乏しく土地瘦て良田少し只麥作に宜きのみ、〔貝原翁云〕志麻郡岐志村ノ內に全福寺ど云古寺有て廢れたりしを忠之公の時上座郡宮野村ノ八坂と云處に南林寺として二子を殺さんとする時云云嫡子五郎種門二男三郎繁種弘治三年八月七日今ノ南林寺ノ北に井ありそこに石のある腰をかけて切腹せり其後了榮二子の卽なき事を知り是を悔て此處に寺をたて二人の位牌所として寺產を寄附せり原田家亡びて寺產もなく寺も絕たりしを忠之公南林寺を移し寺產を寄附し給ひて今に十石の祭れるなり種門繁種兄弟の墓は新町村ノ內にあり墓は一つなり墓ノ前に社あり兩所權現と號す是兄弟の靈を初は社なかりしを寛永ノ末に祭をなすに依て神に祝へりと云、又志摩郡久我村に淨德寺とて古寺あり近世廢寺となる佛堂わづかに殘りて釋迦藥師ノ木像あり古佛ノ佛像あり、又同郡御床村とてあり昔御堂郡觀世音寺建立の時本尊より阿彌陀ノ像を渡す其佛ノ下に敷し鉄ノ床を此處に置し故御床と云其敷金は長四尺三寸五歩横三尺六寸厚サ二寸二分あり今に志々岐大明神ノ社ノ側に草堂を作りて是を置し志々岐神社は肥前國松浦郡にます神なるを彼佛を乘せ來たりし船人風波の難を遁れん爲に船中に勸請せしを事なく踏着て後此處に社を建立したりと云御床・久我・舟越・新町・貝塚ノ內皆昔時觀世音寺の領地なり、御床ノ近邊に觀世音寺別當の墓所あり村人は宗堅塚と云久我・船越・新町も昔は御床ノ內なりしと

大樣郷　田數石高　志摩の名義　全福寺　淨德寺　御床敷金　志々岐神社　宗堅塚

臨江寺　平等寺　益水觀音　花掛大明神　老松大明神　社領　社職

云、久我村の枝村寺山と云處に觀世音寺別當代々の位牌所あり臨江寺と云、又同郡潤村の通路に土師と云所あり潤村も本ノ名を土師と云しと云此處に平等寺と云願寺あり大寺にして宅地方一町有しと云大友家尊崇の寺にして昔は寺產も多かりしと云今は亡びて其址定かならず、又益水ノ觀音とて初は潤村の本村に有りしも土師に移せり土民此觀音と日本三體の觀音なりと云佛體は奇南香にて作れりと云秘佛なり鎮氏が墓は此觀音堂の前にあり又云志摩郡岐志ノ村へ通屋より西の海邊にあり海上二里陸行は半里あり此所に住吉ノ社有て花掛大明神と云社家ノ傳說に神功皇后三韓に赴き給ふ時此社の側なる山にて花を掛て住吉大明神を祭り給ふ依て其處を花掛山といひ住吉社を建て花掛大明神と號す、又云志摩郡板持村に老松大明神ノ社あり九月廿三日祭禮をつとむ神輿太郎丸まで渡御あり古は此村も宰府天滿宮の社領なりし故此例ありと云今花を掛給ひし松なりとてありていと繁茂せり、

○怡土庄　二宮（大友切文卷）

〔公文〕に入道二品親王下（四）怡土庄官等可早宛行今津宮大般若經免荒田陸町事太郎丸名參町次郎丸名參町右家任（仕）解狀爾當宮者奉ノ勸ニ請御庄鎮守一二宮ニ云云、〔高祖神社天正十五年願書〕に二之宮神樂十番とあり、〔由比家文書〕に荻浦社米田幷居屋敷納所之事然と申合候上者自今以後不ノ可ノ有ニ相違之儀ニ候仍而爲ニ後日（之）一筆如ノ件、永正九年壬申拾月廿八日重富次郎四郎殿宣國判、（宣國は大友の家臣なり次郎四郎は由比和泉守盛正ノ長子正俊にして二宮の社務を司る、）親父與三左衞門尉正俊一跡事云云者早全社務職可ノ被ニ忠切ニ之狀如ノ件、永正十五年十二月十日由比仲次郎殿中務太輔親述、（親述は大友ノ家臣なり仲次郎逸正は正俊の子なり、）御社領勘料段錢御佗言之通承候間許申候社米ノ事も如何にも堅固ニ社家ニ可ノ被ノ渡候仍一筆如ノ件、大永六年五月六日重富次郎四郎殿

祭神所在　社領

秀重判・親連判、（古庄能登守秀重・白杵安藝守親連は大友ノ家士なり、次郎四郎は盛正ノ三男和泉守連正を云、）筑前國志摩郡內二ノ宮社務職之事任ニ御判旨ニ重富和泉守可ノ被ニ打渡ニ之由被ニ仰出ニ候恐々謹言八月廿七日古庄能登守殿道柱判・實治判・親貞判（白杵與三左衞門尉親貞・齋藤刑部少輔實治・齋藤安藝入道道柱此三人は大友家ノ老臣也）御祈禱卷數一合幷御樽拾、昆布一折、雪魚一折、串鮑一折進上之通披露候得ニ其心ニ能々可ノ申之旨候恐々謹言天文四卯月廿三日由比仲次郎殿杉三河守興勝判・弘中下野守興重判、（興勝・興重大內ノ家臣なり、）などあり（此文書は今も荻ノ浦ノ由比重富家に持傳へたりこの外にも三四通あり此文書に稻留又百の書入ノあり今其文をつみ取て文書ノ下に書入る、）〔稻留氏云〕志摩郡山比ノ社鎮祭住吉神、熊野三神今稱ニ馬場ノ六社ニ是也と云り、馬場村に在て六所權現と號す中比いたく廢れたりしを寛永八年領主より再興し給へり、（元岡村內なりしを今は一村となれり此社の前に馬場あり是より一村の名なれりと云、）今は志摩郡ノ惣社と號す今ノ神官は行廣氏なり、

○今津ノ宮

〔公文〕に入道二品親王（下）怡土庄官等可早宛（判）行今津宮大般若經免荒田陸町事、太郎丸名參町次郎丸名參町右家住解狀（仕）爾當宮者奉ノ勸ニ請御庄鎮府（守）一二宮ニ雖ノ建ニ立壯殿於政所近邊ニ不ノ被ノ寄ニ段歩免田年序久積爰家住不慮之外唐本大般若經一部ニ有ニ奉請之事ニ即所奉ノ安ニ置彼宮ニ也而無ニ轉讀之儀ニ者徒塵積無ニ其詮ニ歟倩案ノ之申ニ請古作田ニ者有ニ息公益之恐ニ自ノ昔御庄荒田是多以ニ件荒田六町ニ被ノ宛ニ行十二口僧侶ニ者耕作云云可ニ長日轉讀ニ之上分奉ノ祈ニ本家ニ令ノ致ニ御庄豐饒之祈請ニ

且非レ無ニ先跡一、圓城房代官觀智初建ニ立一堂一、申寄ニ免田五町一、號ニ誓願寺一、所レ載ニ于物勘文一、也是荒田也寺社雖レ異同可レ爲ニ御祈禱一、哉矣者任ニ解狀旨一、件荒田六町早爲ニ大般若經免一、可レ令レ宛ニ行彼兩名一、之狀所レ仰、如レ件庄官等宜ニ承知一、不レ可ニ違失一、以下、嘉祿二年九月十五日　公文大法師判・院司威儀師判・別當權大僧都判・權少僧都判・法眼・無判・法眼判・法橋判　とあり、今津は伊萬豆と訓ムべし、志摩郡今津村を云なり、

社ノ跡

社ノ跡今は詳ならず、（公文は今津ノ大泉坊にあり本文に一二ノ宮とあるは怡土ノ庄ノ一宮高祖神社、二ノ宮山比ノ社を勸請したる社なり、）

社領

○今津四所ノ社（今津牧園氏文書）

〔志摩郡文書〕に筑前國志摩郡定直職同四所登志免兩社領之事任ニ前々之例一可レ被レ存ニ知之一如レ件天文七年三月廿九日親連判・牧園中務丞殿、〔文書〕に筑前國志摩郡今津之內四所登志免兩社領中通ニ六町今津ニ貳町　并灯油免之事任ニ前々旨一無ニ相違一可ニ知行一之狀如レ件天文八年二月十八日定直中務丞殿鑑續判　とあり四所ノ社は志摩郡今津村にありて天照大神八幡大神春日大神住吉大神を祭る（今津村ノ東濱崎の民家の西に向ひて少し高き處にあり）て、鳥居などもあり入海をへだてゝ横濱ノ方よりもよくみゆ、九月廿六日に祭禮あり神官牧園氏今津ノ本村に居住せり、〔文書〕は大泉坊にのこれり、

所在

祭神

祭禮

○登志社（今津牧園氏文書）

〔文書〕に就ニ當津四所登志宮弓箭已來大破被レ申事尤無餘儀候然者百姓土貢已下細少分收納之由候此時者永々兩社再興之儀難成候云ニ土貢一云ニ下地一所詮社領之計被致自作以ニ其餘力一且修造之心懸肝要候萬一百姓中兎角違亂之輩候者以交名可レ被レ申候殊定直掃部助代自作職之在所致ニ沽却一候歟是又今以入間敷候任ニ前々旨一從ニ今年一可レ有ニ自作一候此之由大野肥前守（牧園文書）申付候不レ可レ有ニ緩之儀一候恐々謹言、二月廿五日定直中務丞殿親連判、〔文書〕に當津四所登志免金丸名之內貳町之事定直中務丞存知候然者彼百姓土貢以下細少分收納之由候社家大破之由候間爲ニ再興一候土貢等上員數堅固馳走肝要之由稠可レ被ニ申付一候於ニ此上一百姓違亂申候者中務丞可レ任ニ存知一候哉可レ被レ得ニ其意一候恐々謹言、九月十三日　成松（西村花押）　與一左衞門殿とあり、此〔文書〕も大泉坊にあり、神官は今津村牧園氏なり、

再興

所在

社跡不詳

○誓願寺（大泉坊文書）

松尾社

〔文書〕に奉寄進筑前國怡土庄內誓願寺地鎭（松尾大明神、阿蘇十二宮大明神）雨社田地事　合貳町者（永□名內）御神事次第事書在ニ別紙一　右願者爲ニ天長地久御願成就殊者領主家門繁昌一所レ奉ニ寄進一仍狀如レ件正平九季七月廿八日　散位賴繼判　散位相貫判　とあり、松尾は万都能遠と訓ムべし、〔延喜式九卷〕に山城國葛野郡松尾とあり是神を祭れるなり、社跡今は詳ならず志摩郡今津村誓願寺ノ邊に在りしならむ、

縁起

○誓願寺 阿蘇社

〔大泉坊文書〕に奉寄進筑前國怡土庄誓願寺地鎮 松尾大明神、阿蘇十二宮大明神 兩社田地事 云云 とあり、〔延喜式十卷〕に肥後國阿蘇郡阿蘇、是も誓願寺の裡に在しならむ今は詳ならず、

○今津 熊野社

〔壽福寺ノ文書〕に法性國之御有持天神摩訶多國之大王(主)天照大神(と)深誕國之御鎮守權現、權現者七歳之御時唐與日本之境五島而淨土會之觀音を現し賜ふ也、從其平戸之郡康滿岳之主持之權現自(通)其肥前之國後藤山之みしやう黒上ノ法身權現是也それよりゐなさ大明神と訓じ又其より龍王埼かなめの島とふみ留于今彦島と申也龍王埼より舟に乗せ給ひ寺井ノ津に上り給ひ手水をつかはせ給ふため、井を堀せ給ふに因て寺井とまをすなりそれより千端ノ布をはへ、金住山にあがらせ給ふ處にて中途にて布留候によりて中にては(をは)千端ノ布とかきまをすなり、夫より豊後豊前筑前三箇國の景(京)山、彦山三社權現とあらはれ給ふ、彦山は二ッ殿天台山現はれ其より熊野十二社(所)權現と現れ其より天下第一大靈權現と現れ給ふなり、婆婆世界南瞻部州大日本國西海道筑前國志摩郡濱崎浦權現堂、恒例修正人名帳之事一戸幷一枚爲志(所)行年之奉公、ふれりやく富ふれり、かうぞひだらにのおんそわか右三べん弘安三年正月とあり、志摩郡今津村濱崎ノ浦に熊野權現ノ社あり

縁起

壽福禪寺は今津村ノ濱崎にありなほよく考ふべし、

○誓願寺

〔官廳宣〕に官廳下怡土庄官等可早宛行僧寛智(カ)中請壹堂佛聖田伍町事右件田任下知之旨可宛行之状所仰如件庄官等宜承知依件行之以下安元元年閏九月廿三日公文散位中原朝臣判・院司威儀師・別當法眼判・權律師判・法橋判、〔誓願寺創建縁起〕に靈山東北日本鎮西太宰府邊志摩縣今津登志山誓願寺創建縁起、夫天地無初而以造作法爲初也心法無體而以覺悟理稱體也無初無體之物猶論初論體乎有處有形之寺寧不謂起首乎所以誓願寺者依仲原氏太娘之願樂而所同宿僧寛智之建立也其女弟子歳始三十有四而深厭女身歎於五障之重常願佛質慕於九品之蓮爰係心於彌陀八万之相海發丈六刻彫之誓凝思於淨刹金繩之界道企方丈建立之願故號曰誓願寺也、嘉應二年庚寅五月一日始發願結書表三種誓一欲造丈六彌陀像、二欲寫大般若妙典、三欲供法華持者千人云云、其後承安元年辛卯十月日呼取周州小縣杣入某甲誂丈六御素木畢、即宛行料米十三斛然後先二个度入山而不得眞木及第三度蒙示現如夢執至到而見之正得眞木是則彌陀之靈瑞先令現弟子之宿願終可遂之所致也同二年夏秋運材木九十一支了同三年三月十八日庚戌尾宿火曜甘露辰奉斧始佛像了同五月三日甲午佛後光中檀那兩人姓名字

彫付之首尾七十日之間佛師檀主共精勤勇猛無障礙、同月二十八日功畢、同四年八月二十四日戊寅星宿土曜甘露日堂斧始レ之、同五年（改安元）以遂供養素懷ニ了、備前州日應山入唐法師榮西嘲之爲阿闍梨而中胎金兩部合行之齋席于是立冬入月之後風雪不靜例季冬至之時然當爾之日無風而卷雲有レ耀而收映殆可謂春日乎道俗成レ市賢愚澄心此即彌陀之靈驗揭焉檀那之信力所招歟又大般若經一部六百卷請ニ漢家之本一其日開題了、供持者未滿大數乎、凡厥伽藍建立地相者于北峙高山堅塞夜叉鬼門也于南湛內海深澄八功德池也于東聳野岳登拜ニ明星出現一也于レ西通洲濱既爲極樂土道也前則有ニ屋宅一並棟下化衆生之表示乎後則有ニ寂漠絶人上求菩提之規模乎東漢青龍移此西土白蓮現レ此且依昔日之誓願且任今世之結搆遂一願濟万羞于時法師寛智齡五十有五歲仲原大娘得壽子等三十有九歲所生男子四人女子四人也今爲レ傳ニ後代一錄ニ緣起一而已安元元年大歲乙未十月二十五日壬寅、（孟蘭盆經一品緣起）に婆婆世界南閻浮提鷲山東北海孤絶大日本國鎮西太宰府筑前州島縣今津誓願寺孟蘭盆一品經緣起、夫以法之逆獨不レ行託人以流通乎人之善暗不發依法以修行乎所以或號ニ報恩一或依人勸弘レ之乎是有ニ一沙門一名ニ榮西一生ニ備州一而少年出家志有ニ秘密一數多年苦行而去戊子歲渡海之後欲請宋朝之藏經一心尤切也依レ之丙申歲自仲秋戊戌歲至ニ仲秋一住ニ當寺一待ニ一切經渡海一之間徒然尚勸進云七月十五日廣大善根之日也爲ニ孟蘭盆善根一奉レ寫ニ法花一品經一今開講演既報ニ七世四恩弗法界之恩一云云爰當寺ノ大檀那大法師寛智心染ニ善根一勸有ニ功德一早苦受ニ結構之御莊內官民同心相之素懷果已畢當會日龍雲登四似惡雲舍潤甘雨洒一地如雨法雨朝興群洒之日中法會不雨乎衆會成レ市聽聞有レ便是則大檀那信力所レ示也今日此會爲レ始龍華三會爲レ終而每年每迎七月十五日必修此大事於戲其天上天下之冥衆飽滿一乘一味之法樂現世後世之父母受用甘露醍醐之妙藥短命天壽創札離苦得樂改報矣今將此功福奉報天皇法皇利益自他法界于時治承二年大歲戊戌七月庚申十三日丙子日曜宿（諸錄大檀那大法師寛智女檀那仲原氏太子勸緣乘云云金剛榮西とあり榮西すなはち聖一國師のことなり又（嘉祿二年九月十五日入道二品親王聽宣）に云云四城坊代官觀智初建ニ立一堂一中寄ニ免田五町一號ニ誓願寺一（大泉坊文書）所レ戰ニ予懇勸文一也などもあり、「文書」に入道二品親王廳下筑前國怡土庄官等可早以末武名ノ內田地貳町寄ニ進誓願寺三重寶塔一事右件田地限ニ永代一所レ被ニ寄進一也以彼地利爲備進佛聖燈油修造破壞顚倒也兼又致ニ祈禱之誠一更不レ可レ有ニ退轉之儀一之狀所レ仰如レ件庄家宜ニ承知一勿ニ違失一以下弘安元年七月廿二日公文大法師判院司威儀師判別當法眼判法橋判法橋判、また筑前國怡土庄誓願寺領今津嶽野四至堺事去文暦年中依被帶寄附之狀屬ニ于當御代一就レ被レ申ニ子細一重被レ帶ニ御下知一之間於彼山野一者所レ打ニ渡寺家一也但如ニ四至下知之狀一者限ニ南鷲峯一云云自ニ彼峯一向東生松原爲ニ石崎石堺一限北方寺家知行不レ可レ有ニ相違一仍可レ被レ致ニ御祈禱之忠勤一依レ仰所レ令ニ施行一之狀如レ件建武三年卯月廿日僧取壹判などあり、（此外古文書多く大泉坊に殘れり、）誓願寺ノ跡は志摩郡今津村にあり（眞言宗なり）、古盛なりし時は四十二坊ノ子院有しと云を今は龍性院、大泉坊のみ殘れり、（元祿ノ舊記）に志摩郡誓願寺は云云榮西が住せし時二王門を造る又大泉坊に天神ノ御筆とて心經一卷あり又弘法大師ノ筆跡の佛經一卷定家卿の眞筆ノ經文一卷又榮西ノ眞筆ノ法華經開結二卷即心是佛ノ秘法一卷背狀數通あり十王ノ像ノ畫繪十幅あり是は明朝ノ陸信忠が筆なり發もあり又榮西宋より持來たりし三具足あり花瓶、燈盞、香爐なり銘には十松院とあり是は十松院と云脇寺に持傳へし物なるにや榮西の獨鈷もあり此寺禪宗にあらざれども千光國師入宋の時從來共に此處に寓居せられしかば彼僧の文書こゝに多くあり、

○壽福寺

（志摩郡古文書）「文書」に早良郡姪濱之內興蓮寺分之事可ニ預遣一候先以令ニ存知一當務等調專一候恐

寺領

所在

龍性院大泉坊

十松院

寺領

所在

寺領

々謹言八月六日壽福寺鑑續判、（同文書）また高祖神中寺之事寺領等堅固相閉目必可申付候勤行等之儀不レ可レ有二油斷之儀一候恐々謹言永祿元年十一月廿八日壽福寺慶誕・鑑續判とあり、壽福寺は志摩郡今津村ノ濱崎にあり禪宗臨濟派にして横岳山崇福寺の末院なり、

○佛明寺

〔雷山ノ文書〕に就二小金名丸佛明寺免田式部公相論事御證跡披見申候□然者彼地事如二前□一不レ可レ有二相違一候恐々謹言九月廿二日（文明）雷山仲ノ坊御同宿御中、（細川）繁持判・夏世判、〔同文書〕に當寺領志摩郡金丸之内貳町地事任二當知行之旨一可レ被二全寺務一之山依レ仰執達如レ件天文貳年十月廿日佛名寺、下野守判・三河守判などあり、此寺ノ事いまだ詳かならず、

○潮音菴

〔勝福寺舊記〕に云云末寺ハ潮音菴塔頭本尊地藏願王菩薩云云とあり、此菴ノ趾今は詳ならず、

○廣德菴

〔勝福寺舊記〕に云云廣德菴本尊觀世音云云とあり、此菴の趾も詳かならず、

○江月菴

〔勝福寺舊記〕に云云江月菴ハ本尊釋迦、文殊普賢云云とあり、此菴の趾も詳ならず、

○住喜軒

〔勝福寺舊記〕に住喜軒ハ本尊觀世音とあり、住喜軒もまた其詳かならず、

○能滿寺

〔勝福寺舊記〕に能滿寺ハ本尊虛空藏とあり、是もその趾と云ふものは詳ならず、

○妙泉菴

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所本錢貳百文妙泉菴云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、〔勝福寺舊記〕に妙泉菴ハ本尊觀世音とあり、妙泉菴も今は其跡詳かならず、

○安養寺

〔勝福寺舊記〕に葦竹山安養寺ハ本尊大日如來とあり、安養寺今詳ならず、（早良郡飯盛神社神玉）〔葦竹〕ノ文〕に葦竹高祖云云とある葦竹は是とは別なるにやなほよく考べし、〔筑陽記九卷〕に云云安養寺ハ勝福寺之末院也とあり、

○萬德寺

〔勝福寺舊記〕に無量山万德寺ハ本尊釋迦如來とあり、〔筑陽記九卷〕に云云安養寺ハ勝福寺末院也萬德寺同レ上とあり、なほよく考ふべし、

○桃林軒

〔勝福寺舊記〕に桃林軒（本尊觀世音とあり、〔筑陽記九卷〕に云云安養寺（勝福寺之末院也云云桃林軒同）上とあり、なほよく考ふべし、

○正玉菴

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所壹段小性玉菴云云元龜二年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、〔勝福寺舊記〕に云云正玉菴（本尊觀世音とあり、正玉菴も其趾詳かならず、

○寶持菴慶雲菴

〔勝福寺舊記〕に云云寶持菴慶雲菴本尊藥師とあり、此兩菴の趾も詳ならず、

○順德菴

〔勝福寺舊記〕に云云順德菴（此下文字見えず）とあり、此菴もその趾詳ならず、

○淨光寺

〔勝福寺舊記〕に末寺云云翠流淨光寺本尊藥師云云開基檀越最明寺殿時賴とあり、又〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一ケ所本錢五十文地淨光寺云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、此寺今は詳かならず、

○法涌寺

〔勝福寺舊記〕に末寺（云云伽羅陀山法涌寺本尊地藏開基ノ檀越最明寺殿時賴とあり、法涌寺今詳ならず、

○法門坊　坊領

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所三段小法門坊云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、法門坊は兩社宮司とは聞えたれど今詳ならず、

○寶藏坊　坊領

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所三段寶藏坊云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、是も今はつまびらかならず、

○大泉坊　坊領

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所二段大泉坊云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、大泉坊は初今津誓願寺の末院なり今は（眞言宗）京都仁和寺ノ末院（〔筑陽記〕に志摩郡大泉坊云云金剛坊右同宗仁和寺之末院也、龍性院（紀州高野山正智院之末院也惠光坊同宗那珂郡堅粕村藥王寺之末院也、東光坊同宗福岡正全院之末院也右眞言宗四ケ院ハ誓願寺繁榮ノ時之末院也とあり、）誓願寺末院）なり誓願寺ノ子院四十二坊ノ內龍性院大泉坊の二坊のみ殘れり、彌陀堂、藥師堂殘れり、鎮守ノ社白山權現は領主忠之公再興し給へり誓願寺ノ什物多く此寺に殘れり、

○寶泉坊

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所壹段寶泉坊云云元龜貳年七月十日定直中務

坊領所在

少輔林廣判とあり、寶泉坊今は詳ならず、

○西方院

〔四所登志免兩社領田數坪付帳〕に一所五段西方院云云元龜貳年七月十日定直中務少輔林廣判とあり、西方院は志摩郡波多江村にあり委き事いまだ考へず、

○勝福寺

勝福寺文書　絲起　專光寺

寺領

〔筑陽記九卷〕に龍起山勝福寺臨濟宗横岳山崇福寺之末院也、開山者大宋國之闌溪道隆大覺禪師也闌溪者寛元四年來朝建長元年平元帥時頼創二精藍於鎌倉一號二建長寺一云云什物綸旨五通建長德治應長建武延文是也下文七通建武三年義繼卿曆應二年（勝福寺文書ニ、二花押アリ）平□□延文三年尊氏卿二通同四年義詮卿同五年藤原氏輔卿、安養寺勝福寺之末院也、万德寺同レ上、妙泉寺同レ上、桃林軒同レ上、〔故老傳〕に櫻井村千光寺は延寶二年今津村より當村に遷す昔は禪宗にて榮西和尚歸朝の時今津に千光寺を建つ其後退轉せしを一向宗僧其跡を再建して京都本願寺の末寺となり專光寺と改むと云傳國師傳來の佛と云て延命地藏の金佛この寺にあり、〔勝福寺文書〕に万歳丸名主當名內荒野壹町寄進勝福寺山事被聞召候了其條不レ可レ有二和違一之由可レ申旨所以也恐々建長三年八月十三日左馬允信定、〔同官符〕に筑前國勝福寺可レ被二御祈禱精誠一者也仍天氣如レ此延文五年二月十一日右少辨平行知奉、勝福寺住持方外禪師（筑前國怡土ノ庄今津勝福寺住持ノ僧進現願言上欲下早任二彼例一預二御吹擧一賜中安堵ノ御下文上同庄內志摩方田尻次郎丸名ノ內半田二町萬歳丸稲益丸內荒野壹町友永方元岡井次郎名分目本者宗重今號二福丸名一井屋敷等自二往古一爲二寺領一事田地屋敷等者自二往古一爲二寺領一永代時ノ住持知行無二相違一之地也然者任二彼例一賜二安堵御文一綸旨二御祈禱精誠一言上如レ此貞和六年十一月日、）〔勝福寺舊記〕に龍起山興聖勝福禪寺本尊聖觀世音菩薩聖德太子横六□半入四間向二卯辰一末寺潮音菴塔頭本尊地藏願王菩薩、補陀羅山萬福寺（有公文）本尊馬頭觀音、廣德菴本尊觀世音、江月菴本尊釋迦文珠普賢、住喜軒本尊觀世音、能滿寺本尊虛空藏、妙泉菴本尊菴觀世音、（早良郡飯盛神社神玉の文に荒竹高祖云々とある是歟、荒竹山安養寺本尊大日如來、無量山万德寺本尊釋迦如來、桃林軒本尊觀世音、正玉菴本尊觀世音、寶持菴慶雲菴本尊藥師、順德菴□□翠流淨□（光カ）寺本尊藥師、伽羅陀山法涌寺本尊地藏、開基檀越最明寺殿時頼覺了道崇居士弘長三癸亥年十一月廿二日薨開山救證二大覺禪師闌溪道隆和尚一、（本朝高僧傳十九卷）に蘭道隆號二闌溪一丹氏宋ノ四獨活江ノ人云云泛レ海著二大宰府一本朝寛元四年也時年三十三寅手鈔之間覺一明年入二都城一宋江州開先無明慧性禪師法嗣、弘安元戊寅七月廿四日示レ寂前ノ建長當山第一世勅諡二大興禪師華航道然和尚一正安三年辛丑十二月六日示レ寂又當山ノ中興夢窓疎石正覺心宗普濟玄猷國師觀應二年卯九月晦日示レ寂などあり、（又今に至て五十一代順翁殘則天明八年志摩郡桑原村大神氏と云事も見えたり、）さて〔貝原翁云〕志摩郡今津村勝福寺開基ノ時詳ならず中興ノ開山を方外禪師と云夢窓國師ノ弟子なり、此寺も昔は繁榮の地にて寺產も多かりしと云後光嚴院延文五年此寺を勅願所として御祈禱すべき由方外禪師に給はりし綸旨あり其外足利尊氏同義詮ノ文書及昔ノ國主領主ノ寄進狀等

末院

所在絲起

多く傳はれり、此寺ノ事は今の佛殿又土地ノ樣など委しく記して置かまほしけれどかのわたりに物するいとまなくて暫くさしおきぬ、

寺領

○萬福寺

所在

〔萬福寺文書〕に筑前國今津萬福寺領田地貳町事友永方之中金丸名地頭給壹町師吉名地頭給壹町任二代々證文旨一當寺長老方外和尚管領一圓知行不レ可レ有二相違一狀如レ件延文五年六月十七日藤原氏輔判勝福寺長老、また一合瀨山之内權野道之上貳百文田爲二千壽丸茶湯免一於二萬福寺一末代令二寄進一候狀如レ件天正七年己卯七月十八日神代刑部大輔長良判萬福寺參ル〔勝福寺舊記〕に末寺補陀羅山萬福寺本尊馬頭觀音など見えたり、此寺勝福寺の境内なるべし、寺ノ跡の事はなほ重ねても考ふべし、

院領

○阿彌陀院

〔誓願寺文書〕に入道無品親王廳下、筑前國怡土庄直人名主可レ早爲二阿彌陀院領一免田貳町事副下申狀幷坪付等右寺者爲二梶取長日檜是光之草創一依レ令レ寄二進于御願一爲二佛聖燈油一件免田貳町任二坪付一所レ被二寄附一也永代更不レ可レ有二牢籠一之狀所レ仰如レ件庄官等宜二承知一莫二違失一以下正元元年六月十三日公文大法師判（大法師）院司威儀師判別當權大僧都判權少僧都判法眼判法眼判大法師判、また筑前國怡土御庄梶取長日檜是光謹解申二進廳裁一事、請殊蒙二御哀憐一可レ寄二附免田貳町一於二當御庄

所在

內一阿彌陀院佛聖料田被レ成二下廳御下文一子細狀副二進坪付注文一通一右是光謹考二案內一伽藍之勝善者覺樹之根本也因レ之草二創一間四面之堂舍一安二置六八超世之願王一既釋尊指點之地也豈非二彌陀感應之砌一乎加之屈二禪侶一始二三昧一勸二緇素一修二一乘一是興二隆佛法一之基衆生濟度之門也爰是光依二下賤貧道之身一無レ力二供レ佛施レ僧之營一仍一向奉レ寄二進御願所申寄免田一始行二玉體安穩之御祈一下二賜廳裁一欲レ修二永代不朽之證驗一御領莫大也所レ望最少也爭無二御哀憐一哉然者伽藍不レ傾而期二法音於龍花之春一佛法增レ威而續二梵風於鷄足之曉一望請恩憐被レ寄二附免田貳町一於二怡土御庄內一阿彌陀院者彌欲レ致二御祈禱之忠勤一矣仍恐々謹解正元元年六月日、（其文に任二申請一被レ成二下廳下文一事別當法眼判とあり、）（初ノ方に口書あり）また注進是光自名里坪事、怡土御庄ノ內志摩鄉末武名ノ內十三條十九里五坪丁七坪丁右件名ノ內二丁任二坪付一可レ爲二阿彌陀院免田一之由爲被レ仰下注進言上如レ件正元元年六月日（是も初に別當法眼判、）などあり、此寺今詳ならず、もし誓願寺四十二坊ノ內にて今の阿彌陀堂にはあらぬかなほよく考ふ、（阿彌陀堂は三間四方なりと云初にひける說の如し、）

○今津、

〔盛衰記十一卷〕に小松殿の勞日に隨て憑なき由聞えければ入道殿より盛次を使にて被レ仰けるは云云此間唐より目出たき醫師の渡て今津に著て候なる折節然るべ

文永弘安役

御運と覺え即彼使者に具足し參らす先案内を申也と云云〔吉續記□(五)卷〕に文永八年十月廿三日先レ是蒙古船著ニ今津郡（此地自ニ太宰府一相隔可二二里）奉ニ牒狀一依ニ此事一東使レ（入）落字あるか洛向ニ西園寺亞相（大納言）亭一亞相參ニ仙洞一執奏故今日可レ有ニ評定一之由帥中納言奉行、廿四日蒙古事去夜評議關白（殿）華山院前右大臣内大臣權大納言吉田中納言帥納言等相議云初蒙古使曰當持ニ參牒狀于國都一若不レ然則不レ可ニ手釋一牒狀太宰少卿曰蠻貊無下入ニ國都一例上使亦雖レ有レ所レ對遂不レ能レ入ニ帝都一使者乃寫ニ牒狀一與ニ少卿一關東進レ之彼狀意數投ニ牒狀一而無レ報故今以ニ十一月一爲レ期猶無ニ答書一可レ艤ニ兵船一衆議曰當レ有ニ答書一於レ是菅原長成草ニ創之一而無レ報とあり、今津は伊万豆と訓むべし、〔圖書編〕には名義は古津に對して今津と云と聞ゆ、さて〔元史百五十九卷〕趙良弼ガ傳に（一万字とあり）至元七年以ニ良弼一爲ニ經略使一云云帝從ニ其請一給ニ兵三千一以從ニ良弼一辭、獨與ニ書狀官二十四人一俱レ舟至ニ金津島一其國人望ニ見使舟一欲下舉レ刃來攻上良弼捨レ舟登レ岸喻レ旨金津守延入ニ板屋一以レ兵環レ之滅レ燭大譟良弼凝然自若天明其國太宰府官陣ニ兵四山一問ニ使者來狀一云云日本知レ不レ可レ屈遣ニ使介十二人一入覲仍遣レ人送ニ良弼一至ニ對馬島一十年五月良弼至ニ自ニ日本一（金津は今津を誤れるなり〔八幡愚童訓〕に文永十一年九月の比異賊四百五十艘の大船に三萬人乘て寄來たる對馬、壹岐二島を打落して筑前國今津にぞ付けるとあり、ある說に金津はキシのかなにかりたる物にて今の岐志の津ならんとあれど今津はから國の人にもしられたる所なればまがふべくもあらず其上からぶみに金をキのかなに用ひたる例なし、〔武備志〕の内に中また身をシのかなに用ひたる例あれば津はシのかなゝりともいふべきか、）〔五代帝王物語〕に文永八年九

〔名殘〕

金津

〔金津〕

所在

入海石壘

旗山

月十九日筑前國今津に異國人趙良弼を始として百餘人來朝の間軍船と心得て騷げ(騒カ)ども其義無くて是も牒狀なり、但辛櫃に納て金鎖を指て王宮へ持參して帝王へ奉れ其れ叶はずば時ノ將軍に傳て參すべし其義無くは持歸るべき由王勅を承りたれば手を放つべ からずとて案を書て出したり是も反牒に及ばず、此國後は大元國と號す〔日蓮注畫讃云〕文永十一年十月十九日辰刻筑前博多・箱崎今津・佐原ニ寄來なども あり、〔貝原翁曰〕志摩郡今津村異國ノ船來集せし時は人家も殊に多く有しと聞えて市中宅地ノ筋又廢寺などの跡も處々にあり今も猶廣き村にて人家多く寺院も十二處あり、〔又曰〕今津より西に懸きたる濱ノ長さ東西廿二三町南四町餘あり北ノ海邊には弘安の比異賊防ぎの爲に築れたる石壘なほ殘れり石壘の長さは濱の長さと同くして高さ二間餘有しと云今は海中に埋もれて處々に少顯てみゆ入海東西一里許南北半里許有しが近比漸あせて多く田と成れり云々、

○稻積城

〔天智天皇紀〕に九年正月築ニ筑紫城一、〔持統天皇紀〕に三年九月己丑遣ニ直廣參石上朝臣麿直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫一給ニ送位記一且監ニ新城一〔續紀一卷〕に文武天皇三年十二月甲申令ニ太宰府修ニ三野・稻積二城一とあり、稻積は伊奈豆美と訓べし、（後名鈔）に大隅國姶羅郡稻積、また薩摩國河邊郡稻積ありいづれもイナツミとよませたり、〔常足按〕ずるに志摩郡稻富村（イナトミ）あり是稻積ノ城を築けりし處と聞えたり、〔所在〕〔紀〕のかたには柯茂豆（トヒツ）とは常にしたしく通ふ音なり、〔古事記〕の歌に加毛度久斯麻とあるを〔書句志磨とあるが如し、〔貝原翁の說〕に小金丸村のうち山のふもとに旗山といふ處ありいにしへ旗をたてたりし處とも考へず、かたりつたへたり、〔又云〕鹿也山のふもとに古城のあとあり小金丸民部大輔政種といひし人

の居城なりとありこれらもよしありげにきこゆ、つれたりいまだ稻富ノ村を見ざれば今は只おしあての考のみなりなほかされてくわしく考へてしるすべし、

○韓亭　名義

〔萬葉集十五卷〕に天平八年丙子夏六月遣ニ使新羅國ニ之時使人等云云到ニ筑前國志麻郡之韓亭ニ船泊經ニ三日ニ於レ時夜月之光皎々照レ流奄對ニ此華ニ旅情悽噎各陳ニ心緒ニ聊以裁レ歌六首

可良等麻里野許乃宇良奈美多多奴日者安禮杼母伊敏爾古非奴日者奈之、今一首は早良郡能古島の件に引り其外の四首はぶけり

云云とあり、韓亭は歌ノ詞に因て可良等麻里と訓ムべし、名義は古韓人來朝する時旅泊する亭をおかれたる處なり　韓人來泊の事は次々の件どもにも云べし、〔仙巣稿上卷〕に

十五年前此泊舟、重來面熟一沙鷗、蓬窓時會冷泉客、先問古人安穩不、

泊唐泊後とあり、〔同卷〕に

去年今月此維舟、白髮重來狎白鷗、樽酒斟殘莫斟盡、因風明日亦延留、

同十八日發ニ志賀島ニ泊ニ唐泊ニ、さて〔狹衣ノ物語〕に

唐泊底のみくずと流れしを瀦々の岩浪尋てしがな

云云などもあり、また〔同物語〕にかへりこしかひこそなけれ唐泊いづら昔の人のゆくへは、又〔千首和哥〕に宗長おぼつかなふなぢいづこぞ唐泊このあしはらの名ともおぼえず、又〔八雲御抄〕にからとまり筑前ともあり、〔貝原翁云〕志摩郡唐泊は今津村より一里半ばかり西の海邊なり、人家多し　昔はから國の船今津に來たりしを唐泊も今津に連て近ければ韓人の宿亭を置れたるなり、又唐泊・能古ノ島其間二里餘の海を隔たれど相對ひて近くみゆる處なり、能古ノ島は東にあり唐泊は西にあり、〔貝原翁云〕唐泊浦に禪宗濟家の寺あり唐泊山東林寺と號す千光國師歸朝の時此浦に著て宿せしが此處に小寺を立たり東林寺其寺なりと云高處なれば佳景なり、　所在　東林寺

○引津亭　名義

〔萬葉集十五卷〕に天平八年丙子夏六月遣ニ新羅國ニ之時使人等云云引津亭舶泊之時云云とあり、引津亭は比支都乃等麻里と訓むべし、名義はいにしへ船を引越した る處なるよし語傳へたり、引津の北につゞきて船越ノ浦あり、（以下貝原翁の引津船越の說を載す船越の條を見るべし、重複なるを以て削る）さて〔萬葉集七卷〕に旋頭歌

梓弓、引津邊在、莫謂、花及レ採、不相有目八方、勿謂花、

〔同十卷〕に

梓弓、引津ノ邊有、莫告藻之、花咲及二、不會君毛、

などもあり、また〔新勅撰集〕によみ人しらず梓弓引津のべなるなのりそのたれうきものとしらせそめけん、さて此引津といふは志摩郡加也山の南ノ麓にあり　引津かや山いづれも前原ノ驛より深江ノ驛にゆけば右にみゆる處なり、かや山は引津の入海に足をかけたり、其海は引津より少し東ノ方までもいりこみたり引津深江の入海南北にありて其中

に片山村の出崎あり、また引津のむかひに海をへだて、加布里村あり人家多し是も引津などの如くにしへは官船又から國の舟もとまりし處ときこえてからぶみにも見えたり、

○可也山

〔萬葉集十五卷〕に天平八年丙子夏六月遣二使新羅國一之時使人等云云引津亭舶泊之時作歌七首大判官

久左麻久良、多婢乎久流之美、故非乎禮婆、可也能山邊爾、草乎思香奈久毛、

〔古今六帖〕に小町があね

かやのべはいとも悲しき峯ノ上の松がえともに久しきものを

〔夫木集〕知家

夏ふかきかや野の小野のかやむしろみしかき夜半のふしの間もなし

などあり、また〔夫木集〕に、下なれのかやの山邊になく鹿のさこそみだれて要をこふらめ、また〔幽齋筑紫紀行〕に、茂りゆくかやの山邊にいる鹿は秋より露にぬれてなくらん、〔貝原翁云〕古歌に引津に船をとめし人かやの山をよめり芥屋山をも昔はかやの山と云しにや、〔又云〕志摩郡可也ノ山は宗祇筑紫紀行 筥崎の海の件 に夕日のはる〳〵とかゝれる方に富士に似たる山ありみとことといふ山なり云云ともある山にて俗に筑紫富士といふ山なり、此山を昔より村民もかやの山と云傳へこの邊に近き海をかやの海と云、麓より峯まで十三町ばかりあり山ノ面七葉にわかれて何方よりみるも大かた同じさまなり巔の廣さ東西六丁南北一町余あり山下に古城ノ趾あり、〔貝原翁云〕山の北の半腹小金丸の方に虛空藏の堂あり

所在筑紫富士

稲宮城

〔かや塚〕

かや海

〔名義〕

所在正法寺

福海寺

少なる草堂なり古は大伽藍なりしとて今に礎殘れり寺も十二坊有しといふ其舊跡も殘れり、小金丸民部少輔貞種といふもの是城を守りしなり又大友氏より志摩郡の目代として日野三九郎と云者を遣れしとありまた山上に祠現ノ社といふもあり、〔常足按〕るに此古城則稲宮ノ城なるべくおもはるゝよしもありそは初にも聊いへり　是處より壹岐ノ島なども近くみゆ昔此山は木山にて材木多かりしを小早川隆景當國ノ主となり悉くきりしと云、さて此山の麓に小金丸、邊田、御床、諸吉、貝塚の五村あり、又云小金丸村の支村親山といふ村の上にある故に俗に親山ともいひにありかや塚今は誤て貝塚といふなり、又〔幽齋紀行〕に早良郡姪ノ濱の前なる鷺ノ尾山かやの山の如くにしるしおかれたれどたがへり鷺尾山は今の愛宕山をいふなり、さてかやの海といふはかや山の西なる入海なり久我、船越の北にして岐志の南にあり此入海すぐれたる風景なり久我、船越のかたより北にむかひて見わたしたる風景よし船越の西北龍王ノ社のかたよりみるはさらなり丹後國與謝の入海又武藏國金澤の入海と云とも是には過べからず、

○北崎津

〔海東諸國記〕に親慶丁亥年遣ノ使來賀二觀音現像一書稱二筑前州怡土郡北崎津源朝臣親慶一とあり、北崎は伎多邪支と訓ムべし、名義は北に指出たる崎にて負せたるべし、〔貝原翁云〕志摩郡小田・宮ノ浦・唐泊・西浦を惣て北崎と云、古文書に多く見えたり、〔海路記〕に北崎とは唐泊、御崎までの間をいふ、〔貝原翁云〕小田村に正法寺と云寺あり音の木像計りを里のわらやにうつしをけり此觀音は大同二年に作て安置すと云又望海山福海寺と云禪寺あり開山双峰和尚建武二年に寂せりとなん年經て殊勝なる寺なり、〔又云〕昔對馬島宗氏の子嫡庶を爭ひて合戰に及ひたりしが討負たる者筑前唐泊に遁來たり遂に四ノ浦に移りて漁人となる其遠孫今も宗氏を稱す初筑前に來たる時漁人左近四郎と云者船にのせて來たれる由なるが其遠孫も今四ノ浦にあり、

○韓良郷

〔倭名鈔〕に志摩郡韓良あり、韓良は加羅と訓ムべし、韓の字全くカンの音なるなかの一言に同し、名義は韓人の宿亭を置れたる處なるべし、此卷の韓亭のくだりに云るをてらし合せて見るべし、さて〔民部省圖牒殘篇〕に筑前國志摩郡韓良公穀五十二束有餘、假粟四百六十八丸、貢桑麻繭綿海鮮備とあり今の唐泊の湊古の韓良郷なるべし、〔貝原翁云〕唐泊より南に小河を隔て小村あり宮ノ浦と云宗像三神を祭て社を立れば宮ノ浦と云昔は此神ノ祭神與渡御など有てゆゝしき神幸なりしと云今は九月廿九日に形ばかり祭禮あり、

名義

所在

宮浦

祭禮

○久米郷

〔倭名鈔〕に志摩郡久米あり、久米は俱迷と訓ムべし、名義は〔柳園隨筆〕に志摩郡久米郷は來目ノ皇子の薨賜ひし處なるに因て久米と負せたるなりとあり、なほくはしくは彼隨筆をひらきみてしるべし、來目ノ皇子の事は此卷の初に引出たり、さて〔民部省圖牒殘篇〕に志摩郡久米公穀七百九十六束、假粟一千七百六十四束とあり、〔東鑑七卷〕に筑前冠者家重・三奈木ノ三郎守直・久米六郎國貞とある久米氏は此久米郷より出たるべし、〔志摩郡ノ人云〕當郡野北村の内に久米とよぶ處あり古の久米郷は此邊なるべし、〔宗像神社末社記〕に久米神社ありもしこゝの久米に由あるにはあらぬにや考ふべし由あらば久米皇子を祭れる社なるべし、序にいふ〔貝原翁云〕志摩郡野北村乾ノ方海にかへる山麓に岩屋あり其さま人力のおよぶ處にあらず自然の大岩上にさしかゝりて其下に十四五人をいるべし雨ふりてもぬれず奇觀なり其内に石佛あり岩屋ノ觀音とて遠近ノ人詣來る處なり、また其四ノ方に綿嶋といふ島あり皆岩なり、又其前に昆布島とて海中より出たる岩の脊あり長さ六丁ばかり古は昆布多かりしといふ今はなし、又馬の脊といふもあり汐ひる時はあらはる、又村ノ内北ノ方に大友家臣阿部鑑宗と云者此邊を領して此處に住りし時の屋敷と云物今にあり宅のまはりに堀あり其屋敷ノ中に先祖の墓をつき石塔を立置しが今にあり其宅ノ傍に彼鑑宗が遠孫今に住す、

名義

所在

久米神社

岩屋觀音

綿島

昆布島

馬背

阿部屋敷

○登志郷

〔倭名抄〕に志摩郡登志あり、登志は等之と訓ムべし、名義いまだ考へず、さて〔民部省圖帳殘篇〕に志摩郡登志公穀九百三十五束有餘公粟者待出入之廻船送運之料とも、あり、〔貝原翁云〕志摩郡登志湊假粟六十三束有餘公粟者待出入之廻船送運之料とも願寺又登志ノ山今津浦ノ四ノ峰などあり、登志郷ノ内草葉村ノ東に柑子岳あり、山南半腹より上に熊野權現社あり、故に土俗權現山と云なり、

○明敷郷

〔倭名抄〕に志摩郡明敷安加之岐あり、名義いまだ考へず、〔民部省圖帳殘篇〕に筑前國志摩郡明敷公穀九百三十五束假粟九十二丸八毛田幷桑麻之料充地課とあり、〔青柳、主ノ云〕志摩郡泊村の田ノ字に引敷と云處あり是明敷の誤ならんか、

所在

柑子岳

權現山

○雞永郷

〔倭名鈔〕に志摩郡雞永あり、雞永は祁と訓べし祁の一言にひゞきの永をそへてかけるものなり、木國を紀伊ノ國名義はいまだ考へず、雞永をケの一言によむべしといふ事は早く上田氏がいへりしなり上田氏は京都烏丸通錦小路にありて波伯部ノ百木となのる此人倭とかく例あり、名抄なる郷名の事につきて大しき功ある人なり、さて此雞永といふは今の志摩郡芥屋村のあたりとおもこえたりつれるなるべし此地郡の西南のすみにありて海にさしいてたり、ついてにいふ芥屋の大門とてめづらしきところありその事は〔貝原翁の説〕に志摩郡芥屋村よりいぬのかた五丁ばかりに大門ノ崎とてわたなかにいみしくさしいでたるいはほありこの崎はひとつのはな

所在

芥屋大門

燈臺瀬

穴背

れじまのごとくにしてちひさき尾つゞけりこゝにたとへば龜のくびをさしのべたるがごとしそのいはのかたちといふはみな八九寸より一尺二三寸あるは一尺七八寸ばかりなるはしら數百萬をつがれてたかくわたなかにたてたるが如し此いはほ水ぎはよりたかさ三四十間ばかりありてそのそばたてること城壘の石壁ことならず上のかたはいよ〳〵まへにさしいでゝ下をおほへりそのしたに大門とて北のかたにむかひて大なる岩窟ありさてその窟のなかは水いとふかくしてその色くろくよのつねのうしほにことなりいはやの中よこのひろさ五間ばかりありその中をふれにのりつゝゆくにいはやのうちの高さみづぎはより三間半ばかりあり上をみれば丸すべてけたなるはしをみがごとしそのはしらのはしよりしたゞりおつるみづ高低おなじからず小ぶちにてゆくにすべてしらすなばかりなりそのしらすなをゆく人あるは五七間あるは十間ばかりきよころよりかちにてゆくにすべてしてものゝあいろもわからざればふかくいることあたはずまたかはほりもゆくといへどもはなはだくらくしてものゝ地なりそのきはまるところをしるひとなし、〔さとびといふ〕ちかごろそのかはをうつゝさればいにしへよりそのきはまるところを見むとて火をともしているこゝにやいとほくすなの上をゆかんとするころ、にはかにかいはやのうちなりどよめきてなみかぜおこるこゝにその人みなおそれてかへりたまへるとき〔また云〕芥屋村より三里ばかり此のわたなかに燈ころはありどよめきてなみかぜおこるこゝにその人みなおそれてかへりたまへるとき〔また云〕芥屋村より三里ばかり此のわたなかに燈うみにむかへるとかりおくふかくあやしきはかつてなしまことに天下の奇觀なりさてこの大門は數百里にきこゆすべて夏日波大風しづかなる時ならでは北風はげしきは怒濤いはやをうちてその音雷の如くなるものは汐のひたる時にもなほふかくして穴に似蓋瀬といふものありそは方三丁ばかりなる石の瀬なるがところどころにありてつゞかずさて此瀬の近きあたりに山なきゆゑに舟人のあやまりて此瀬にのりかけてふれをそこなふことおほしさて此ところにとき〳〵龍燈などといふもの時にいづることありゆゑに燈臺瀬といふその火といふは八月よりのちに晴天にはかにくもりて雨雪なびの尾のかたちのごとくなれば下より二三丈ばかりもほそくちらゝとひかりてもえのぼるものなりそのさまえて東のわたの中に岩ありてこれもまた四五寸ばかりなる角柱なるがごとくなれば海人はこの火をえびのなといふなり又大門をはなるゝこと三里になるこにかされたるが如しこれもめづらしきものなりまた芥屋村より四町ばかり東のわたなかに穴脊といふものあり汀よりは一町ばかりもあるべしこれほのひたる時は段々石階ありてみゆ其下は池のごとしよこ十間ばかりなが三十間ばかりの間そのふかきことといくばくといふことをしらずそれより沖は又淺くして汐のひたる時はあらはる左右も又あさくしてあらはる其池の如くなるものは汐のひたる時にもなほふかくして穴に似たるゆへに穴脊といふなり〔播志聞筆〕に芥屋ノ瀉の波打際に明和二年の比大木の株あらはれたりわたり十五間圍五十二間あり城下などよりも群集して是をみる其後は沙にかくれて見えず、

○川邊郷

〔倭名鈔〕に志摩郡川邊あり、川邊は加波乃倍と訓ムべし、駿河國安倍郡川邊（加波乃倍などもあり、名義は川邊ノ朝臣の居たりし處なるべし、川邊ノ朝臣の事は次に委くいふへし、〔民部省圖牒殘篇〕に志摩郡川邊公穀七百五十束有余、假粟八百三十四丸ともあり、〔柳園雜紙〕に〔民部省圖牒殘篇〕に筑前國志摩郡川邊草薙神社云云とあるは駿河ノ國の圖牒の混入したりしなり、〔和名抄〕に駿河ノ國安倍ノ郡川邊ノ郷あり、また〔式〕に駿河國有度郡草薙神社廬原郡久佐奈岐神社といふもあり、さて此郷ノ地今は詳ならざれど強て按ずるに今の櫻井ノ村の邊なるべし、其譯は〔姓氏錄〕に川邊朝臣武内宿禰四世孫宗我宿禰之後也又櫻井朝臣石川朝臣同祖蘇我石川宿禰四世孫稻目宿禰大臣之後也と有て共に武内宿禰ノ末なれば河邊朝臣、櫻井朝臣同處に居たりしなるべし、大和國十市ノ郡にも川邊、櫻井ノ兩郷ありされば武内ノ宿禰の子孫多く此國に住りし趣ときこゆ其事早良郡のくだともにいふを考ふべし、此郡に櫻井村とて大なる村あり委く別記云べし、櫻井村洪福山秀善寺は禪宗濟家にして博多妙樂寺の末寺なり門川にあり〔故老聞〕に秀善寺は應永年中に浦刑部大夫久永法名勝善院殿仁山道勇居士爲菩提此寺を開基すと云櫻井大宮司の先祖なり外に檀那多し本尊は座像の藥師如來其外千手觀音の立像明山無法和尚の木像井道勇居士の位牌左右の脇に安置す石佛の地藏五重の經塔等あり〔貝原翁云〕志摩郡櫻井村の内に圓覺寺と云枝村ありてそこの民家の後に櫻井と云井あり井の廣さ一間に一間半ありて深からざれとも清水なり、〔里人相傳云〕昔此井の側に大なる櫻木ありて其株の内より水出しかば櫻井と云其櫻は枯てなくなりぬれとも、其後國主忠之朝臣又櫻を井の側に植給ひて今にあり圓覺寺は古此所に有し寺の名なり故に地名とす櫻井もありし名とぞ、此村支村ノ谷と云所に谷權現ノ社とて有り、〔貝原翁云〕谷權現は威宗ありとて里民甚恐る九月十八日を祭日とす、昔は大社にて社人あり社僧も六坊有しが近代衰微して社人は退て桑原村にあり祭日には來たりて是をつとむ、社僧の寺は廢絶す谷、洞、口ノ坪、油津、此四村の產靈なれば此四村より祭禮を勤む洞村、谷村に居る洞氏・中村氏祭ノ長たり、其供物は魚、鳥、獸の形を米粉にて作り耳、目、口、鼻、足の體を備へ彩色を以翅、鱗などの形を彫かて其上に五色の幣を作りたつ又鬼塚と云枝村に爽社、熊野社、荒神ノ社あり昔は是等の社にも祭田多く付りと云今も田地ノ字に殘れり、

名義

所在

秀善寺

圓覺寺

櫻井

谷權現

鬼塚社

名義

〔倭名鈔〕に志摩郡志麻あり、志麻は斯万と訓ムべし、名義は志摩郡の郡家を置れし處なるべし、さて〔民部省圖帳殘篇〕に志摩郡志麻公穀六百十三束有余假粟五百十二丸海料充ニ國之擧一ともあり、今志摩郡馬場村ノ内に島野と云處ありと云それもし郡家の跡などにや、〔貝原翁云〕志摩郡馬場村に古城の趾あり志摩城と號す是大友氏の家臣古庄能登が居たりし城なり後に馬場越後と云し者在城したりと云、又馬場村の隣村に元岡村ありそこに古城あり、元岡右衛門ノ大夫と云人居處なりと云、

所在

志摩城

名義

○舟越津

〔朝野群載廿卷〕寛仁三年三月刀伊國ノ賊入寇ノ件に十一日未明同國早良郡至ニ志摩郡船越津一云云とあり、船越は不郡古之と訓ムべし、名義は船を引越す處ゾなるに依て負せたるなり、山の多和より舟を引越スこと〔古事記〕の内にも見えたり、さて〔和名抄〕に志摩國英彦郡船越、筑後國竹野郡船越などもあり、引津の北につゞきて船越ノ浦あり、〔貝原翁云〕志摩郡なる久我、船越の兩村は岐志村より南一里にありて海中の洲なり其西は山なり洲の横二十間餘あり洲の南北兩方は海なり北は可也ノ浦南は引津なりいにしへ久家ノ浦と船越の間をこぎめぐればみちとほき故に洲上をなりて引津といひ船越といふ、さて志摩郡船越村あり、〔貝原翁云〕志摩郡かやの入海は芥屋村の西南野邊崎と云處と船越ノ山ノ坤方の崎鷺ノ首と云處の間より東ノ方惣て一里餘ありされども岐志ノ新町より西ノ方野邊崎までの間は海廣くして風景よろしからず、龍王ノ社ノ前と向の新町ノ前なる迫門ノ間七八町あり、是より東ノ方へ海圓にして山廻れり此圓なる海ノ渡東西半里南北も同じかるべし、此間風景よし、船越より新町ノ方に浦傳に行廻る處又面白し、又船越ノ西北の海邊龍王ノ社ノ前に大なる松あり

所在

〔名義〕

波世渡

本ノ方より地に伏シて過半より海水に漬せりめづらしき木なりかゝる愛たき處なるを古人の歌枕に漏しけむ事いぶかし、

○於露島

〔海東諸國記〕地圖に於露島指ニ波世渡浦一とあり、於露は意呂と訓ムべし、名義は大蛇の意なりと云傳たり、されども大蛇は遠呂智にて於と遠との違ひあり尚それは〔海東諸國記〕の方を誤るなるべし、されどもすべけれど〔東鑑廿四卷〕に於呂ノ七郎と云人見え又〔筑前風土記〕に高麗國意呂山ニ自レ天降日桙之苗裔五十跡手とあれば意呂山よりうつれる名ならむか、序に云波世渡は波加渡の誤にて博多の事と聞ゆ、さて〔宗像神社文書〕建久五年五月三日北條長時ノ書狀に宗像六郎氏業與ニ三原左衛門尉種延一相ニ論宗像社領筑前國小呂ノ島一事、如ニ氏業申一者彼島者自レ昔爲ニ大宮司成敗一之處種延寄ニ事於船頭謝國明遺領一不レ從ニ所勘之沙汰一無ニ其謂一云云とあり、〔貝原翁云〕大蛇島ハ西ノ浦より亥ノ方十三里にあり周廻廿六町南北長十一町東西五町余昔此島に大蛇有し故此名ありと云今も蛇ノ蟠し穴と云物多しと云、此島に宗像大神ノ社あり、又國主より島守を置給番所あり民數百人にたらず、〔筑陽記九卷〕に志摩郡於呂島嶼ニ西浦一海上十三里云云周廻凡半里人數七十余人有ニ遠見番所燈籠堂一、一說云此島多レ蛇故云ニ蛇島一今略云ニ於呂島一、〔ある說〕に五龍の唐音オロンなれば、〇のおろの島の事ならんとあるは面白き說なり、されども此島の事は彼國の人どもゝよくしりたる所なればさまてあやしきかなを用ふべきにあらず其上五龍の二字はから人のかなに用ひたる例なき字なるをや、

所在

蛇穴

五龍

○多賣里

泊港所在

大日寺　大日祭空也祭　泊城

〔國書編五十卷〕に筑前州多賣里とあり、多賣里は等万利と訓ゝべし、〔貝原翁云〕志摩郡泊村と油比の間昔は東ノ方より潮入しを元和四年由比村に新田出來てより潮來らず、古此處にも唐船著しと云傳へたり泊と云も是に依ての名なるべし、田ノ字にも姫浦、長浦、柚木浦、帆柱など云處あり、〔又云〕泊村に大祖山大日寺あり今は寺はなく成て大日堂のみ殘れり、相傳云天慶四年空也上人爰に來たりて創立せりとぞ、大日ノ像は大なる佛體なり恰土、志摩五郡の一なり此大佛の傍に鉢叩聖人住めり是空也上人所化の遺孫なりと云今其名を總て大日と云昔は專九品ノ念佛を修せしが今は只歌舞を以其業とし四方に遊行して淫靡の音樂をなし俗を悅しめて口を餬す又傀儡ノ舞をも成さしむ是國中にては芦屋、柚木の念佛堂福寺の寺中など云る類なり、正月廿八日、九月廿八日大日祭あり霜月十三日空也祭をなす云云、又此村より巽ノ方に當て城跡あり是泊中務少輔鎮家が城址なり其前は泊美作と云し者在城せり此美作は源姓にて新羅三郎の末流とぞ阻えし云云、

所在

○安富庄

〔東鑑三卷〕に壽永三年四月六日池前大納言並室家之領等者載平氏沒官領注文自公家被下云云而爲酬故池禪尼恩德申宥彼亞相勅勘給之上以件家領三十四箇所如元可爲彼家管領之旨昨日有其沙汰令辭之給此內於信濃國諏方社者被相博伊賀國六箇山云云池大納言沙汰走井庄河內云云香椎社筑前安富領同三原庄筑後球瑞臼淵野庄肥後右庄園拾七箇所載沒官注文自於院所給預也然而如元爲彼家沙汰爲有知行勒狀如件、壽永三年四月五日とあり、安富は也須登美と訓ゝべし、名義いまだ考へず、筑後國生葉郡安富村と云も有てもし夫レにもや と思へるに依て此事筑後志ノ內にも引出たり、〔怡土郡染井山天文年中ノ文書〕に安富竹壽又安富大藏丞と云人見えたり、〔芥屋村大祖權現慶安四年ノ棟札〕に志摩郡安富庄芥屋村とあり、〔東鑑十卷ノ十八丁〕に伊勢國安富と云も見えたり、さて〔貝原翁云〕志摩郡芥屋村を安富ノ庄と云、芥屋村は海中に指出たる出崎にて北海に向へり町あり野北の西南一里餘にあり昔は岐志、貝塚も芥屋の枝村なりしと云引津此南に有て近し、又云芥屋ノ大門山の坪ノ方に立石と云處あり其間地はつゞきて海を隔たり其山は海にさし出たる處にして絶項に大なる石欲り其石高五間餘周八間許あり此石有る故に立石山と云其下の出崎を立石崎と云此山の傍甚く奇石怪岩連りて高く長し他境にていまだ見ざる處なり是古歌によめる名所なりと云はれし、此立石崎の邪は太宰管內志別記に委しくいふべし、〔貝原翁云〕芥屋村より七里許沖に烏帽子島とてあり其島周圍五六町あり木多く島なし土島なれども岩多し壹岐島に近し、

立石

烏帽子島

○五龍山

元寇

〔元史二百八卷〕日本際に至元十八年正月命日本行省右丞相阿剌罕右丞范文虎及忻都洪茶丘等率十万人征日本、二月諸將陛辭又爲風水不便再議定會於一岐島今年三月有下日本船爲風水漂至者令其水工畫地圖因見近太宰府西有平戸島者周圍皆水可屯軍船、六月阿剌罕以病不能行命阿塔海代總軍事、八月諸將未見敵要全師以還乃言至日本欲攻太宰府暴風破船猶欲議戰万戸厲德彪招討王國佐水手總管陸文政等不聽節制輙逃去本省載餘軍至合浦散遣還鄉里、未幾敗卒于閤脫歸言官軍六月入海七月至平壺島移五龍山八月一日風破船五日文虎等諸將各自擇堅好船乘之棄士卒十餘萬于山下衆議推張百戸者爲主師號之曰張總管聽其約束方伐木作舟欲還七日日本人

來戰盡死餘二三萬爲其虜去、九日至二八角島一盡殺二蒙古、高麗、漢人一謂二新附軍一爲二唐人一不レ殺而奴レ之闔國是也蓋行省官議事不二相下一故皆棄レ軍歸 久之莫青與二吳万五者一亦逃還十万之衆得レ還者三人耳、〔同書百五十四卷〕俊奇カ傳に云云右丞范文虎等將二兵十萬一由二慶元定海等處一渡レ海期下至二日本一會、平月等島一合レ兵登レ岸兵未レ交秋八月風壞レ舟而還 〔續資治通鑑二十三卷〕に航レ海至二平壺島一遇二颶風一敗レ舟云云惟餘二南人萬餘一不レ殺而奴レ之未レ幾得レ還者財三人、〔東國通鑑三十七高麗紀〕に云云文虎以二戰艦三千五百艘蠻軍十餘萬一至適値二大風一蠻軍皆溺死屍隨二潮汐一入レ浦浦爲レ之塞可二踐而行一〔闕書編五十卷〕日本國件に元至元初遣レ使招諭不レ至因命レ使由二高麗一且介二高麗王植一致レ書諭レ意皆不レ報、至二十七年春二月一顧殺二國使杜世忠等一世祖怒於レ是召二范文虎一議招二募士卒一伐レ之踰レ年遂率二兵十萬一以往至二五龍山一暴風破レ舟文虎等擇二好舟一乘走棄餘衆二山下一衆推二張百戶一爲二主將一伐レ木造レ舟會倭來戰盡殲焉逃歸者纔三人終二元之世一使竟不レ至、又〔同卷〕に元兵至二五龍山一大風破レ舟然范文虎猶擇得堅好者一衆以遁使下能蠻船二破レ舟奔レ山之人一不中自相爭上兩可二一戰一以俟二伐レ木造レ船而相戮如二仇讐一無二約束一遂致二被レ虜俱殲同船二溺穴一可恨哉、また〔同書〕に元世祖曾以二舟師一討レ倭致レ溺二十萬衆於五龍山下一談者恒以爲二口實一、〔武備志二百三十卷〕に唐咸亨ノ初號二日本一元世祖使下趙良弼招ヲ之不レ至遣二唆都范文虎一將二十萬兵一往征至二五龍山一暴風舟覆軍盡沒終二元世一絕不レ通 〔五雜組四卷〕に元之盛時外夷朝貢者千餘國可レ謂下窮レ天極一他國未二發服一而惟日本倔強不二臣服一剛毅尊率二師十萬一往征得レ返者三人耳、 など見えたり、さて〔松下見林云〕五龍山（應島也在二筑前國一）託宣集曰二金海一拾芥二曰二見海一即是、明太祖曰元之艨艟漂二於蛇海一亦指二此地一謂二蛇海一訛也、謂二五龍山一者大誤蓋五ノ龍山（應島）者大誤蓋五ノ龍山（應島）者大誤也と云り、さて〔八幡愚童訓〕筥崎ノ宮件に蒼海遙に見渡せば多可・野古・志賀三島の浮出たる云云 又蒙古襲來ノ件に文永十一年九月ノ比異賊四百五十艘ノ大船に三萬人乘て寄來たる云云 其後又弘安四年ノ夏蒙古、大唐、高麗、已下ノ國々共の兵駈具て三十餘艘大船に數千万人乘連てこそ來たりけれ云云、九國ノ兵已に度々ノ合戰に及び關東よりの武士は何々手並ノ程を見給へかしと進むれば城ノ次郎が手ノ者新左近ノ十郎・今井彦次郎・財部九郎・伯父甥押寄て散々に戰ひ命を限りと討死して失にけり、其後遙に息ふて應島へこそ引退けれ云云、去程十日餘ノ比西國ノ早馬討て申けるは去六月晦夜半より乾風震吹て同七月一日賊船悉ク漂倒して海に沈畢ぬ大將軍ノ船は風已前に青龍海より頭を指出して硫黃ノ香虛空に滿て異類、異形物ども眼に遮ッけるに恐レて遁去ぬ殘處の船ども は打破られて礒に上り息に漂ふ海面は算を散すに異ならず死人多く重りて山を築くに相似たり、應島に打上たる異賊數千人なり船無くして勞居たるが破船どもを繕ひて七八艘に乘遁けるを鎮西軍兵少貳三郎左衛門尉景資を大將軍として數百艘押寄たりしかば異國人ども船が有らば遁もやせんと命をたぼはず戰て引組海に入ッもあり指違へて死るもあり落重リて首を取ッ射伏セ切臥セ勝負を決す敵も身方も數知らず千人許殘りたるが平ヒラに降を乞ふさのみ生けては益なしとて中河ノ邊にて

首を切る始は首を掛しが後には打積てぞ番たりける唐人どもの中に少々生取て有る由披露せし時にてそ京、關東も靜まり上下ノ人も色は直りけれとあり、弘安四年は則元ノ至元十八年に當る、さて弘安四年の事は〔關東評定傳〕に肥前國鷹島とあれば必松浦郡なる高島の事ならんと定めて肥前志二卷に引出たれどなほよく考ふるに〔八幡愚童訓〕の趣は筑前の鷹島と明え又肥前の高島の事なりとしては何とかや物遠きこゝちもすれば此度は〔松下氏の說〕に依て筑前ノ内に引出つされどもなほたしかに定めがたければ兩國ノ志に引出て衆評をまつになん、〔貝原翁云〕志摩郡玄界島は唐泊東北一里許にあり此島初は久島と云又其初は月海島と云其後改て玄界島と云、〔元史〕に五龍山とあるは此島のことにや〔八幡愚記〕に鷹島とあるも此島のことなるべし、周廻一里昔此島に民家七十二軒有しが永祿ノ初世上擾亂甚しかりし時野島ノ海賊しば〳〵來り侵しける故島ノ前に竹を植て防とせり或時海賊數十人來りて掠侵す然るに島ノ長榎田平次郎能防戰に因て海賊叶難くや思ひけん竹林に火を放つ夫より人家に火移りて平次郎も防くに便なく遂に討死せり其墓今も山にあり是より島民彌海賊を恐れ玄界を退て宮浦に移る故に此島民屋もなくて荒墟と成し事四十年許なり云云、始此島に住し源三郎と云者慶長年中還り住み他ノ民も來たりて村里をなせり、又云〔俗既〕に嵯峨天皇ノ御代四條左大臣公光ノ子百合若大臣九州ノ菲鎮として豐後國に住せられしが、異賊襲來せし時勅を受て是を討平げ此島に暫く居給ひしを其家臣別府刑部貞澄舍弟別府真貝兩人心帶して大臣ノ安臥せられしを捨て豐後に歸る、大臣夷と成て久しく此島に住まる、大臣常に鷹を好まれしが久しく飼はれし綠丸と云鷹其内室ノ使として此島に云々と云り、此島に百合若大臣ノ住所と云て山上にあり人家の乾に當れり云々綠丸を祭る社あり云々、又云玄界島ノ乾ノ方五町許に柱島あり高サ五十間許周回なるのみにて土なし故島といふ、石柱は皆方なり六隅なるも多し又八角大樣徑一尺四五寸許あり芥屋ノ大戸の柱石は竪に立り此島の柱石は横に

〔所在〕

百合若大臣

小鷹大明神

柱島

大柱島洞

亞なれり或大小同じからず多くは端を出せり又柱石の側を出せる處もあり東北ノ方殊に見處あり奇異の境地なり此山上に寛文の前まては里俗に大ひけるが近年はしからず、又玄界島より七八町許坪ノ方に釋迦牟尼島あり洞ノ内高さ水面より六七間横三四間廣き處五間許南北ノ長サは洞の北ノ口より南ノ方壁の如く向ひに立ル處に至て凡其間三十間許小船も入ル可し其向ひなる南ノ壁の如くなる所の上面始は裂がりて甚も燈無てはなし南ノ壁も亦一間許裂落たり故に今は洞中暗事なし初南ノ壁に釋迦佛の像を彫付て有し故釋迦牟尼島と云南壁崩落しより佛像もなく成ぬ南壁より東に轉じて小口あり其内幾に小舟一隻を容ル行事數間にして又四に轉じ通りゆく口あり是洞の西ノ口なり凡北ノ口より西ノ口に至て其間六十間許あり其内海水深く左右の岩側に榮螺・辛螺・東海夫人及賭ノ海藻甚多し、又是より南四五十間許に小島あり小机と云大机に比すれば甚低し其四面に當りて洞あり兩口とも西に向へり凡洞中長廿餘間あり其内幾に小船を入ルべし故に俗に是を針ノ耳と云大机小机共に海中にある洞なり、

小机島洞

十二番札所

○眞清水觀音堂

〔筑陽記九卷〕に志摩郡閏村眞清水觀音堂號ニ眞清水山平等寺ノ在ニ櫨町ノ聖觀音坐像秘佛也當國三十三所巡禮十二番札所也、〔寺傳云〕洛東清水寺筑後國一說肥前赤水當寺本朝三體一致之靈佛也、初當者巨刹而昌蕃之靈地也、永祿年中當國住原田與ニ臼杵ノ合戰之日羅ニ兵火ニ當院什物共爲ニ烏有ノ大士像紛ニ失烟中ノ無ニ知人ノ因レ茲僧徒離散爲ニ廢趾ノ歷レ日光明烜ニ野外ノ怪レ之見ニ其攸ノ靈像儼然以結ニ草堂ノ安レ之受ニ年經ニ營一宇ノ近邑太郎丸西泉寺看ニ守之、

草堂

○六社宮

祭神

當郡宗社領

〔筑陽記九卷〕に馬場村六社宮祭禮九月廿八日、所祭熊野三所權現八幡大神伊都岐島倉稻魂命當郡之宗社也往古爲ニ大社ノ神田於ニ當郡波多江村ノ五十町寄附也祭祀繁

多有二神幸等儀一中世因二兵革事一祭田不貢宮社頽壞寛永八年國主忠之公再ヨ建之、

○小田觀音堂　三十三番札所

〔筑陽記九卷〕に志摩郡小田村千手觀音堂立像長八尺澤磨禪師作也傳云往昔號二萬歳山光明寺一巨刹之本尊也當國三十三所巡禮十三番之札所也、十一面觀音像二體各立像長八尺澤磨作也千手觀音像立像長八尺同作也釋迦如來拈華像長三尺同作也毘沙門天立像長三尺同作也辨財天立像長三尺同作也右各在二千手堂之内一號二光明寺跡一山上也澤磨運慶之祖父也、此堂事いまだ考へず、村上にありて東南のかたに向へり、

筑前之四（志摩郡）終

名義

武内氏之裔

郡名起原

島飼臣

筑前之五

○早良郡上

〔延喜式〕に筑前國早良郡あり、〔和名抄〕に筑前國早良〔佐波良とあり、名義詳ならず強ていはゞ物の乾（カラ）く事に由ありて負せたるか我國人物の乾くをさわらぐと云なり〔延喜式〕に摂津國島下郡佐和良議神社・美作國大庭郡佐波良神社などもあり、さて〔古事記傳〕に筑前國早良郡早良郷も元は佐和良なりけむを後に和を波と誤れるなるべし早字は佐字の音なれば宇の韻を通音の和に通はし取れるなりもし元より波ならむには入聲の布の韻の字を用ふる例なり、是らは凡ての地名の例をよく解て知るべきなりとあり、さて〔古事記中卷〕に平群都久宿禰者平群臣佐和良臣馬御（毋比）機連等祖也、〔姓氏錄（元）□卷〕に河内國皇別額田首早良臣同祖平群木兎宿禰之後也不レ尋二父氏一負二姓額田首一、〔香椎宮神官系圖〕に武内ノ宿禰命娶二筑紫ノ直ノ祖眞根子女豐子姫一生二平群都久宿禰一都久宿禰娶二中臣ノ阿麻毘舍連女一生二紀ノ馬御機連一馬御機ノ紀ノ都久宿禰云々とあり、さて武内宿禰の末裔多く此國に住々りと聞えて〔和名抄〕に志摩郡川邊・早良郡額田・早良・平群などあり、是いづれも彼宿禰の子孫のすめりし處と聞えたりまた武内宿禰の子孫と稱するもの香椎社・字美ノ社の神官等にあり、さて〔東鑑〕に佐原氏の人往々に見えたり是もこゝの早良よりや出づらむなほ亟てもかむかふべし、さるを早良と云名は郷名を本にて後に郡名ともなれるなるべし次に云御馬機連とあるは御馬飼の愈なるべし、〔雄略天皇紀〕二十三年四月ノ件に筑紫ノ安致ノ臣馬飼ノ臣等云々とあり、されども馬飼と云地名は此國には聞えず馬飼と云は此郡にあり、又嘉麻郡に馬見と云郷名も見えたれども遠きこゝちす、ちなみにいふ今志摩郡に櫻井村とてあるも彼宿禰の子孫とある櫻井ノ朝臣の住めりし處にてもあらむか、さて此佐和良ノ臣は彼宿禰此國に居給へりし時に出來たる子なるべし久しく此國に住

一山谷僧餘慶

坊主谷

給へりし事は日本紀に見えて生ノ神社の件にひきいてたるがごとし、〔帝王秘記〕に延喜十六年八月廿二日太宰府言上筑前國早良郡郡司今月八日ノ解云郡司三屯(宅カ)春則宅今月三日未刻牝牛生レ犢頭分胸腹合體前足有レ四後脚有レ兩圖ニ其形體ニ言上者令ニ卜筮ニ云云、〔朝野群載廿七卷〕寛仁三年三月刀伊國賊襲來件に十一日未明同國早良郡至ニ志摩郡船越津ニ、〔元亨釋書十一卷〕に釋餘慶筑州早良人也、〔天台座主記〕に第二十大僧都餘慶治山三ヶ月筑前國早良郡人智證門徒師主明仙律師隨行學律師受法滿頂永祚元年云々とあり油山の僧なるか、遊ニ一山谷ニ遙聞ニ鐘聲ニ尋至ニ其所ニ禪房幽邃一比丘讀ニ法華ニ歳三十許、慶相ニ半(半)庭隅ニ比丘停レ經揖レ慶、上レ堂晤話慶問曰年幾乎、對曰一百餘、慶勸ニ其終ニ比丘乃誦至ニ安樂行品天(誤カ)諸童子以爲給使之句ニ二童忽降一人持レ供一人把レ蓋比丘分レ供爲レ二一分自喫一分與レ慶、慶嘗レ之其味甚美、非ニ人間有ニ也、已而告レ辭、比丘曰此地常人不レ至、今日疑語爲ニ幸甚ニ、慶曰失路多幸、到ニ於聖境ニ欲レ傳ニ此事ニ以何爲レ驗經傍九曲(曲ヵ)願見頒焉、比丘有ニ怪色ニ忽十童兒出謖レ几慶元歸ニ不動尊ニ持念須臾、忽大聖明王現レ形奪レ之、十童拒レ之其几中分爲レ二、一半在ニ比丘處ニ一半至ニ慶前ニ慶携而歸云云、〔師ノ說〕に早良郡南山に所々僧坊の址あり、石釜村の上に通天瀧とてあり其西の谷を昔より土俗坊主谷と云谷中に大岩左に聳て其中に小流激湍あり左右の大岩に十六羅漢を彫る、其中なる石面に南無阿羅漢の字を彫たり此地昔年より草木扶蘇荆棘道を閉て通ふ人なし村人は魔所なりとて行ず寛政年中野火此谷に入て荆

文永之役
弘安之役

○南北朝時代

飯盛城戰

棘悉く燒たり此時初て彼羅漢あるとを知れり予も行て見たるにいかにも昔の物と見え〔元亨釋書〕に一山谷とあるは此處ならんかと或人云り、此山谷は何ならむ知りがたけれども(内にもやと思ばるゝ事ども有振山ノ件に云る事ども考合すべし)〔一代要記〕に文永十一年十月十三日異國ノ軍兵云云同十九日亥刻攻ニ來筑前國早良郡、同二十日始ニ合戰ニ宰府軍等皆北畢爰同亥刻許兵船二艘出來合戰時天非ニ凡慮之所ニ及測知是神明之化儀也 〔異國兵退散彼兵船一艘留之所ノ乘之人數六十人許云云、〔蠅抄〕島津文書に蒙古合戰勳功賞筑前國早良郡七隈郷地頭職事一人薩摩國武光三郎師兼田地三町當郷内屋敷二箇所比伊郷上乙王丸名内三名木庄井上名内畠地六段七隈郷内長淵庄内右就ニ孔子配分ニ如ニ此有ニ限佛神事本所年貢守ニ先例ニ不レ可レ有ニ懈怠ニ之狀如レ此 正應元年十月三日 沙彌在判、〔楢谷系圖〕に畠山九郎發頭康永三年(同)十一日到博多將築ニ飯盛城ニ其間肥前東方官軍侵ニ探題之封内ニ直氏踰ニ山如ニ肥前ニ云云、七月云云 菊池小二覬探題之留主襲飯盛山城將陷之時城守告急ニ於綾部城ニ探題工部發ニ向筑前ニ陣ニ日奈多山ニ也菊池相對陣(發)十一月官軍擊破日奈多山陣探題退ニ于肥小城ニ云云、九月十九日先是筑前之官軍大起而將攻ニ探題城ニ(姪濱城飯盛城)告レ急ニ探題工部ニ云云〔筑前軍記略〕に康安元年七月六日征西將軍宮與ニ新田一族二千余騎菊池肥後守武光三千餘騎ニ打ニ出博多ニ於ニ香椎ニ取レ陣給、因レ之大友刑部大輔七千余騎

○戰國時代

小田部紹叱

太宰少貳五千余騎宗像大宮司八百余騎紀井常陸前司三百餘騎都合二万五千余騎成二一手一向二大手一上松浦下松浦兩陣勢三千余騎打二登早良郡飯盛山一廻二敵後一宮方者爲二小勢一之上於二平場一取二陳一雖レ然菊池元來爲二猛將一之間不レ屑二大敵一兩陣之間纔隔二廿町一空經二兩月一爰菊池家子城越前守以二山伏禪僧等一爲二間諜一入二城中一城兵與二寄手一內通之輩有レ之由令レ申レ之因レ之城兵互生レ疑云云八月六日曉城越前守以二千余騎一押二寄飯盛山一松浦大崩敗走云云、〔古文書〕に爲筑前國安樂平城衆可被在城候然者山門庄當城料所內拾町（山崎太郎左衛門尉分）事爲城料所令知行之可有在城之由依仰執達如レ件、寛正六年十二月十九日飯田幸松丸殿右京亮（奢判）加賀守（奢判、紬判）下飯田新藏人重賴可早領知筑前國早良郡野介庄十町地（父將監貞家跡）事、右人所宛行也者早安樂平令在城可令領知之狀如件文明十年十一月廿七日、（以下筑前國問題なし）天文廿二大友家年幕下小田部民部大輔鎮道入道紹叱爲二早良郡荒平山城主一切二從郡中一、至二天正七年秋一肥前國龍造寺隆信三男江上下總守家種以二執行越前守一爲二士大將一相二副神代對馬同彈正筑前國住人原田彈正入道同曲淵河內守等一其勢都合五千餘人於二早良郡背振山麓一取レ陳且令レ燒二拂小田部城下一云云、越前守於二池田村一搆二向城一池田山伏大敎坊初屬二小田部一之處聊有レ恨之間今度屬二肥前方一其勢有二百余人一依レ之越前守以二大敎坊一令レ守二池田城一而自在二陳于內野山一又命二原田氏一令レ守二飯盛岳一又遣二諸卒一

大樣

押二取小田部所領一爲二兵粮攻一、小田部籠城堅固已及二三□一然所城中粮盡籠城難儀之間城將紹叱切腹而可レ助二城中之諸卒一之處那珂郡鷺嶽城主大鶴宗雲聞レ之遣二使於立花道雪一告二荒平難儀道雪聞レ之九月十日夜爲二助勢一可レ遣二十時某一之旨約レ之宗雲以二其趣一告二小田部一云云宗雲又以二舍弟宗逸一助二小田部一、紹叱有二二子一嫡子九郎十九歲二男源次郎十一歲也命二源次郎一令レ守レ城其外不レ殘出レ城籠二空屋敗一待二夜明一天正七年九月十一日初天遂與二大敎坊一及二合戰一則討二取大敎坊兄弟及龜井新七筥田彈正一追二拂殘兵一尙取二卷池田城一放二火近邊一又以二大敎坊首一贈二宗雲一宗雲云云勸二大鶴宗逸小田部九郎一急令レ攻二池田城一紹叱爲二老武者一之上戰已勞雖レ然不レ得レ息又出陳此時於二內野山一越前守見二池田放火一遣二多勢一遂取二卷小田部勢一紹叱父子討死士卒亦過半被レ討云云內野勢亦引退、爰立花道雪加勢人數六百人許至二于椿瀨川岸一聞二小田部戰死之趣一遂引退越前守云討二取小田部一之上者城中女童可レ助レ之則令レ開二大手口一然處道雪宗雲兩將以二兵粮一籠二于當城一之由有二風聞一因レ之越前守於二大手門前一取二陳命一原田草野等一令レ在二陣于屋竹山上一命二小賀往情入道一令在二陳于脇山口峰一又命二神代一令レ固二入部口一因レ茲城中男女又成二籠鳥思一于時小田部妻幷其子源次良以レ女爲二使乞一降云云小田部在二此城一廿七年而亡、〔戶次軍談〕に天正筑前處々軍並小田部大鶴戰死之事などあり、次に郡大樣は〔和名抄九卷〕に早良郡（毗伊）能解（乃計）額田

郷村　田數石高　立神山　正覺寺　荒平山城　首塚　曲淵城　曲淵長者　長福寺　火亂瀑布

奴加多　早良佐波良　平群倍久利　田部多倍〔天正年中筑前國田畠高指出帳〕に早良郡田數千九百四拾四町七畝貳拾八歩分米貳万四千七百八拾八石壹升三合畠數三百四拾六町八段五畝五歩分大豆貳千百六拾壹石五斗壹升六合合田畠數貳千貳百九拾町八段三畝三歩幷米大豆貳万六千九百四拾九石五斗三升三合、〔元祿年中田畠帳〕に早良郡高三万八千六百九十八石二斗六升九合、〔寛知集〕に早良郡四十七村などあり、〔ある書〕に早良郡福岡城西に在て近し福岡地も西方三分一は早良郡に屬せり、此郡北に海有て三方に高山あり廣平ノ地に村里多く水田多し中に早良川流る故に山林河海備はりて薪材等乏しからず魚鹽多し河水多けれども滯りなくして水旱ノ患稀なりされども平田は肥饒ならずして種植豐ならず、〔ある書〕に早良郡金武ノ境内に立神山と云高山あり此山に岩多く白石あり蠣殼多くつけり、又重留村に昌法山正覺寺と云寺ノ址あり今ハ田となる其廣さ一町許あり法華寺なりしと云小田部氏の寺にて其墓所なほ殘れり此寺院の址に鐘を埋みたりしに長政公ノ家臣吉田壹岐此郡司たりし時堀出しける能き鐘なればとて福岡ノ城に召給へりしが後に聖福寺に給はりて今にあり、又荒平ノ城も重留村に屬せり同村より此城の麓まで十町許あり大手ノ口あり本丸ハ高山なり其廣一段許二ノ丸は西ノ方低き山にあり又遙に西に出城あり本丸ノ乾に寄手ノ陣所ノ跡あり陣ノ尾と云荒平ノ城跡と東ノ山との間に谷あり大谷と云其下を城ノ原と云城山ハ其西に出て別ノ山の如し凡小笠木村より仙道に至迄其間東西に長き山を荒平山と云小笠木脇山内野東入部重留此五村荒平山ノ下にありしかれども城址のある山は右の荒平山にはあらず下へ續きて別峯なり又塔ノ原と云處の道端に首塚とて大塚あり荒平ノ城と肥前勢と戰ひし時首千級を埋めし塚なりと云又曲淵ノ古城ハ曲淵村の南にあり元龜天正ノ比郡士曲淵河内守氏助其子信助在城せり高祖の原田氏に屬す城上五畝許あり麓に居宅ノ跡あり中門表門大門ノ跡に石垣尚殘れり河内守ハ石瀧曲淵西村金武四ヶ村田村次郎丸野芥七隈荒江麁原土打を領せりと云河内守後に浪人と成て長政公此國を領し給ひて後に死せり、又曲淵村に河内守が家人三郎右衛門と云者農人と成り他村を兼人て田畠百六十町を作る家ノ奴婢三百余人牛馬九十疋定を貯へたり寛永十六年に死す、又曲淵村に醫王山長福寺と云廢寺ノ址あり曲淵氏代々の寺にして墓所あり、又石瀧村ノ内に火亂ノ瀑布とてめづらしき瀧あり高六間許なり里人云昔火亂と云山伏劔術の上手にて寛法を

夜叉御前谷　大教坊　仙道　草香江　千賀浦　室見川　位階　名義　緣起　性空

行ひしが此瀧に打れ修行せし故に名付くとなん、荒平城下に大なる谷あり夜叉御前谷と云此夜叉御前と云は荒平ノ小田部氏が妾なりしを主婦の嫉妬に因て殺され城南ノ谷に埋られたりと云其後此谷に大蛇あり是を見る、人恐れて病と成り或は死る者有しと云里人は夜叉御前の化する所なりと云近年ハ大蛇を見る人なし云、又脇山村ノ内池田と云枝村ありてそこに大日堂あり大日像は古佛なり大教坊と云山伏の住し宅ノ跡ハ大日堂の側にあり泉石樹木など猶殘れり、又内野村ノ枝村に仙道と云村あり荒平山ノ麓高地に在て風景勝れたる處なり寛文九年西山ノ宗因此國に來りし時此處にて連哥ノ興行數廻に及べり、宗因發句尋ねこし奥山づとの宜柴かな宗因又仙道ノ記を作れり云云、又光諸山ノ法雲和尙來遊して仙道觀ノ記を撰べり又曰〔八雲御抄〕〔鹽〕等に草香江筑前に在とす俗說に島飼村の東ノ入口をいふ一說に荒戸の下東南の湖の入し處を云と云」昔は此山の南入海なり此二說は證書ハなけれども云傳ふるを以て爰に記す、又〔瀛隅草大名寄〕に千賀ノ浦筑前にありとす俗說に福岡ノ城ノ西島飼村の東南の間なり千賀ノ浦と云此處入海なりしを長政公城をつき要害の爲に水塘とし給ひしより後は海水入らず或人云志賀島を昔は近の島と云し由古記に見えたれば志賀の浦を千賀の浦と云べきかと云り、〔八雲抄〕には千賀の浦志賀島肥前にありとす、〔三代實錄〕に肥前松浦郡に値嘉郷値嘉島あろ由云り其邊の浦をも千賀の浦と云るにや決定しがたしと云れしなり右の二ツの名處の事ハ〔太宰管內志別記〕に委しくいふべし、〔貝原翁云〕早良川を室見川と云昔小田部村の邊に室見大明神ノ社有し故小田部より下の川ノ名とせり室見神社今はなし、

〇背布利神社

〔三代實錄十八卷〕に貞觀十二年五月廿九日詔授ニ筑前國正六位上背布利神從五位下ヲとあり、背布利は勢不理と訓ムべし、名ノ義は〔玉林苑〕に筑前背振山にして飛龍脊を振しかば龍樹權現跡をしめ給ふ德善大王辨財天乙護法の靈場誠に神秀の地なるかなとあり、（また里民のかたりつたへにも古辨財天百濟國より來たり賜ふ時のり給へる馬の脊をふりしところなれば背振山と云といへり、）さて〔朝野群載一卷書寫山上人傳〕（花山法皇御製）に沙彌性空者東京ノ人也云云數年後去ニ霧島ニ更住ニ筑前背振山ニ三十九得レ諳ニ誦法華經ニ山中無人清爽之時十餘歲兒童子在ニ同座ニ共誦ニ此經文ニ有ニ老僧ニ形體非レ凡以ニ一紙之書ニ授ニ上人ニ上人以ニ左手ニ握レ之老僧耳語云〻報

皇慶　智行

遍照法華光藏正等覺上人異レ之後到二播磨一云云、〔元亨釋書十一卷〕（釋レ性空カ傳）に年三十六出家尋二人跡不レ至鳥音不レ聞之深山一乃往二日州霧島一結レ廬而居云云、居四歳移住二筑前州背振山一一日誦二法華一兒童數人年可二十五六一來二左右一同誦、容貌奇麗、音韻清雅、云云 神童二人一曰レ乙、一曰レ若、侍二左右一凡有二使令一先レ意能辨、乙童擊二同役一而斃、空呵馳去、童雖二悲泣悔訴一遂不レ許、〔同五卷〕（釋レ皇慶傳）に慶夏二於背振山一有二延般者一顯密之英也事レ慶爲レ師慶與レ般修レ法慶誦二鷲發地神偈一印手按レ地大震、顧戒レ般曰、慎勿レ語レ人、慶病、頻那夜迦天現レ形手捧レ盃而曰師疾篤、非レ酒難レ治、每朝願受二一盞一、不レ可レ局レ禁也吾爲二護神一不二暫離一天帝令二我献一盃耳、其器大可二半升一一日於二地上奄一禮二舍利一舍利放レ光盈レ室詣二四天王寺一禮二舍利一本是三粒分爲二八粒一薄暮童子來、身體偉壯、慶怪而問、汝何人對曰多時侍二書寫空上人一會、役喻二上人上供一我而不レ耐レ忍以レ拳加レ頭、其人即死、上人愍厲驅レ我去、故投レ師焉、慶與二飲食一童拱曰願加二印呪一易レ受耳、慶使二童數百里外一不二半時一復命或令レ滌レ衣憑レ虛暴二謔之一、不レ用二桁竿一靈異甚多、一時諸役、列坐戲謔、以レ拳打二輔車一、逐レ次相授、巡至レ童、童辭曰、恐及二大故一諸列强レ之、童綫下レ拳、吐レ血殆殂、慶聞撥去、童泣曰、背振山地動堅牢善女天出現之時也我親見レ之故感レ德來也今遭二摩斤一悲哉、〔聖鐘善鳴錄五卷〕に釋智行云云 有二朝屆一千栗川一値二降水一偶見二背振山僧立

神童　龍池　乙護法　岩上茶

驗一欲レ角二法力一挿レ水招レ舟舟忽裂作二二片一行即持二印呪一括其合如レ故遂濟レ河而去、此山の佛ざたになれる事は元明天皇の時此山の僧堪譽と云人朝廷の祈禱をせし事〔宴曲抄〕に見えたり是初なり又僧教弘法慈覺智證等入唐の時も皆此山に入て祈願せし事〔宴曲抄〕に見えたり〔筑後國大善寺承久元年九月ノ舊記〕に背振山乘蹇房永秀料田一丁云云背振山大教房安幸料田一丁云云背振山心融房阿闍梨敬辨料田一丁云云背振山功惠房萬惠料田一丁、さて此山の神童の事は今より八十年ばかり昔此山の靈の樵夫此山にいりたるに年十五六ばかりにしていと〳〵清げなる童子あひたりしが其樵夫は家にかへりてやがて身まかりしとい ふ又今より六七年ばかりむかしにも此あたりの樵夫此神童にあひたりしに、このほかにもかの山にてあやしき童子のすまひどりするをみたる人ありしといふそは此山の御神なるかまたこのほかにもなくならんとしたりけるがほどなくよみがへりていまにながらへたりといふなほ此神につかへまつる乙護法などのたぐひなるかさだかなるをはしりがたし、また〔宴曲抄〕（玉林苑）に背振山の頂に龍池あり此池水底の石面に金ノ銘をあらはし龍宮大城に通して佛法所持の門とす役ノ優婆塞是を見て西ノ嶺に於て一乘菩提ノ法を行ひし處を金胎兩部ノ窟と云其跡今なほ存（アリ）て役行者と云又的（未詳）籠窟は乙天童の所爲なり、又〔三國傳通記糅抄〕に背振は山名又金龍山と云彼山寺は筑前國にあり乙護法とは其山に在神なり、〔書寫ノ御廟講私記〕に乙天童護法出現の靈地は背振の白宇津山にありなど見えたり、今白山權現の古跡とてあるところ是白宇津山なるべし、さて〔山門齋記〕に乙護法は性空上人に隨仕し神童なり、又〔背振山ノ緣起〕に辨財天十五童子あり乙天童護法はその第十五の化身なり云々、また〔宴曲抄〕に足利氏九州下向の時白旗を此神にさゝげて祈願ありしこと見えたり、又〔南朝記〕に南朝ノ天授元年三月筑紫ノ探題今川了俊大内弘茲前國世振山に陣す時に菊池肥前守松浦黨已下是をせむ今川がたの士奥山井伊笠原等討死すれども菊池松浦らが平うちまけて隙をさる、又〔茶湯記〕に建仁寺の開山千光國師栂尾明惠上人同船して入唐しけるが同時に歸朝す其時茶のたねを持歸りて〔玉林苑下筑前國背振山にうゑて岩上茶といふ上人是を栂尾に移しまた宇治にうつすなども見えたり、〕

巻〕に背振山靈驗夫海西に名隅あり背振山是なり、飛龍背をふりしかば龍樹權現跡をたれ德善大王辨財天乙護法の靈場誠に神秀の城（地）なるかな、建立の昔を數ふれ

は神功皇后の昔日新羅を責給ひしに祈誓の爲に草創一千余歳霜舊く（ふりて）瓦の松老たり佛法流布の前にさはかゝる樣ぞありがたきしば〳〵山下を望めば奇岩斜にそばたちて空洞深くとほれり洞戸に雲閉て鳥だにかけらぬ山の奥高々とそひへたる矢岳（ジイタケ）其頂に龍池あり水底の石の面には金の銘を顯はせり龍宮大城に通ずる佛法所持の門とかや役の優婆塞是をみて感を荷て行ひし一乘菩提の西ノ峰是也、胎金兩部の岩室波旬の類虐け獨籠の岩屋は乙天童の爲態とか遙に石稜廻々て幽々たる小篠原上々れば國見の岳清淨結界の靈地なれば結業煩惱の霧霞只一時に晴ぬべし、暫岩上に徘徊して閑に山川叢澤を見渡せば西は遙に松浦がた比禮振山も程近く曇らぬ鏡のうらなれば玉島川も影清し猶又北嶺を望めば玉櫛筍箱崎の松のみどり末遠く香椎の宮の杉村磯路を廻る鹿の島唐泊り野古の浦浪忽に隔つる雲のなかりぜばこまもろこしや百濟までも隔てはあらじとぞおもふ、さても尊かりしは傳教・弘法・慈覺・智證・渡唐の波を凌ぎしも先此勝嶺の雲をわけ祈願の眞をこらさしむ凡難行苦行積功累德の行人は歩を運て墨染の衣手寒篠巷苔の小筵霜冴て雪の扃の明暮は谷の清水を結上峯の爪木を取々に佛の道にぞ仕へける採草汲水拾薪設食の至以身而作牀座法華經を我得し事は薪こり菜つみ水汲理も思知れて憑し欣求淨土の便只此靈地にしくはあらじ云云、源家將軍の白旗を新に奉て三所の御殿に納めらる末代までのしるしもげに有難き山なれば山萬歳と呼はりて君をぞ祈たてまつる、〔貝原翁曰〕（是より已下細注までもみなこの翁の説なり）筑前國背振山は早良郡板屋村の西南にあり國中第一の高山なり、神社は尤高處にあり此社は神功皇后三韓御征伐の時祈のために立賜ひしまし宴曲抄に見えたり、板屋村より十二三町ばかり登て林あり又澗水あり（祓川と云）其處より十町はいと〳〵さがしき處にして老幼の輩は前なる人にとりつき後なる人に腰をおされて登る板屋より御社まで二十三町ばかりあり、（御社の側にちひさき黄楊の木あり其外木なし、其北に風穴あり絶頂より下には小篠多し〔宴曲抄〕にも幽々たる小ざゝ原なのぼりて國見嶽にいたるよしるせりさて山上にして四方をみれば筑前筑後肥前はさらなり肥後薩摩日向豐前らの諸山も打つらなりてみゆ、また秋にいたりて天氣晴朗にして烟霧なき時は朝鮮國もみゆ春月といへども曇らぬ日には壹岐對馬までもみゆる處なり、御笠郡竈門山夜須郡古處山など高しといへども此山上よりみればなほ眼下にあり又豐前國彦山高しといへどもなほ此山にはおよばず、毎年三月まで雪あり極暑といへども衣うすくして堪難きところなり、）

所在

風穴

東門寺　天台宗

社領

社人眞名子氏

いふ　寺院僧坊凡て三百區ありしといふ今も諸堂鐘樓などの礎のこれり（この僧坊の絶たるわけは昔此山なるちご油山の僧坊に逃込たるを此山よりかへすべき由いひつかはしけれども油山の僧徒かのちごかへさゞりければ此山僧徒いかりて西油山に火をかけて坊中をやきほろぼす是によりて西油山の僧徒又背振山にせめ來たりて是をやく此時より爾山の僧坊は大かたなくなりにけり、）天正の比まではなほ七十五町の神領ありしを中納言秀秋當國の主と成て此神領を沒收されたるに因て僧徒も此處を去て廢亡ノ地となりぬ、又此山の北ノ麓なる板屋村に北山ノ社とてあり是を下宮と云、（神體は木像にて六軀あり衣冠に男女の形を作れり上宮ノ神の眷屬なりと云）山上ノ社を上宮といふ上宮の神饌を調ふる社人眞名子氏はもと此山の神職にて北山ノ社の祭祀を掌り彼社の傍にすめり古は山上の坊にて神饌を

北山社

靈仙寺

調しかども山上衰へたる後は專眞名子氏の家世々相續て上宮ノ御饌を奉るなり、又此山の南東門寺より五ト町許に靈仙寺と云寺あり天台宗肥前國神崎郡に屬けり彼國より寄附の寺領有し故宮司知泉坊此山を下て彼國に行て靈仙寺の多門坊に居住して國は異なれども路程近ければ山上ノ社を掛て此社を守護したりとなむ今は彼國にも中宮下宮と云物あり、背布利ノ社も近比に故有て肥前國神崎郡に屬けり、

板屋

板屋村と云は背振山ノ麓高處に有て北面の地なれば甚寒き處なり民家十軒許あり背振山には村ノ間ノ原より上る椎原村より是まで一里半あり其間椎ノ原より眞名子ノ嶽まで坂を上る事一里あり眞名子より板屋まで下坂半里あり是を以板屋村ノ地の高き事を知るべし云々板屋村は背振山上宮の麓にして少東にあり上宮ノ下に谷多し其處に山櫻多し又村ノ中にも前なる山ノ側にも櫻多し他山ノ櫻よりは匂こまやかなり五ヶ山にも櫻多し河内ノ方尤多しと云へども板屋ノ櫻ばなほ夫レに三倍せり板屋は小河よりも奥深く地高くして寒ければ櫻のさく事も遲し大かた三月中より後三日を此山の櫻のさかりとす

祭神

○飯盛神社

絲起

〔飯盛宮古文書〕に抑筑前國早良郡平群郷飯盛三所大神宮者伊弉冊尊寶滿大神八幡大神也、文德天皇天安二年戊寅五月五日寅時天皇有夢想之事因奉爲清和天皇御願始而奉齋祀於飯盛岳焉清和天皇貞觀元年己卯勅使和氣朝臣清友創立於神社始定年中廿六度神祭置神主奉寄神封矣建立於神宮寺置供僧蓋中世之潤飾者也自爾已來爲鎮護國家神祠水旱疾疫及國家有事必國司郡司詣于廣前再拜兩段奉幣帛祈請之無不有神驗者至于今神靈嚴重種々異靈不可勝言也、伏惟諸冊二尊開闢之時產生大八島及山川草木其神功洪大焉百姓至于

祭事

社領

今被其恩賴矣神代之化現今時之盛靈因可仰可敬哉、〔文永ノ文書〕に正月武射料田三段地頭免在富永郷御供料田一町兩免一御輿修理料田一町二段兩免一町、二御輿修理料田一町國免富永郷金武名兩免在富長郷三ノ御輿修理料田一町兩免在富永郷白非違社修理料田一町九月九日料田三町兩免一町五段一町吉武名五段一町一町、王子宮修理料田一町在富永郷金武名五段兩免非違社修理料田一町在富永郷金武名五段兩免本地講一町兩免五段在富永郷五段在○懺法料田一町三段半兩免五段在富加部郷吉武名八段半在富永郷吉武名九月八日○○一町兩免在小田部郷上家九月九日河祓一否料二町兩免九月○○○此跡免在戸栗郷上家一町一段○最勝講田二町國免一町一町、內檢使奉幣料田一町國免在富永郷吉武名同仁王講一町○神宮寺修理料田二町國免在富永郷金武名醫王寺○○○○二町一町成助名二段彌武名二段成直名一段云云此處詳ならざるに因て聊はぶけり一敷地畠五節供田一町節別二段法華會田五段○○○○○田二段月二四段正月八月○○二月五月六月六段三月四月十二月一町吉武名定額田三町此頭免在○○郷上家舞師給田一町兩免在富永郷上家在戸栗郷職章給免一町四段兩免一町二段在戸栗郷二段在富永郷金武名命婦給田一町七段兩免四段二段上家○○二段上家宮田三段在小田郷貞本名一町在富永郷二段吉武名妙見田一段成貞名主九月九日馬追作食料田三段藤氏氏子正月三日同七日十五日三段權大宮司十一月シトギ田一段權大宮司神宮修正田一段宮師行增長樂寺修理幷佛正料田五段都合七十三町二段二杖杖は五尺なり則一歩なり散在神田六十八町七段二杖國衙地頭兩免卅五町五段四杖國

大宮司職

免廿七町九段五杖地頭免五町一段五杖敷地田四町五段〇敷地畠一町八段五杖一町二段二杖權大宮司二段三杖神人政所一段一杖藤原氏子二杖守繩（積次）三杖二段（長樂寺）文永八年四月廿七日宮師僧列（註）惣檢校丹治列政所矢田部列本司、（此齊前後虫ばみて全からず）〔永仁文書〕に宛行早良郡戸栗郷飯盛大宮司職事仲原助時所右以人爲彼職早令社務神役以下御公事任先例可令致其沙汰仍直人百姓等宜承知敢勿違失故以下永仁二年九月八日沙彌列、〔建武文書〕に飯盛三所權現御寶前爲毎月千度詣料足戸栗郷久留名（註）内（號ニ下ヒサゲ）二段事右田地者當社御寶前爲毎月千度詣料田可被致丁寧御祈禱狀如件、建武三年卯月十一日地頭御代官沙彌覺忍列、〔大永六年七月十七日御神領坪付〕に一所壹町飯盛宮燈油免姪濱興德寺一所七段大般若田作人興德寺一所壹町云云作正□（人）（脱）寺一所壹町供僧給作人油山一所七段飯盛宮御輿かざり田宗大和守殿一圓の御免右作人野芥大聖寺云云〔永祿四年正月十八日飯盛宮御社領坪付〕一通（其内を書抜く）一所五段燈油免興德寺分一所三段半大般若經免同寺分、〔諸神根元抄〕に筑前國早良郡飯盛三社權現中殿伊弉冊尊本地文殊左方寶滿大神本地十一面觀音右方八幡大神本地釋迦、飯盛は伊比毛利と訓べし地名なり〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國飯盛神社在早良郡飯盛山祭神三座伊弉冊尊（左寶滿明神右八幡大神）、〔和爾雅〕に筑前國飯盛神社在早良郡飯盛山所祭之神三座中殿伊弉冊尊左寶滿明神右八幡大神

祭神

社領

社領
神體
末社

所在

祭事

見于諸神記、〔筑陽記七卷〕に早良郡飯盛權現宮所祭伊弉冊尊也幷祭左寶滿右八幡已上三座也、〔緣起略〕云當社者人皇五十六代淸和天皇天安二年戊寅御願貞觀年中造立也、勅使和氣淸友下向神事祭禮執行之一年中之神事二十六度就中九月九日大祓而神幸之儀式殿重也、建神宮寺安置本尊文殊菩薩神領於當郡平群郷百三町寄附之各記錄存于今百六代後奈良院御宇及足利將軍之代末社領大半減之、百七代正親町院御宇豐臣博陸秀吉公悉沒收之神寶等者九國動亂之時亡失而今所存神鏡一面石獅子狛犬也祭禮九月九日形計執行之末社西王東王子今宮若宮楠殿春日明見宮司神宮司社僧幷兩部神職相雙祠之當郡之宗廟也、〔飯盛神社神玉文〕に葦嶽高祖□、豐浦嶽鷲王山、筑紫日向男性山彦山、雷嶽竈門山、下津濱小戸岩屋、筑紫日向女性嶽火見山、〔元祿十三年十一月棟札〕に本地飯盛山神宮寺眞敎院澄海（經）神主大藏姓靑柳權之進種昌などあり、〔貝原翁云〕早良郡飯盛神社は同郡飯盛吉武四ヶ村金武田村羽根戸野方凡て七村の惣社なり、御社は飯盛山下高岡有て夫を登る長路あり其奥右方にあり南に向て立り岡上境地廣し、昔は大社にて神領多く祠官も數多なりしと云今神職の家に古文書多く殘りて昔盛なりしと押計らる、古は年中祭祀多く又毎月朔祭又五節句祭正月十日騎射二月初午祭六月名越祓九月九日祭神輿渡御（今も昔の名殘として馬場の末に御輿休の石あり）十二月初卯祭あり今は

神宮寺

多く古法廢ると云へども正月三日御饌同十四日餅供同十五日には去年備へし粥の乾潤と黴の出るとを見て方角を指て其年穀の豐凶を試む、又社の南に文殊堂あり、又神宮寺あり天台宗なり、又〔師の說〕に早良郡飯盛神社昔は神田百三十餘町有し由文永二年の神官連判の田券あり其後義滿將軍の時神領を減ぜられ永祿年中までも猶神田數十町あり永祿神領の坪付けも今にあり天正年中豐太閤悉く沒收し給へり、古は山上に上宮あり中峰に中宮有しを後光嚴帝康安元年辛丑肥後國菊池武光七千餘騎にて征西將軍宮を奉じ博多に來たりて將軍方の城々を責む上松浦下松浦一黨神田・田平・畑・草野・筑前の原田・吉井・福井・深江・波多江・小金丸等五千餘騎飯盛岳上宮の地を城に構へて菊池が後を遮る遂に菊池方城越前守に落されたる事〔太平記〕〔九州軍記〕等に見えたり、其後天正年中にもまた原田より城を構へて大友方と戰ひしかば此時より上宮は廢しける又神寶も散失せり今殘る所の鏡一面唐石狗犬二口又石玉あり神體は金銅公卿官女形都合十一體あり、古文書多く散失して今僅に古の神官青柳氏家に傳はれるは文永文明嘉祿永祿の神田田券の類四通永仁年中の大宮司補任一通建武年中寄附狀一通足利直冬少武賴尙尊氏卿に叛きしに因て一色左京大夫入道道猷を九州の三奉行として下さるゝ時の永和二年の寄附狀ありて飯盛山に陳取すべき由載せられたり同國元岡兵衞次郎が跡地頭職を當社に寄らるゝとなり此餘は文書散失して傳はらず、道猷は一色宮內卿阿闍梨公源が嫡子にして九州三奉行の一人なり、此前年觀應二年一色道猷斃後國日田郡大原八幡に祈願を籠し時の寄進狀書體文章聊もかはらず全く是と同物也、又昔の神官青柳氏は古より平群郷の司職として兼て飯盛神社の大宮職を務たり其先は壬生氏なり土御門帝承元年中早良郡得永御領の田所職に補せらるゝ由の實朝將軍下文あり又一通平群郷田所職を補せらるゝ由の下文あり承元の下文よりは古く見ゆれども年號の處切れてしれず其後怡土郡原田氏の弟を養子として青柳の家を繼しむ是を青柳次郎重種と云是より實家の威勢あるに依て專大藏氏と稱す天正年中龍造寺隆信早良郡荒平城主小田部民部少輔を攻し時原田が幕下に屬して荒平の先登せし由〔九州軍記〕にも見えたり其後荒平の城代として國士曲淵眞奈子等と二人にて彼城を守る龍造寺より修行越前守を添られたり、

青柳氏

神體

古文書

飯盛城

○壹岐神社

〔文書〕に山門庄往松原大宮司知行之內寺社免之計可任先例御委細者大善亮申付候上者諸給人不可有違儀候仍如件嘉吉二年七月廿一日大宮司宛行道洗判と あり、此文書今に早良郡にあり、〔應神天皇紀〕に九年四月遣武內宿禰於筑紫以監百姓、時武內宿禰弟甘美內宿禰欲廢兄即讒言于天皇云云於是有壹岐直眞根子者其爲人能似武內宿禰無罪而空死云云今我代大臣而死之以明大臣之丹心則伏劒自死焉、〔宗祇筑紫紀行〕に九月廿九日生の松原へと云々やがて彼松原に至る云々引入て社あり御神

は熊野にておはしますとなん社のめぐりには古木あまたむらだちて木ノ下は茅原なり云々社壇の右の方に大なる松のしかも奇常ならず神さびたるあり　とあり、さて〔神社啓蒙七卷〕に壹伎社在二筑前國那珂郡壹伎地一所ノ祭之神一座壹伎直眞根子日本紀云云、〔和漢三才圖會八十卷〕に筑前國壹伎神社在二早良郡生松原中一（或爲二那珂郡一）祭神一座壹岐直眞根子（相殿一座熊野權現、）〔和爾雅〕に筑前國壹岐神社在二早良郡生松原中一所レ祭之神一座壹岐直眞根子相殿有二熊野權現一、（眷權宮神官系圖）に武内宿禰命娶二壹岐直眞根子ノ女豐子姫一生二平群紀ノ郡久宿禰一云々又織幡ノ神社ノ神官入江氏も眞根子ノ子孫なりと云、〔貝原翁云〕生ノ神社早良郡山門村生ノ松原にあり松原ノ半より少シ東の方大道より南一町半許にあり、御社は北に向て立り拜殿の側に御馬取御鞍石など云ものあり又國主織高朝臣の立給へる石ノ鳥居あり、（又云此神は神功皇后三韓御征伐の時御ともに仕奉りし神なればとて其吉禮を思ひて豐臣關白熟國退治の時にも此神に祈願有しと云、又生ノ社と逆松との間に秀吉公の休給ひし茶屋のあとあり、）又〔師ノ說〕に生ノ神社は壹伎直を祭る是本社なり、貞觀年中紀州熊野の比丘尼熊野三所の神を奉じ來たりて始て生ノ濱につく其三所を十六町ノ新宮大明神と當社と脇山ノ三所權現と三所に祠る然りしより當社を熊野權現とのみ云り、此社の緣起は下山門村百姓青木氏の家にあり即壹伎直の神孫の由にて代々此家より奉仕す近年松花山西光寺より奉祠するなり、彼青木が家に古文書多く傳はりたるが近年多くは散失せり其内に逆松を守護すべき由の探題の文書青木氏に當りたるが有しを夫も近年紛失せり、此家は舊家なり宅内に神功皇后の祠あり、又姪濱に猫天神社あり、此地眞根子の自殺せられし處の由云傳へたり大石の平なるあり是に座せられしと云猫天神は眞根子天神なるべし、（又云熊野の比丘尼の事は郡中處々に傳說あり脇山に尼の墓あり神に祀りたるもあり、此尼はいかなる人なりしにや機工にして山水を引て鈎樋を構へ山野を墾開して大に土田を作る今其潤有て彼村の百姓今に其賜をうく脇山にては横山三所權現と云近世宗像三神の由いへどもしらず熊野三所なり古來より奉仕の百姓あり十六町の新宮大明神の神官と共に小形氏なり脇山の神官今は島飼八幡の神官平山氏なり、）

○十二所權現ノ社

〔文書〕に此間度々承候十二所權現社領之事鎭元江申候處證文明白候條此上者兎角不レ及レ申之由被ノ仰候條任二先々旨一祭等其例堅固可レ被二相調一候再見參可レ申恐々謹言八月十二日宗あ青木左馬助殿とあり（宗あは小田部長門守をいふなり、）又一生世松原十二所權現諸免田之儀任二先代之旨一不レ可レ有二相違一候尤御祭禮之儀無二油斷一可レ被レ行事專一候仍如レ件天正九年辛巳三月十七日神代對馬守利昌（花押）同彈正忠家利（花押）青木左馬助殿とあり、（按ずるに十二所權現とあるは熊野權現の事にてすなはち生ノ神社同殿の神なり、）

○姪濱住吉神社

〔文書〕に早良郡姪濱惣廟住吉宮之内若宮八幡宮大菩薩燈油田貳段之内壹段者惣巫給之事任往昔由緒知行不レ可レ有二相違一之狀如レ件大永三年二月一日殿上宮内大夫とのへ右衞門佐（花押）とあり、（此文書ノ寫殿上家に持傳へたり、）住吉社は姪濱村の產沙神なり、官道の傍にありて南に向へり神殿幣殿拜殿石ノ鳥居あり、神官殿上若狹守是に奉仕す祭禮は（以下原書闕文）

名職

○白非違社

〔飯盛神社文永八年文書〕に白非違社修理料田一町在二宮永郷一五段兩免とあり、白非違は波久比爲と訓ムか、此社今は詳ならず、亟て按ずるに此伊郷にます神にて負せたる名か伊と遠とは開合のたがひあれども中古字音のみだれたる時のならひなればかくもかけるにや、

社領

○姪濱若宮神社

〔文書〕に筑前國姪濱若宮油田貳段事任二前々筋目一還付候無二相違一有二知行一社納等之儀堅固可被勤候者也仍爲二後日一一筆如レ件永正十六十二月十日姪濱所務代水勝判、殿上宮內太夫殿とあり、此文書は姪濱ノ社家に持傳へたり、若宮八幡宮は祭神宇佐に同じ、〔大永ノ文書〕に姪濱住吉宮之內若宮八幡宮云云とあり、神官殿上若狹守是に奉仕す、

祭神

○權非違社

〔飯盛神社文永文書〕に權非違社修理料田一町在二宮永郷一金武名一五段兩免五段國免とあり、權非違は碁牟比爲と訓ムべきか御名の義白非違權非違共に心得がたしもししひていはゞ檢非違使などの意にて祭れる神にてもあらむか、本社ノ式衰へて後此等ノ社も廢れたるなるべし、

社領

○十六天神社

〔文書〕に當所十六天神云云此處不レ詳今は鳥飼新五郎方致二奔走一已後重而勸請申候する時は從二其方一可レ有二御奔走一候少も相違之儀有間敷候何樣二申定候共若其方御違候する時は彼一筆入ましく候一代かはしに申定一筆如レ件文明十六年甲辰十一月廿六日麁原兵庫助□姪濱てんしやう殿是も姪ノ濱殿上家にあり又一通に野方村之內天神免とうみやう田壹段之事前々任二筋目一天上與太郎方可レ被二相抱一候由候尤可レ然候月別三度のみやかし被二相著一住右自今已後可レ被二相抱一候萬一無沙汰清酌之儀候者筋目之儀候得共別仁可申付候且者□家きたうのため二立置候免之事二候間別而可レ有二馳走一肝要候仍一筆如レ件永正十四年ひのとのうし正月廿日天上與太郎殿武藤主稅助長信花押とあるも同神なるかいまだ考へず、

天神免

○光行宮

〔文書〕に光行の御宮之事、本之天上知行の在所□今此間□□殿御持候雖レ然いち殿一代□□殿知行可レ有候一代すぎ御宮同たんなん事子子孫々てんしやう殿御知行可レ有候いらん申方あるまじく候仍爲二後日一一筆之狀如レ件、明應五年丙辰十月五日柴田勘解由直氏てんしやう殿渡狀とあり是も殿上家に傳はれり光行カ行光ノ御宮とあるは何れの神をさして云るにやいまだ考へず、

○飯盛西宮

〔飯盛神社文書〕に西ノ宮修理料田三町、二町兩免云云とあり、西ノ宮は爾志乃美也と訓ム

祭神

べし、是も今は詳ならず（摂津國なる西ノ宮ノ神を祭れるにや是は延喜式に菟原郡大國主四ノ神社とある社にて大國主ノ神を祭れり、世俗四ノ宮のえびすと云社なり、）

○興蓮寺

〔志摩郡壽福寺ノ文書〕に早良郡姪濱之内興蓮寺分之事、可ニ預遣一候先以令ニ存知一當務等調專一ニ候恐々謹言八月六日壽福寺　鑑綴判　とあり、姪濱の興蓮いまだ考へず、此文書もし興德寺をあやまるにはあらざるにやこはかさねてくはしくかむかふべし、

東西兩社

○飯盛王子宮

〔飯盛神社文永ノ文書〕に王子宮修理料田一町（現在ニ冨永郷）とあり、又〔同社ノ緣起〕に飯盛權現末社西王子東王子云云　ともあり、されば東西兩社ありしなるべし、今は總て詳ならず、

春日社

○飯盛妙見社

〔飯盛神社文永ノ文書〕に妙見田一段（成貞名主）とあり、〔同社緣起〕に末社云云春日妙見ともあり、此社も今は詳ならず、もし下に引出たる早良郡四ヶ村の妙見大菩薩とある社此神かいへるにてもあらむかたしかに考へ得ざればまづ二處に出して後日ノ考をまつになむ、（妙見ノ社は北斗星ノ靈を祭るよし諸社の註記に見えたり、春日社もいまだ思ひえず、）

○庄ノ天神社

緣起

岩木判官正氏墓

〔宗祇筑紫紀行〕に明れば廿九日生ノ松原へと皆同行さそひて立出侍るに大なる川を打わたし見れば右に一群の林ありすなはち聖廟ノ御社なり法施まゐらせそれより銘ノ濱とて鹽屋多く處のさまもさびしげなるを過て云云　とあり、〔姪濱殿上氏古文書〕に言上早良郡庄村祝言彌五郎一庄村祝言姪濱彌五郎同梅林彌十郎此兩人昔より取行申候所に彌十郎祝言役儀までにて身上なり不申候とて明石殿江奉公に罷出祝言役壹人に罷成候間隆景樣之御代に鵜飼新右衛門殿江申上候へは彌十郎縣落申上は彌五郎一人に庄村の祝言役之儀可仕之山被成御意于今無異儀彌五郎祝言役持候所に此比何國より罷出庄村の祝言役儀可仕由彌十郎申候て致迷惑候右之趣有樣被聞召分被下候はゝ可畏候若相違於申上者可被成御成敗候其時□之子細申上間敷候仍狀如件慶長二年十月三日御奉行樣祝言彌五郎、〔貝原翁云〕早良郡庄村ノ天神ノ社は村翁の傳說に菅公左遷の時先此處に着給ひぬ其折ふし法淨寺と云眞言寺に一宿し給ふ（此寺昔は今ノ天神ノ社ノ西ノ方にありしと云今はなし）是に依て後世菅公の御社を建たりと云かゝる由ある處なる故此潟にて燒たる鹽を昔より今に至るまて八月太宰府天神祭禮の時神厨に捧ぐ此御社事〔筑紫紀行〕にも記せり（又云庄村の西ノ端に竹林あり其中に石佛あり村民是を岩木ノ判官正氏が墓所なりと云て甚おそる、此正氏は奥州の國主の山見女の物語に云傳へたり、）

○妙見大菩薩社

所在

〔文書〕に圓覺寺被仰候事令言上候一五ヶ村名主百姓之所へ御定之辻之事龍山一卷之事五ヶ村ゟ外切るべからずの由御郡主遠田石見守兼常一通受取度候宮跡之趣者明白云云（此處文なし）一因掃部頭方之非道之儀第一山ノ神明妙見大菩薩ニ而御座候御宮所こと〳〵く切拂宜材木者諸人ニ御うりニて皆切盡剰御社用木者於ニ社内一すみかまを拵させ炭をやかせられ候御宮も悉〻御滅却被成候其上田代も水足かれ申故ケ樣之非道者いかがと存候何レ御家人一人御見分ニ被レ遣候而樣子を得と見させ御分別可レ被レ成候鞦御所務も可相調候恐々謹言天文三年三月二日家光式部丞殿四ク村同心とあり、（此文書今も早良郡に傳はれり、此社早良郡四ヶ村の内にあるべしいまだ考へず、龍山圓覺寺の事は次の卷に引出ていふべし、）

○正覺寺

〔永祿四年正月十八日飯盛宮御社領坪付帳〕に一所五段浮殿免正覺寺抱分とあり、正覺寺の事いまだ考へず、

○崇德寺

〔同帳〕に一所五段内藏田崇德寺抱分とあり、崇德寺の事いまだ考へず、

○老松社

〔東入部村ノ傳來ノ舊記〕に一早良郡東入部村老松宮御知行之事往古内裡御領之時

社領

緣起

爲ニ御立願一對ニ天滿宮一日別御供米御社納候、爲ニ其代官一我等先祖樋口和泉守從ニ京都一被ニ差下一候至ニ于今一爲ニ庄司一在庄候、加官等事、先祖者從ニ京都一被レ下候其已後從ニ社家一相補事候又從ニ武家一被ニ相補一事候、其時之御社領東入部・西入部・浦郷・大塚・古賀・本城之内四拾町八段爲ニ御供田一領知候、其比和泉守當社建立被レ致候本社三間四面檜皮葺舞殿壹間半武間瓦葺拜殿武間半五間瓦葺其外末社鐘築堂御供屋籠門鳥居反橋迄建立仕候、其後肥前自荒平城責崩當地下、宮社不レ殘燒拂候而樋口伊豆守只今有レ之寶殿等一手而建立被レ仕候、其外末社鐘築堂至迄止存候得共太閤御代之時惣而之社領被ニ召上一候付不レ及ニ自力一其後先祖樋口修理正被存候者責而御緣日一箇月一日御供三寸備申度旨而數箇年之間備申候其後樋口平左衛門代之時我々一家打寄宮座仕立申候得者當村中又者西入部村自加利申候云云座席相極申候而其座々々名蹟書付札打申候條何茂其心得可レ有レ之候以上午七月廿五日宮座衆中、東入部村神主樋口治六とあり、（安樂寺御領目録に早良郡之内入部八拾町付内野村とあり此古文書と符合せり、）

筑前之五（早良郡上）終

名義　油坂　緣起

筑前之六

○早良郡下

○油山天福禪寺

〔聖光上人傳〕に善導寺（筑後國）開山聖光上人諱辨長順乘堅者孫息筑前國香月庄人也云云年二十九建久元年（庚戌）也次年補二一寺油山學頭一學徒諍レ席衆人成レ林矣とあり、油山阿夫良也万と訓ムべし、名義は昔法持僧聖賀早良郡油山に居て胡麻を多く作り油を搾（シボ）りて筑前五所ノ勅願寺に送る故に油山と云由語傳へたり、（又云或時油山ノ僧寂忍と聖賀と油交易の爭論を起しけるこの事を聞て太宰府より人數を遣はし油を押へて五ケ寺へも遣はさず太宰府に取むとせしかば聖賀喚儘を發し志摩郡長垂山にて油瓶を打破る是に因て其所を油坂と云其後油を送る事長く絶たりと云、或人云古に油坂と云は早良郡野方より背木上ノ原ノ方に越行く坂を云り今は蔭が坂と云、）さて〔洪鐘ノ銘〕に太宰府之凡博多津之离有二練若一號二油山一嶺生二眞松一焉群仙古居硎有二飛泉一矣諸侶去垢爰佛子禪念昔訪當寺剃髮受具今住他鄕發願鑄鐘消露朝于海土壎崇子鳧氏成レ功必遂三々之白業鴻露形悉驚五々之昏沉、于時文應辛酉年沽洗庚午日大檀那比丘禪念故郎三綱眞之息鑄工沙彌生蓮、作レ銘曰、陰陽之工、乾坤之銅、造化異品、陶冶施風、油山靈嶺、玖州敬崇、英檀盡レ力、功匠成レ功、木人叩レ之、銕關自通、泥牛鳴レ之、堅牢忽融、三千等覺、九品共逢、報及群類、化被無窮とあり、（此鐘は周防國宮市ノ天神ノ社に在て高さ三尺四寸龍頭九寸徑二尺五寸厚さ二寸八歩あり、）〔筑陽記上卷〕に早良郡油山大山也、往昔山上有二龍樹權現幷天福禪寺闌若三百六十坊一礎遺二于所々一塚穴數多村落在二山西麓一、東油山村觀音堂千手座像長七尺行基菩薩之作也當國三十三所巡禮十番之札所也往昔有二僧坊三百六十區一云、傳云此靈像者往昔博多承天寺四世平世和尚建二立精舍於當地一號二泉福寺一其本尊而堂院輪奐降二于中世一衰替、寺院滅絕、僅大士像存而已累年當邑西宗寺供二香華一覃二元祿七年甲戌一承天寺住侶大川比丘歎二靈蹟殄泯一雖レ欲レ再二興之一云云當國所レ有院號上疏之時泉福以二廢寺一漏レ之故今不レ得二再興一幸承天寺之末院正覺寺在二志賀島一及二衰微一至レ亡二其碍一以取二庸彼寺號一經二一宇一令レ看二守大悲之靈像一也、正覺者臨濟宗博多承天寺之末院也とあり、龍樹權現ノ社今は山下に移して九月十九日祭禮あり、（油山は福ノ岡の南にあり高山なり山下より嶺まで二十町許あり此山ノ麓東西に村あり西油山東油山と號す其間一里あり西油山には大石多し民家は處々大石ノ間にあり、）今ノ油山村ノ地昔は中河原と云り、權現ノ社初は山ノ七八分許にあり、（社ノ下に千石岩とて大岩あり長四間横二間あり夫より遙下につぶて石とあり横一間長□間許あり四角にして削成せるが如し社趾といふものあり）其東に泪ヶ原と云處あり古塚多し是レ寺僧を葬し地なりと云、昔脊振山ノ兒西油山に遁入たるを脊振ノ坊中より返すべき由申遣はしけれども返さゞりければ脊振ノ僧徒怒て西油山ノ坊中を放火す是に因て西油山の僧徒又脊振ノ坊中を燒く此時兩山ノ坊中絕たりと云、東山ノ寺をば泉福寺と云是も禪寺なり開山は平田慈均和尚とて聖一國師四代ノ法孫なり東福寺ノ末寺なりしと云是も僧坊三百六十區有しと云いつの代に亡びしにや昔ノ本尊觀音のみ殘りて草堂あり僧坊は一字も無りしを近年或

正覺寺　祭事　油山　泪ヶ原　泉福寺

僧觀音ノ北に僧舍一區を作りて觀音を守る、此處人里遠くして俗塵を放れ閑寂の地なり北ノ方なり且南庭に清き池水有て泉福ノ名に合り觀音堂は山ノ半より下にあり を望めば海邊まで眼下に見えて風景すぐれたる處東油山ノ村よりは十二町あり正月十八日に此觀音に參詣するもの多し、

○飯盛神宮寺

〔文永八年四月飯盛神社文書〕に神宮寺修理料田二町國兎在宮永郷金武名〔飯盛山神宮寺文珠佛（眞木二尺八寸二歩）銘〕曰飯盛山開闢鎮座智惠大聖文珠像一體永仁六年八月五日奉作始之佛師播磨坊實名（實阿彌）此時大檀那當寺本願因幡二郎左衛門尉康成（法名淨）當寺○○承深○○院次永仁六年八月五日（申時）奉レ造レ之佛師晋權（官）大佛師○○大檢校○○○○三年九月廿五日（申時）水精開眼長老同前勸進聖覺淳○○○○知○○檀那因幡四郎永康次暦應三年（庚辰）自八月七日（卯時）九月廿九日奉レ塗レ之佛師京都東寺大工源兵衛尉政貞奉行鏡秀房淨通知（可）事○○○○○○○○了融觀一房次康永元年（壬子ノ下三位房行名百脫之）壬自六月八日至二七月廿日一奉綵色繪師祝祝大工治部房實名良心弟子奉行良密房同七月九日（當寺開山十三回忌○也）開眼供養（平座曼陀羅供）導師恵多大乘寺長老曉海信證上人（寺ノ僧ノ請ニ五ケ）同十五日奉レ安ニ置本尊ノ畢寺住ノ僧朝春（禪親房）了融（觀ノ一房當寺ノ長老）琳幸（教一房）覺○○○○○春卿（良密房）勝（知）○○○知事）玄清（○知房）○○（淨瑜房）尊信（良儀ノ作）○○○房了惠（覺印房）覺尊（良仙房）覺融（心觀房）○上形同……（已）上將軍家檀那方當所給主覺忍并子息○家人等田村大敵覺○○○○○○家等（人ノ下脫）覺源同妻室子孫家人覺吉妻子○○○○○大宮司盛神妻子孫家人等當寺行者○等寺邊住人貴賤等右現當二世

悉地圓滿造立如ノ件康永元年壬七月廿五日記レ之畢求法沙門衆首了融記レ之、〔永祿四年正月八日飯盛宮社領坪付〕に小柳一所五段坂上一盆田神宮寺抱分、〔元祿十三年十一月ノ棟札〕に本地飯盛山神宮寺眞敎院澄海、神主大藏姓青柳權之進種昌など見えたり、〔師說〕に神宮寺は飯盛山眞敎院天台宗にして叡山の末寺なり、本尊釋迦如來なりしを今は文珠菩薩を本尊とす、開基は永仁年中なり天文天正の兵亂に守僧もなく成て僅に文珠堂のみ殘れり寺寶佛像盡く朽損散失す、此寺ノ緣起今に予ノ家に藏せり、近古再興して今の寺となる、因古文書など本社ノ棟札を彼寺に納む彼寺元祿年中より神祭を勤む鍵預を用ふる事は正德年中青柳主計主神闕職ノ後の事なり、また〔古文書〕に（九州筑前國早良郡崇廟飯盛權現本地神宮寺本尊釋迦也貞觀元年己卯七月三日御託宣次第文德天皇天安二年戊寅五月五日寅時天皇夢想御覽諸卿評定有所瑞想現種々靈異五尺許明鏡紫震殿ヒカリカゞヤキテ雷電稲光一丈余之獅子ホエサケブ、十三四計之天數十人バカリムラガッテ庭ニミユ同南庭白鹿書クハエテ來其書此宮無レ知彼寺繁昌セストモ吾寺廢レバ吾無レ故千庭歩逝詣下云トモ無レ驗只空去世ヨリ無レ改中天靈鑒山少モ不レ違山也縱宮繁昌セストモ吾寺廢レバ吾無レ故千庭歩逝詣下云トモ無レ驗只空去世ヨリ無レ改中天靈鑒山少モ不レ違山也故釋迦如來○○吾淨土トモ云ナリ昔於靈鷲山聽聞法華經今有二神宮寺一受諸法門誠ウレシトモ誠思事云イ置攝々未來可備之也又其後爲勅使和氣清友下向神事佛事被始神宮寺十二月佛性燈油被寄同修理田四町三段修正田一町二段又一町三段ヨセラルヽナリ正月十二日ヨリ供僧被置次第佛事被始也長老淨遊上人持律僧也供僧昔門下也貞觀元年己卯十一月十二日行平樂平とあり、〔師說〕に文證を考ふるに是は古代神社佛寺等創造の時の緣起は別にありしを其後燒失などして後人の僞作したる物なるべしされども是も文鑑倉の末か足利家の比かの書證とみゆれば暫く疑しきは闕て正しきは證とすべし、

○長樂寺

〔飯盛神社文永八年ノ文書〕に長樂寺修理并佛正新田五段とあり、〔師說〕に長樂寺修

理并佛正料田いにしへ吉武村にあり今其趾に觀音堂あり因て觀音ノ森と云神宮寺の巽二町許にありとあり神宮寺天台宗なれば是等も皆天台宗なるべし、

○飯盛ノ醫王寺

所在

〔飯盛神社文永ノ文書〕に醫王寺云云二町一町成助名二段彌武名二段成直名一段云云とあり、是等も飯盛神社の坊中なれば天台宗にありしなるべし、醫王寺の跡今は詳かならずなほよく考ふべし、地理の事り今はさだかならざれども修理料田數町におよぶ所なれば神宮寺にならぶばかりの佛閣なりしならむ、

○大聖寺 野芥

所在

〔天正年中小田部紹叱子息九郎荒平籠城諸侍家名記〕に寺方・善忠坊・大聖寺・光孝寺・三會寺・上行坊・永林坊・とあり、大聖寺は早良郡野芥村にあり本尊并宗旨等ノ事は重ねて考ふべし此外の寺どもは其所在詳かならず、

○神松寺

〔醫德山神松寺文書〕に當事之事自德壽院委細示給候得其心候陶殿國役之時儘至于今郡内事成敗候自寺家も可爲以前之儘之由示給候肝要候聊兼通不可存御等閑候郡内寺社無御勤之由是又不可有其隱候哉仍爲後日一筆如件正月廿五日神松寺住持禪師石見守 道兼 在判、通兼は大友家の士なり、また當寺諸默役已下之事任先例可令停止之旨堅固申付候畢若有違聖仁者就御左右可加成敗候恐々謹言五月三日神松寺侍者禪師、武總判ともあり是は文應元年の文書なるよし書入ノあり、〔同文書〕に太府宣太宰府廳官人等可早任廳宣落字あるか筑前國早良郡神松寺事、右寺者可爲祈願所之狀如件者在廳官人等宜承知依宣行之以宣天文七年七月三日大貳多々良朝臣判とあり、〔貝原翁云〕早良郡片江村神松寺は鎮守に天神老松ノ兩神を祭るに因て神松寺と號すと云、又本尊に藥師を安置するに因て醫德山と號すと云、開山は聖一國師五代ノ法孫南谷聖爽なり永享年中に開基せりと云、南谷和尚永享二年ノ置文あり天文十四年大内義隆より寺領二町五段寄附ノ狀あり其外文書多し然れども今は寺絶て本尊及開山の畫像のみ民家に殘れり寺地も民の栖と成れり、

所在名稱　開基　寺領　畫像　社領

○興德寺

〔飯盛神社文永八年ノ祭式〕に十二月廿日大般若興德寺ゟ御きんじ候興德寺ゟ油三升宮升をさまり候、又〔大永六年七月十六日神領坪付〕に一所壹町飯盛宮燈油免姪濱興德寺一所七段大般若田作人興德寺云云、〔善鳴錄四卷〕に即菴禪師諱宗心云云首住筑之廣德ノ歷董豐之圓福万壽筑之報恩崇福とあり建武以前の人なり又〔永祿四年正月十八日坪付〕にさるの上一所五段燈油免興德寺分一所三段半大般若經免同寺分、〔藤孝九州道ノ記〕に六月三日姪ノ濱興德寺ノ住持耳峯玄熊和尚和漢興行あるべしとて發句所望有しに公儀此所まて御成の沙汰あれば張興は成がたかるべしとて發句を書遣はして入韻所望せしに

かぜかをるみなみをまつのとぼそかな

〔筑陽記七巻〕に早良郡海晏山興德寺臨濟宗南浦明智大應國師之開基也、二世弘宗普門禪師即菴和尚也十里松間崇福禪師爲二本寺一、崇福寺開山大燈國師大應之法嗣也、然彼寺當國守先祖如水長政兩公之菩提寺而一國當宗總禄也以二當寺一爲二末院一也、當寺元有二下野間町一天和二年壬戌正月十七日罹二市中火災一燒失同年崇福寺住職質休和尚移二地於光明寺舊跡一再興之今地也、末院十三箇寺大應國師自書自讃像同木像大德寺江月和尚一木像とあり、さて〔貝原翁云〕姪一濱に海晏山興德寺と云禪宗濟下の寺あり創立の時代詳ならず大應國師南浦明和尚〔本朝高僧傳廿二巻〕に釋紹明號二南浦一姓藤州安部縣人唐土より歸朝の時此寺に來たりて三年居住す其時此處の尼大應一繪像を書せ贊を乞ふ大應贊を書て與ふ其掛軸今此寺にあり大應國師は其後御笠郡崇福寺に住持せり、興德寺初は市中に近かりしが天和二年光明寺と云廢寺有しを壞ちて其跡に移せり、光明寺の開山一庵は大應一弟子なり光明寺に其木像有しを今も興德寺に安置せり、昔興德寺に子院八區あり其内白毫寺東光寺檀林寺三樂院は猶殘りて姪濱市中處々にあり其餘の四區は皆廢絶して今はなし、

〇壽寶寺

〔文書〕に就二博多津稱名寺烟禄之儀一覺阿爲一之再興之由候條御分國中材木之事得二上意一候然者當郡之儀右之旨不レ可レ有二餘儀一候恐々謹言、大永八戊子年閏九月廿五日壽寶寺御近習御中親連書（堺下ノ列）とあり、淨□宗遊行派の寺にして博多稱名寺の末寺なり、早良郡石丸村にあり、本尊ならびに寺地等の事なほよく考ふべし、（覺阿は稱名寺の住僧なり親連は大友家の士にして田原姓なり、）

〇圓覺寺

〔本朝高僧傳十九巻〕に釋道隆號二蘭溪一冉氏宋西蜀涪江人云云泛レ海著二太宰府一本朝寛元四年也時年三十三寓二于筑之圓覺一明年入二都城一〔豐鐘善鳴錄四巻〕に豐後州長興寺秀山禪師諱元中云云出二世筑之圓覺一歷徙豐之長興筑之聖福相之瑞泉とあり、是は貞和の比の人なり、〔同巻〕に蘭溪禪師諱道隆姓冉氏云云乘二商舶一著二博多一暫止二圓覺寺一とあり、是に因て考ふれば圓覺寺は博多にあるか、〔文書〕に尊札之趣對五ヶ村地下人等可申聞之由得其意候然者彼公事都鄙として高景速可申付事□蒙レ仰候此儀者勿論之事候先郡代方の一通等幷當寺之衆御連書證據たるべからずのよし是又仰かうむり候條難二恐意及一殊二彼龍山之事者神代右近將監正綱と小早川高景と兩人知行之山二御座候公事之趣一よつて御寺領分之山之山近年事新々被レ仰事者迷惑二御座候右之趣入部之百姓等申候條如二尊意一右之譯一應之外別之子細なく候次二自余之方方返狀之事蒙仰候間御注進之時相調へしんし可レ仕候此由爲レ可レ得二御申入一候恐々謹言、天文十三年三月廿一日圓覺寺侍衆尊文江豊とあり、（此文書も

緣起

大應國師像

光明寺子院

所在

蘭溪和尚

寺領

早良郡に傳はれり、圓覺寺の事いまだ考へず、

○大圓寺

所在

〔文書〕に聖福寺領につき龍山之儀各連署之狀ひけん仕候右之趣不レ及二分別一候其故者彼山者いにしへこのかた寺家より申つけられ候而相留候事其かくれなく候所今に至て如レ斯きの違亂者對二寺家一ては御相違と存候能々御分別可レ被レ成事專一二存候御心得之ため申入候恐々□五ヶ村各御中大圓寺住職用秀書判、就二筑前國早良郡西山村山之口之儀一役儀之次第莊主受持之主大圓寺用秀と新原榊警固西山牛尾曾賀部彼五ヶ村五名之衆申詰候子細相尋候處從二五ヶ村一聖福寺和尚之尊札幷前郡主石見守殿此兩通神代武總殿御證據有之二よつて大圓寺住職用秀相極候云云（此所文九名く）西山村牛尾次郎太郎始五ヶ村として重々山支配可レ致也此上兎角違亂之儀候者何時も郡職時役人等可申遣候也天文廿三年十二月廿八日五ヶ村地下之内新原讃岐守判とあり、（此文書も早良郡にあり、）大圓寺は早良郡福岡大圓寺町にあり、淨土宗鎮西派にして寺は南に向へり此寺の舊地一事いまだ考へず今の所は慶長の比の築地と聞ゆ、

○東門寺

寺領

〔鰐口一銘文〕に奉寄進背振山東門寺大日堂之御寶前天文七年六月吉日施主結城刑部丞房實敬白、（脇山村池田にあり、）〔文書〕に筑前國早良郡之内背振山東門寺領横山三十六町之内圓覺坊領中山村之内北田下より武段地之事與四郎代々抱來候所田中左衛門と申諸子細於二郡職東門寺一相決候所與四郎申分者去永正七年庚午十二月七日秀準一通同享祿三年庚寅十二月八日長曉一通彼兩三通明白之上者與四郎申處無レ紛者也於レ然者任二地頭案堵狀之旨一年公事諸天役以下堅固二遂其沙汰可二相拘一也仍爲後代證文之狀如レ件天文廿年辛亥五月十日與四郎所江法印永賀書判成就坊秀公書判圓笠坊長曉書判〔肥陽古跡記〕に背振山極樂東門寺乙護法善神は天竺國の主德善大王十五番の王子也神通自在の人にて龍馬に乘て虛空を翔り東方に去て此國鬼門當山に飛著給ふ時に彼龍馬背を振て空に向ていなゝく事三度是に依て山の名を背振と云と云り、德善大王の御后は辨財天の化身にて座しける御夫婦王子の別を悲給ひ釋尊十八代の祖師龍樹菩薩に向て王子の行方を問せ給に龍樹菩薩の云是より東日本扶桑國の西背振山に垂跡し給ひて衆生利益の大願を滿しめ給由答給へり其時大王夫婦龍樹菩薩の神力に乘じて刹那の間に此國に飛著給て各神とぞ現れ給ひける、本地は不動明王上宮は辨財天也、東西陰陽の二池あり、護法善神の乘給ひし龍馬石と成て侍り抑此山は神功皇后三韓御退治の時五壇の座を構へ天神地祇を祈給ふ其中壇是也、又傳敎大師渡唐の時十人の弟子を具して善神の御前に詣給ひ求法成就の祈願在しに護法善神の目前に現給ふ色赤くして鬼神の如し左の御手に鐵杖をつきて大師に向て云吾は是三世の諸

緣起

出世ごとに出現して佛法を守ル事隙なし今大師ノ求法所願も速に納受せり吾守護を加へて成就せしむべしと曰て影の如くに失せ給ひぬ大師感心し給ヒて御歸朝ノ時又此山に登りて石上と云處にて自藥師佛の尊像を造て東向に御堂造立し佛像を安置し給ふかゝる佛法守護の善神なるに依て弘法智證慈覺慈惠の諸大師皆入唐求法を祈て各大願を滿足したまふ、弘法大師歸朝の時上宮辨財天に詣給ひ四十九院を建立し給へり其跡今もあり和銅元年元明天皇ノ御建立にして湛譽上人ノ中興也、或時天皇御惱頻に座て諸寺諸社に御祈願せさせ給ふ或夜ノ御夢に鎮西脊振山ノ住侶湛譽上人ト云僧を請じ給ひ三寶を祈給はゞ御惱忽に平愈し給ふべしとある御告に天皇叡感まし〳〵て勅使を下し上人を請給ふに云云空中に飛去て二度見へ玉はず勅使歸洛して其の趣を奏す天皇の御寢殿に錫杖の音度々しけるに云云御惱本復まし〳〵けり湛譽上人は地藏菩薩の化身と申傳へける其後葉上僧正千光國師入唐座て歸朝の時初て我朝に茶ノ種を渡し此山に來て彼茶ノ實を取り出し石ノ上に投給へば忽ち生出し國土ノ茶とぞ成にける此種を分て梅ノ尾槇ノ尾に植今又宇治ノ里蔓れり此葉上僧正は都五山建仁寺の開山顯密禪祖師也千光國師茶ノ實を投給へる石ノ下に寺を立て石上坊と云ふ今もあり其茶ノ大サ一丈許にして枝四方に榮え廣さ十余疊にして木立うるはし日本ノ茶是れより始まれり、（岩上茶と號するよし古き〔雜抄〕に見えたり）

湛譽上人

葉上僧正茶ノ始

石上坊

所在

性空上人

り、〔舊說〕に元明天皇の御時此山の僧湛譽と云しもの朝廷の祈願をなせし事〔宴曲抄〕に見えたり、東門寺の跡は南方ひくき所にありて大日堂觀音堂鐘樓の跡のこれり又東門寺の敷地は東は御笠郡通古賀北は那珂郡仲村西北は早良郡東入部村燈籠堂を限る燈籠堂は重留村の境道の側田の中に塚有て大なる立石二つに梵字を刻あり西南は肥前國松浦郡鏡里に至る近世領するは横山四十町なり、又建仁寺の開山千光國師宋國より歸朝の時宋國の茶實を持ち來りて筑前國背振山に是を植、又其後性空上人の此山を開給ふ、然るに叡山根本中堂に於て安鎮ノ御法を行はれしに此書寫より其の事を知て居ながら音樂ノ役を勤給ふ其時寺より御布施を引進けるに性空上人の御形見え玉はねば御布施なかりし其時乙護法善神天眼を開き此事を知らしめし刹那の間に中堂に至り彼上人の御布施を乞申されけれども人々善神の勢に恐れてあきれ居たりしかば善神飛上り中堂の內陣に立置たる大錫杖の輪を引切て打うせ給ひ則書寫山に至り上人に献し給ふ是背振の神の名譽なり今そのかねの輪は書寫山第一の御寶物とて秘してあり、東門寺は背振神社ノ宮寺にして天台宗なり寺院僧坊凡て三百區有しと云を油山ノ僧徒と爭事有て互に燒亡ほせりと云、今も諸堂鐘樓等の礎殘れり、（天正の比までは尙僧徒ものこれりしを小早川秀秋の時領地を沒收せられて僧徒も此處を立去て寺地殘廢亡におよべり）〔筑陽古跡記〕に背振山は昔三千坊の所にて坂本千坊・東谷千坊・西谷千坊なり同座主坊修